

k-556

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第62集

# 大樽遺跡

## 第2・3次発掘調査報告書



大樽3次調査出土蓋形土器

1999

米沢市教育委員会

**大樽遺跡  
第2・3次発掘調査報告書**

平成11年3月

米沢市教育委員会

## 序 文

本書は民間の宅地造成に係わる受託事業として、米沢市教育委員会が実施した大樽遺跡第2次、第3次の調査報告書です。

大樽遺跡は本市の南西部に位置する館山地区にあります。この地区は吾妻山を源とする大樽川、入田沢から発する小樽川が合流する場所であり、以前から果樹地帯として知られ、特にりんごは「館山リンゴ」の名称で親しまれています。自然豊かなこの地域からは、これを物語るかのように、河岸段丘面等から土器や石器が採集されています。

調査では、数多くの遺構・遺物が検出され、広い分布域をもつ縄文時代から中世までの複合遺跡であることが明らかになりました。出土土器の文様は新潟県や関東地方との交流を示していると聞いております。

埋蔵文化財は、我々の祖先が今日まで大地に残した歴史であり、かけがえのない遺産です。この国民的財産である文化財を大切に保護し、さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継ぐことは、私たちに課せられた責務と考えております。

近年、道路や宅地造成等の事業に伴い、発掘調査を必要とする事例も増加の傾向にあります。本市としましても、適切に対処するとともに、埋蔵文化財保護のためさらなる努力をいたす所存です。今後ともご支援ご指導を賜りますようお願い申し上げるとともに、本書が文化財保護への啓蒙や学術研究・教育活動の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において格別のご協力をいただきました文化庁はじめ山形県教育庁文化財課、鈴木金造氏、株吉田建設並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成11年3月

米沢市教育委員会

教育長 相 田 實

卷頭図版1（第3次調査）



▲第3次調査遺構全景（空中写真）



▲第3次調査出土遺物

卷頭図版 2 (第 3 次調査)



▲DY 63 遺物出土状況（北東から）



▲DY 47 完掘状況（西方から）

## 例　　言

1. 本報告書は宅地造成に伴なう緊急発掘調査として、米沢市教育委員会が実施した大樽遺跡第2次、第3次発掘調査報告書である。
2. 調査は米沢市教育委員会が主体となって、民間会社との受託事業として実施したものであり、期間は第2次調査が平成9年5月1日～同年5月7日まで、第3次調査は平成9年5月6日～同年7月4日まで延べ65日間であった。
3. 調査体制は下記の通りである。

調査主体 米沢市教育委員会  
調査総括 舟山豊弘（文化課長）  
調査担当 手塚 孝（文化課文化財係主任）  
調査主任 菊地政信（文化課文化財係主任）  
調査参加者 小浦文吉 高橋信子 佐藤四郎 下村映子 黒沢富雄 松本三郎  
武田房次郎 黒沢栄美子  
事務局 小村伸一（文化課長補佐）  
山本 卵（文化課文化財係係長）  
平間洋子（文化課文化財係主査）  
調査指導 文化庁 山形県教育庁文化財課  
調査協力 鈴木金造 吉田建設㈱

4. 掘図縮尺は、各図にスケールで示した。遺構平面図の方針記号は真北に統一した。写真図版の復元土器は縮尺不同とした。
5. 本報告書で使用した遺構、遺物の分類記号及び、遺物等の図化は「米沢市埋蔵文化財報告書第15集」に沿っている。
6. 遺構出土の遺物については一括して挿図に示した。「f」は遺構の覆土を表わす。
7. 遺構等の土層については、『新版標準土色表』（小山、竹原1973）等を参考にした。
8. 本報告書の作成は菊地政信が担当し、全体的に手塚 孝が総括した。責任校正は山本卵がその責務にあたった。トレース、遺物整理等については、近野慶子 高橋信子 黒田よし子 小浦文吉 長澤由紀が補助した。

# 本文目次

## 序 文

## 例 言

### 第1節 大樽遺跡第2次調査

1 遺跡の概要 .....	1
2 調査の経過 .....	1
3 検出遺構 .....	3
4 出土遺物 .....	3
5 まとめ .....	3

### 第2節 大樽遺跡第3次調査

1 遺跡の概要 .....	7
2 調査の経過 .....	7
3 検出遺構 .....	8
・概要 .....	8
1) 土 壤 群 .....	8
・早 期 .....	8
・前 期 .....	8
・後 期 .....	12
・中 世 .....	33
・近 世 .....	34
・現 代 .....	34
4 出土遺物 .....	35
・概要 .....	35
1) 繩文土器群 .....	36
・早 期 .....	35
・前 期 .....	36
・後 期 .....	39
2) 瓦質土器 .....	40
・中 世 .....	40
3) 石 器 .....	67
・細類 .....	67
5 まとめ .....	84
参考文献 .....	84
報告書抄録 .....	88

## 挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置 1 図 .....	2
第 2 図	第 2 次調査区遺構全体図 .....	4
第 3 図	第 2 次調査遺物出土点平面図 .....	5
第 4 図	第 2 次調査出土遺物実測面(1) .....	6
第 5 図	第 3 次調査遺構分類図 .....	9
第 6 図	第 3 次調査土壤平面図(1) D Y 13, 78 .....	13
第 7 図	第 3 次調査土壤平面図(2) D Y 101, 120, 127, 34, 200 .....	14
第 8 図	第 3 次調査土壤平面図(3) D Y 83, 52, 68, 74, 40 .....	15
第 9 図	第 3 次調査土壤平面図(4) D Y 114, 94, 73, 64, 84, 70, 35, P 13, 14, 19 .....	16
第 10 図	第 3 次調査土壤平面図(5) D Y 47, 49 .....	17
第 11 図	第 3 次調査土壤平面図(6) D Y 39, 81 A, 81 B, 109, 51, 50, P 3 .....	18
第 12 図	第 3 次調査土壤平面図(7) F Y 6 .....	19
第 13 図	第 3 次調査土壤平面図(8) D Y 103, 29, 100, 171, 72, 117, 111, 2, 26, 95, 53, P 2, F Y 9 .....	20
第 14 図	第 3 次調査土壤平面図(9) D Y 42, 43 .....	21
第 15 図	第 3 次調査土壤平面図(10) F Y 17, 18, D Y 29, 82 .....	23
第 16 図	第 3 次調査土壤平面図(11) D Y 62, 63, 76, 119, 48 .....	24
第 17 図	第 3 次調査土壤平面図(12) D Y 177, 26, 10, 11, 32 .....	25
第 18 図	第 3 次調査土壤平面図(13) D Y 36, 66, 112, 108 .....	26
第 19 図	第 3 次調査土壤平面図(14) K Y 1, 19, 119, 20, D Y 177 .....	27
第 20 図	第 3 次調査土壤平面図(15) D Y 202, 67, 121, 65, 69, F Y 126, P 1 .....	28
第 21 図	第 3 次調査土壤平面図(16) D Y 16, 116, 113, 107, 97, 23, 61, P 18, 47, 48, 12, 8, 5 .....	29
第 22 図	第 3 次調査土壤平面図(17) D Y 90, 91, 77, 60, 59, 79, 12, 98 .....	30
第 23 図	第 3 次調査土壤平面図(18) D Y 86, 55, 57, 56, 212, 92, 87, 85, F Y 7, P 119, 199, 17 .....	31
第 24 図	第 3 次調査出土土器実測図(1) .....	37
第 25 図	第 3 次調査出土土器実測図(2) .....	38
第 26 図	第 3 次調査出土土器実測図(3) .....	41
第 27 図	第 3 次調査出土土器実測図(4) .....	42
第 28 図	第 3 次調査出土土器実測図(5) .....	43
第 29 図	第 3 次調査出土土器実測図(6) .....	44
第 30 図	第 3 次調査出土土器実測図(7) .....	45

第 31 図	第 3 次調査出土土器展開図(8)	46
第 32 図	第 3 次調査出土土器拓影図(1)	47
第 33 図	第 3 次調査出土土器拓影図(2)	48
第 34 図	第 3 次調査出土土器拓影図(3)	49
第 35 図	第 3 次調査出土土器拓影図(4)	50
第 36 図	第 3 次調査出土土器拓影図(5)	51
第 37 図	第 3 次調査出土土器拓影図(6)	52
第 38 図	第 3 次調査出土土器拓影図(7)	53
第 39 図	第 3 次調査出土土器拓影図(8)	54
第 40 図	第 3 次調査出土土器拓影図(9)	55
第 41 図	第 3 次調査出土土器拓影図(10)	56
第 42 図	第 3 次調査出土土器拓影図(11)	57
第 43 図	第 3 次調査出土土器拓影図(12)	58
第 44 図	第 3 次調査出土土器拓影図(13)	59
第 45 図	第 3 次調査出土土器拓影図(14)	60
第 46 図	第 3 次調査出土土器拓影図(15)	61
第 47 図	第 3 次調査出土土器拓影図(16)	62
第 48 図	第 3 次調査出土土器拓影図(17)	63
第 49 図	第 3 次調査出土土器拓影図(18)	64
第 50 図	第 3 次調査出土土器拓影図(19)	65
第 51 図	第 3 次調査出土土器拓影図(20)	66
第 52 図	第 3 次調査出土石器実測図(1)	68
第 53 図	第 3 次調査出土石器実測図(2)	69
第 54 図	第 3 次調査出土石器実測図(3)	70
第 55 図	第 3 次調査出土石器実測図(4)	71
第 56 図	第 3 次調査出土カワアケ実測図(1)	72
第 57 図	第 3 次大樽遺跡土器縦年図	73
第 58 図	第 3 次調査石器形態分類図(1)	75
第 59 図	第 3 次調査石器形態分類図(2)	76
第 60 図	第 3 次調査Ⅷ群(礫石器)分類図	77
第 61 図	第 3 次調査縄文時代遺構変容図	78
第 62 図	第 3 次調査区縄文後期遺構全体図	79
第 63 図	一ノ坂技法による石器製作工程図	82

## 付 表 目 次

第1表	米沢市の縄文土器編年表	80
第2表	大樽遺跡第3次調査遺構細類表	83
第3表	大樽遺跡第3次調査出土礫石器形態分類表	86
第4表	大樽遺跡出土土器分類表	87

## 図 版 目 次

卷頭図版 1	第3次調査区全景（空中写真）・第3次調査出土の蓋形土器
卷頭図版 2	第3次調査D Y 63 遺物出土状況・第3次調査D Y 47 完掘状況
図版 1	第2次調査調査区全貌・K Y 1 掘り下げ状況
図版 2	第3次調査調査区遺構全貌（空中写真）
図版 3	第3次調査発掘調査風景
図版 4	第3次調査発掘調査風景
図版 5	第3次調査発掘調査風景
図版 6	第3次調査D Y 78 遺物出土状況
図版 7	第3次調査F Y 13 セクション状況・遺物出土状況
図版 8	第3次調査K Y 1 完掘状況
図版 9	第3次調査D Y 13 セクション状況・底面出土六文銭
図版 10	第3次調査F Y 5 - 2 区・3 区セクション状況
図版 11	第3次調査D Y 42・D Y 43 もセクション状況
図版 12	第3次調査F Y 17・F Y 3 セクション状況
図版 13	第3次調査D Y 42・D Y 43 セクション状況
図版 14	第3次調査D Y 82 上面礫出土状況・セクション状況
図版 15	第3次調査D Y 177・D Y 194 セクション状況
図版 16	第3次調査D Y 38・D Y 83 セクション状況
図版 17	第3次調査D Y 49・D Y 36 セクション状況
図版 18	第3次調査D Y 84・D Y 47 セクション状況
図版 19	第3次調査D Y 63・D Y 114 セクション状況
図版 20	第3次調査K Y 1・D Y 177 セクション状況
図版 21	第3次調査F Y 6・D Y 15 セクション状況
図版 22	第3次調査D Y 198 完掘状況・遺物出土状況
図版 23	第3次調査D Y 47・D Y 76 完掘状況

- 図版 24 第3次調査D Y 49・D Y 47完掘状況
- 図版 25 第3次調査F Y 16セクション状況・調査区北東部完掘状況
- 図版 26 第3次調査A Z 4縄文早期・A Z 13縄文後期の土器出土状況
- 図版 27 第3次調査D Y 82・D Y 29遺物出土状況
- 図版 28 第3次調査D Y 47遺物出土状況・D Y 11セクション状況
- 図版 29 第3次調査D Y 47遺物出土状況・D Y 63遺物出土状況
- 図版 30 第3次調査D Y 102遺物出土状況・遺物取り上げ後の礫出土状況
- 図版 31 第3次調査調査区西南・東方完掘風景
- 図版 32 第3次調査調査区西南・F Y 6完掘風景
- 図版 33 第3次調査調査区西南・D Y 47・D Y 49完掘風景
- 図版 34 第3次調査調査区西方・東南角完掘風景
- 図版 35 第3次調査調査区北西角・D Y 42・D Y 194完掘風景
- 図版 36 第3次調査D Y 32を中心とする土壤群・完掘状況
- 図版 37 第3次調査完掘状況北東角・北西角
- 図版 38 第3次調査D Y 200を中心とする土壤群・D Y 91完掘状況
- 図版 39 第3次調査調査区西方・F Y 17完掘状況
- 図版 40 第3次調査北東・F Y 176完掘状況
- 図版 41 第3次調査D Y 127完掘状況・西南部調査状況
- 図版 42 第3次調査F Y 6を中心とする土壤群・調査区北東部完掘状況
- 図版 43 第3次調査調査区東方部・南西部完掘状況
- 図版 44 第3次調査調査区南部・北東部完掘状況
- 図版 45 第3次調査調査区西北部・D Y 62・D Y 63完掘状況
- 図版 46 第3次調査復元土器
- 図版 47 第3次調査復元土器
- 図版 48 第3次調査復元土器
- 図版 49 第3次調査出土復元土器
- 図版 50 第3次調査出土土器
- 図版 51 第3次調査出土土器
- 図版 52 第3次調査出土土器
- 図版 53 第3次調査出土土器
- 図版 54 第3次調査出土土器
- 図版 55 第3次調査出土土器
- 図版 56 第3次調査出土土器
- 図版 57 第3次調査出土土器
- 図版 58 第3次調査出土土器
- 図版 59 第3次調査出土土器
- 図版 60 第3次調査出土土器

## 第Ⅰ節 大樽遺跡第2次調査

### 1 遺跡の概要

本遺跡は、米沢市南西部の館山四丁目地内に位置する。斜平丘陵の北端山麓に広がる地域で、北西の長峰山には伊達時代に構築された山城が現存し、「館山」の町名はこれに由来する。

遺跡は発達した河岸段丘上にあり、本遺跡が存在する地域は東西に発達した段丘が延びる地形で、その長さは1kmに及ぶ。最も東端には国指定史跡の「一ノ坂遺跡」が分布している。この一帯の調査としては、昭和61年(1986)8月に「生蓮寺遺跡」を住宅新築に係わる発掘調査として実施したのが最初である。(第1図参照)

これらの調査から、当地内には縄文早期・前期・中期・後期・晚期・中世・近世の各時期の遺構・遺物が出土しており、広範囲に分布する複合遺跡であることが判明している。特に縄文時代の古い時期から継続して存在する例は米沢地区でも数少なく、当市の東方に位置する八幡原遺跡群が東の代表なら、本遺跡群は西方の代表と言える。

歴史時代においても「館山」の地名が文献にも登場てくる。伊達治家記録天正十二年の頃に「此月(十月)、公隠居所トシ給ウ。其間、鮎貝安房宗重宅ニ御座ス。天正十三年ニ至テ普請成就ス。即チ館山へ移住シ給フ」とある。山城と平城がセットになるのが中世城館跡の形態であり、今後の調査が注目される。

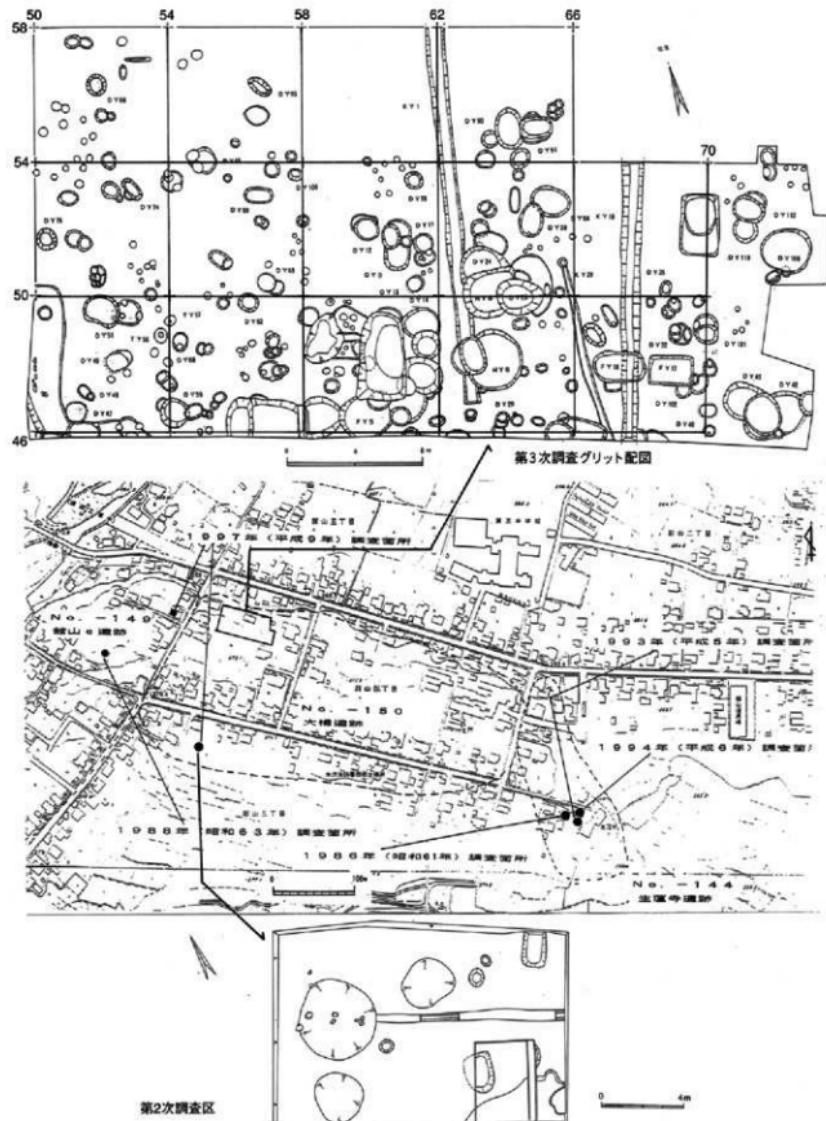
### 2 調査の経過

宅地開発に伴う発掘調査として、平成9年(1997)5月1日～同年5月7日の期間で実施した。調査面積は南北9.5m、東西14.2mの134.9m<sup>2</sup>である。5月1日の重機による表土剥離から開始した。調査区の空き地があることからこの箇所に残土を置くことにした。この作業は一日で終了した。

調査区の南方には小川が西から東に流れしており、この小川を境に南側が水田地帯、北方は畑や宅地となっている。表土は約60cmあり、西から東へ若干傾斜している地形で南方箇所は小川の影響で湿めた状況であった。2日目には調査区の面整理・精査を終了し、土壤群や溝状遺構の確認をした。5月3・4・5日は連休で6日から遺構群の掘り下げを開始した。最初に調査区の西方に位置する円形状の土壤を掘り下げた。覆土からは陶磁器が出土し、中・近世の遺構であると判断した。他の土壤群も覆土の状況から同様な年代を想定した。

同日にKY1も掘り下げを開始した。今回の調査区で全容は解明できなかつたが、蛇行しながら南方から北方に延びる溝状遺構と理解したい。覆土からは陶磁器を中心に遺物が出土し、その数は調査区で最も多い遺構である。5月7日午前中に遺構の掘り下げを終了し、午後からは写真撮影を実施した。その後、平面図を作成し今回の調査を終了した。

縄文時代の遺物としては削器1点、剥片1点の合計2点だけである。土器が出土していないので時期は不明と言わざるを得ない。調査期間中は、天候には恵まれたが、土は固くなり、少し雨がほしい日もあった。



第1図 遺跡位置図

### 3 検出遺構 [第2図参照]

今回の調査区からは11基の遺構を検出した。D Y (土壙) 5基、K Y (溝状遺構) 2基、F Y (不明堅穴状遺構) 3基となる。列挙した順に説明を加えたい。

#### 土壙 (D Y 3 ~ 6・11)

中・近世に位置する土壙群で占められる。平面形状は円形状、長円形状、方形形状をなす形態が認められる。円形状を有するのはD Y 4・5・11の比較的小形の土壙群で占められる。浅いボルト状をなし、覆土は一層であった。遺物はいずれの土壙からも出土しなかった。

方形をなすD Y 6は表土1層下面から掘り込んだもので、現代のゴミ捨て穴である。D Y 37は溝状遺構のK Y 1の北方に位置する。深さは20cmを測る。遺物は出土していない。Ⅲ層面を掘り込んでおり、覆土から推測して、中世に位置する土壙であろう。

溝状遺構のK Y 1は一部を掘り下げたのにすぎないが遺物を多量に含む遺構と考えられ、今回の図示した遺物の大半はこの遺構出土であった。地形から判断して南方から北方への流れが想定されるが、幅については不明である。深さは最深で50cmを測る。縁辺の状況から人工的な構築ではなく自然の小河川と判断した。

層位は泥炭層を基本とする。次のK Y 2は調査区のほぼ中央に位置し、東西に延びる形状をなす。幅は上場で50cm、下場で20cm、断面形態は半円形を呈する。深さは22cmを有し、遺物は認められなかった。地山の面を掘り込んでおり、幅が一定なことから人工的に掘られた溝状遺構と理解したい。

不明遺構としたF Y 8・9・10は円形状をなし、F Y 9は最大で長径4mを測る。壁はゆるやかに傾斜し、中央部からは唐津焼の皿が一点出土している。これら3基に共通しているのは覆土に表土の土が混入しており、近・現代の様相を呈する。吟味の結果、立ち木の移植痕であることが判明した。

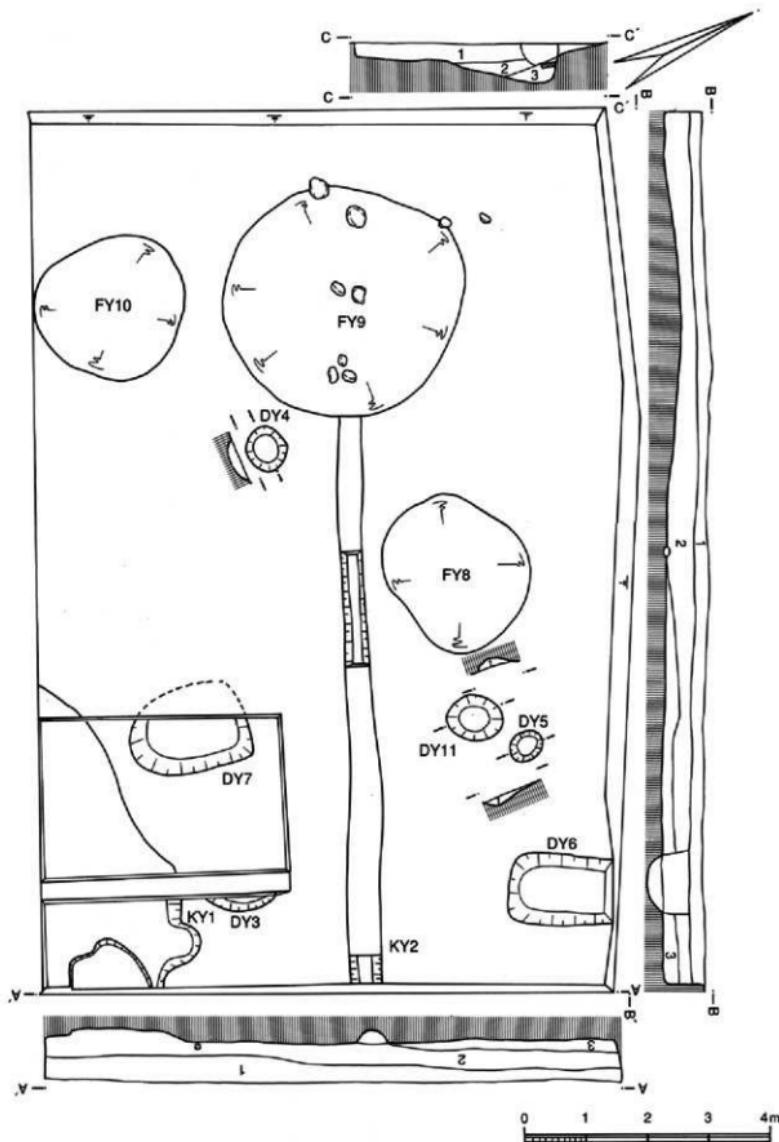
### 4 出土遺物 [第3・4図]

今回の調査区からは総数で38点出土している。陶磁器が最も多く32点、瓦質土器3点、中世陶器1点、石器1点、剥片1点となる。これらの中で図化可能な11点を選出し、実測図で示した。図で示した遺物について説明を加えたい。

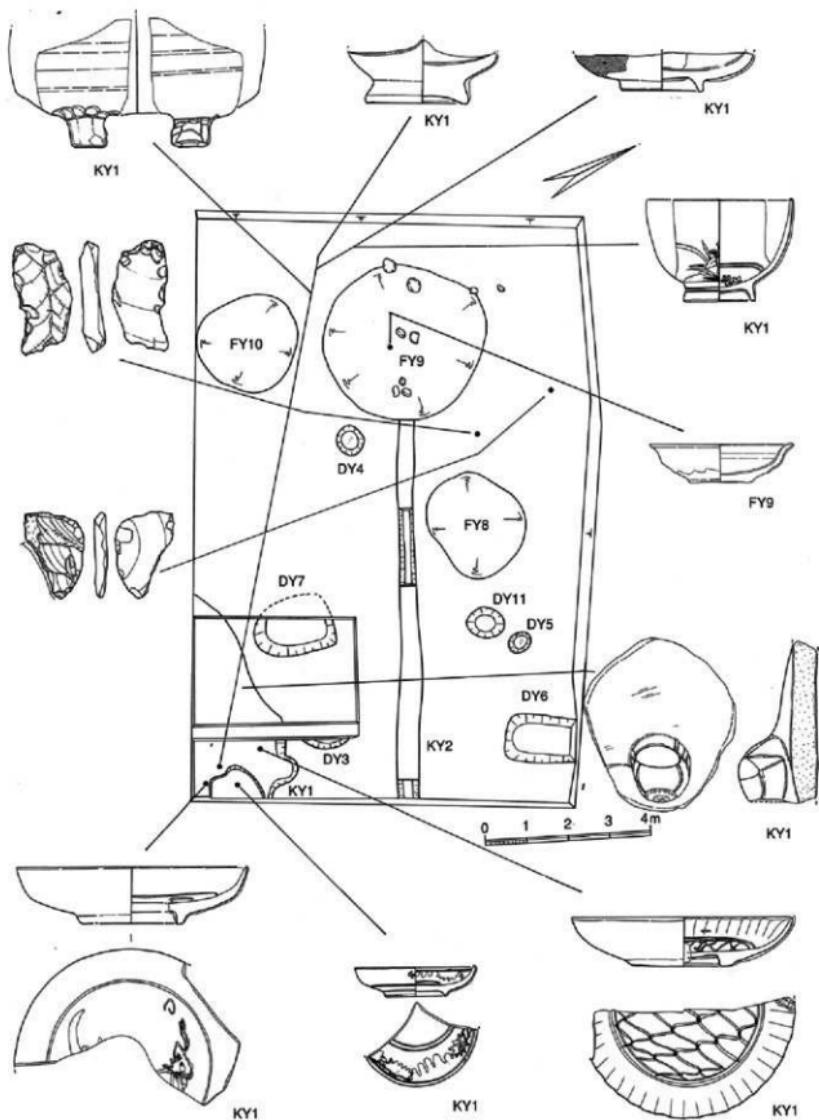
縄文時代の遺物としては第4図10・11で、11の縁辺には使用痕が観察された。中世陶器としては第4図1の戸長里窯焼の飴輪香炉で脚部を有する形態である。陶磁器は呉須で描いた網目文様や植物文様が多く認められた。

### 5 まとめ

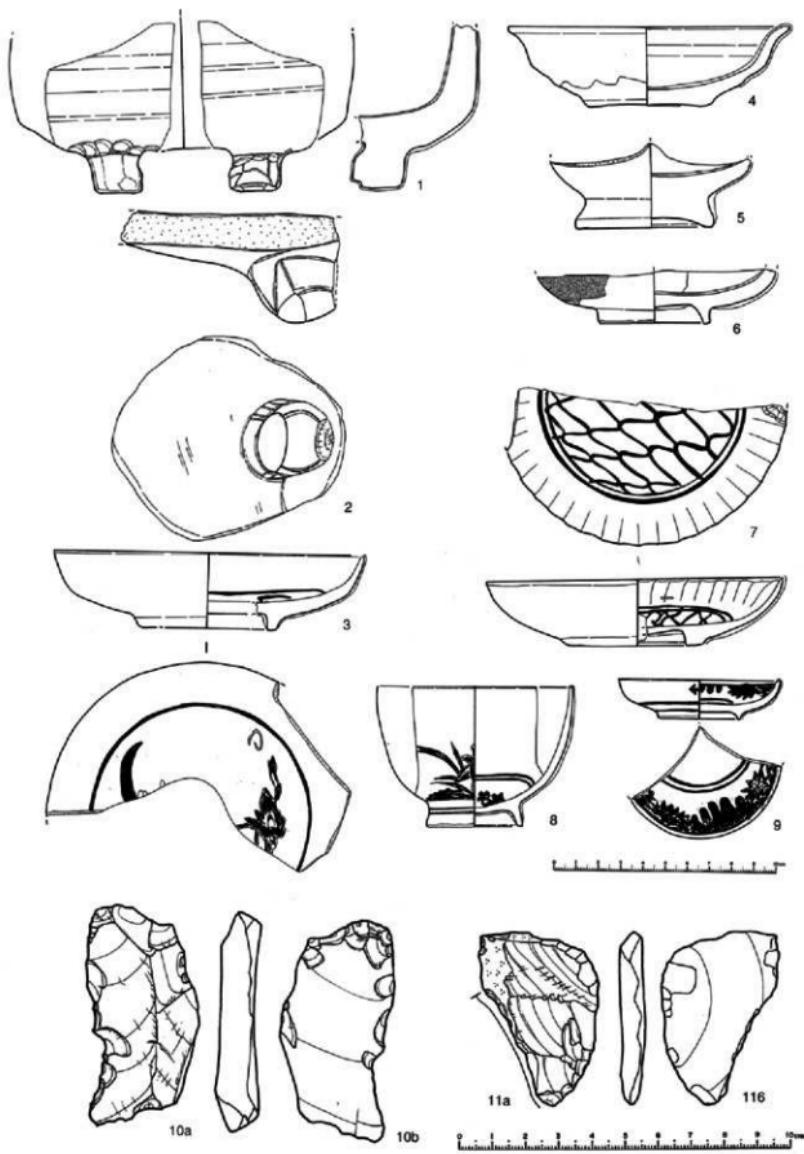
縄文時代の遺物が非常に少ないので今回の調査区が縄文時代遺跡の南限と推測され、今回の調査の成果の一つと言えよう。中世では戸長里窯焼の香炉が注目される。伊達時代の窯跡と想されるものもあり、東西に延びる溝跡と関連するものと考えられる。中世の資料が少ない本市において貴重な一頁を加えたことになる。



第2図 第2次調査遺構全体図



第3図 第2次調査遺物出土点平面図



第4図 第2次調査出土遺物実測図(1)

## 第Ⅱ節 大樽遺跡第3次調査

### 1 遺跡の概要

米沢市は山形県の南部に位置する。周囲を山で囲まれた盆地であり、南方に吾妻山、西方に飯豊山系、北西には朝日山系、北東には藏王山系が雄大な姿を見せ、四季おりおりに旅情をさせわれ、おとづれる人も多い。各山系から発する河川は東から、梓川・羽黒川・松川・大樽川・そして小樽川があり、すべて盆地北方で合流し、最上川となり日本海に流れる。

河川が合流する地域には当市でも代表する遺跡群の分布がしられる。その代表が今回報告する大樽遺跡である。大樽と小樽の合流する地域であり、旧地形から判断してすると合流した河川は本遺跡の北方直下を北東に流れていたことが想定される。従って、この地域は水田として利用されず、畑や果樹園として現在に至っている。

遺跡は館山四丁目地内が中心である。四丁目はかつて「四ノ坂」と呼ばれた地域である。ちなみに一ノ坂は四ノ坂の東方約1kmの地点であり、旧地名の一ノ坂から四ノ坂までが一連の遺跡群の範囲にある。また一ノ坂には昭和30年代前半までは土壘と堀跡があり、南松土手とよばれていたが、今では埋められ北方のごく一部にその姿を留めるに過ぎない。

最近、この範囲は急速に宅地造成が進行中であり、それに伴う発掘調査も増加しており貴重な発見もあった。その代表が一ノ坂遺跡である。石器の製作工程が明らかになり製作住居跡は日本一の長さを有するロングハウスとして国指定史跡になっている。

### 2 調査の経過

遺跡範囲に係わる試掘調査の依頼があり、平成8年12月26日に開発予定地を試掘した。開発面積は約4,200m<sup>2</sup>であることからトレーナーを配し、重機を使用して実施した。その結果、南方部を中心とした約1,200m<sup>2</sup>の範囲に遺構が分布することが確認された。その後、開発関係者と打ち合わせをし、平成9年に調査を実施することで合意した。

調査は、平成9年5月6日からの表土剥離から開始し、掘り出した土は北東部にキャリアで移動した。この箇所は砂利層であり、試掘によって調査範囲外となったところである。この作業は3日間を要し終了した。5月8日からは面整理作業も開始し、5月15日から遺構の掘り下げを開始する。

遺構は土壙を中心であり、他に竪穴状遺構・落とし穴・柱穴・ビット群を確認するに至った。6月に入り梅雨のシーズンを迎えたが雨の日が多く、作業は順調に進行した。その間には本市では初めての遺物である縄文後期初頭の蓋形土器3点が出土した。

6月18日からは断面図・平面図作成を平行しながら土壙の半裁部分を完掘していった。6月30日には現地説明会を午前10時から実施した。地元の町内を中心に約50人の参加者があった。

7月1日には空中写真を実施しその後、7月4日までに平面図を作成し調査を終了する。今回の調査期間中の天候は晴れの日が多く、少しほんの雨がほしい日もあった。

調査面積は東西48m、南北24mの1,152m<sup>2</sup>である。

### 3 検出遺構

今回の調査区からは、総計 271 基の遺構群を検出した。これらの遺構群は出土遺物や覆土の土質・重複関係の吟味から縄文時代・中世・近世・現代の各時期に大別される。

縄文時代は早期・前期・後期の 3 時期に細別される。中世は調査区の西方を中心に遺構群が認められた。遺構の形態としては土壙 (D Y) 112 基・竪穴状遺構 (F Y) 2 基・ピット (P) 149 基である。細類を加え各時期別に説明を加えたい。

#### 1) 遺構群の細類 (第 5 図参照)

A 類～J 類の 10 形態は土壙・竪穴状遺構・K 類～N 類の 4 形態はピットのそれぞれ細類を示した。A 類は断面形態がフ拉斯コ状を呈する土壙群、B 類は断面形態が竪穴状を有する土壙群、C 類は断面形態が凹レンズ状をなす浅い土壙群である。D 類は平面形状が楕円形を有し、断面形態が「U」字形をなす土壙群である。E 類は大形で竪穴状を有する形態である。F 類は平面形状が長円形を呈し、断面形態が竪穴状を有する。G 類は長円形で断面形態が凹レンズ状で浅い土壙群である。

H 類は平面形状が不整形をなす竪穴状遺構である。I 類は平面形状が方形を呈するタイプを本類とした。J 類は平面形状が不整形をなす土壙である。次のピット群は K 類・L 類とも平面形状が円形であるが K 類は浅く、L 類は深い。M・N 類は平面形状が楕円形で M 類が深く、N 類は浅いタイプである。深さの基準は 20cm 以上が深いとした。

#### 2) 縄文時代の遺構 [第 6 図～第 18 図]

縄文時代の遺構としては、竪穴状遺構 2 基・土壙 54 基・ピット 34 基の総計 90 基を検出した。これらの遺構群を年代別に述べたい。

##### ○縄文早期の遺構 [付図参照]

調査区の西南部に 3 基、南東部に 2 基の合計 5 基を検出した。他に不明としたが北西部の D Y 141・142 の 2 基の土壙も早期の可能性があるが、明確に出来なかったので割愛し上記の 5 基について述べたい。

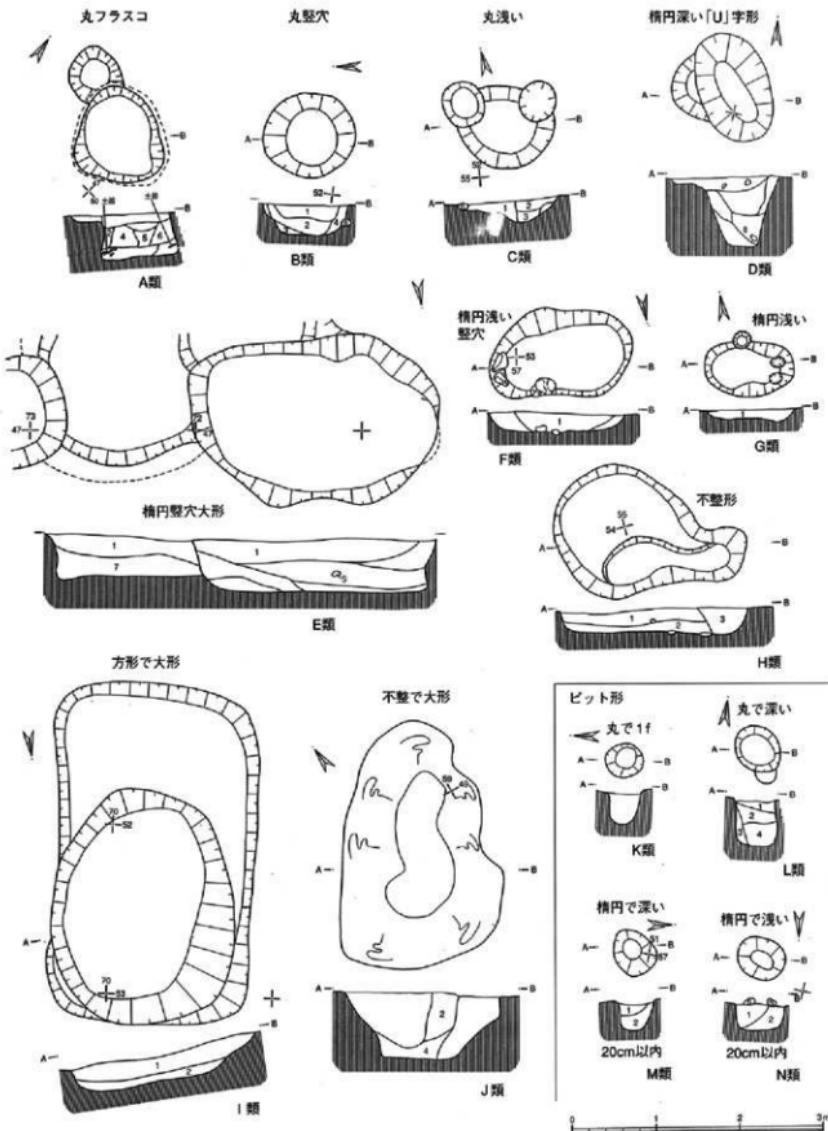
D Y 50・70・128・198・P 13 が遺構番号である。伴出土器は B 群 II 類に細別した明神裏Ⅲ式併行の土器片が P 13・D Y 70 から出土している。D Y 128 は縄文後期初頭の土壙と重複している。土壙群の 4 基はいずれも平面形状が円形状をなし、断面形態が凹レンズ状を有する掘り方で C 類に細別される。深さは 20cm 前後で、遺物の数は少ない。埋土層位は 2～3 枚で土色は暗褐色微砂質土で、固くしまっていた。

P 13 は F Y 16 の大形竪穴状遺構の東側に位置し、長径 47cm・短径 47cm を測る。深さは 15 cm で N 類に細別される。以上が縄文早期の遺構群で、出土土器は常世式併行・明神裏Ⅲ式併行の二時期があるが、遺構群に関しては新旧関係を見いだすには至らなかった。

遺構の構築目的は他に関連する遺構が明確でないことから断言はできないが、調査区の様相からみて、住居跡に伴う施設と考えられる。

##### ○縄文前期の遺構 [第 6 図～第 9 図]

調査区のほぼ全域において確認された。遺構を形態別に述べると土壙 20 基、竪穴状遺構 2 基



第5図 第3次調査遺構分類図（土壤・ピット）

とピット 27 基の合計 48 基が認められた。伴出土器は E 群 I 類土器の花積下層式併行、E 群 II 類土器の関山式併行、F 群 I 類のループ文土器群、F 群 II 類の結束羽状縄文を主体とした土器群を伴する遺構群で、縄文前期初頭に位置すると言える。

土壙群を細類すると A 類 2 基・B 類 6 基・C 類 1 基・D 類 3 基・F 類 3 基で、平面形状が円形をなし、断面形態が竪穴状を有する B 類が最も多く認められた形態である。

A 類の D Y 13・40 の 2 基は約 16 m 離れて構築されている。前者の D Y 13 は調査区のほぼ中央部の南方箇所に位置し、長径 97cm・短径 86cm・深さは 57cm を測る。底部を中心に F 群 II 類土器 35 点、E 群 II 類土器 2 点が出土している。県内の本類確認例としては遊佐町吹浦遺跡、大石田町の角ニ山遺跡、長井市の長者屋敷遺跡そして本市の一ノ坂遺跡が上げられる。

角ニ山遺跡と吹浦遺跡は縄文前中期末葉であり、前期初頭としては長者屋敷遺跡・一ノ坂遺跡そして今回の大樽遺跡を含め 3 例目となる。前者の二遺跡からは硬玉質の抉状耳飾りが出土しており、墓壙と考えられている。

本遺跡の 2 基からは玉類は出土していないが、他の土壙群よりも遺物の出土数が多く、前述と同様に墓壙と考えたい。

B 類は A 類の周辺地域に構築された様相を呈する。A 類とした D Y 13 の北東を中心に D Y 78 や 38・83 同様に D Y 40 A 類北西に D Y 101・34・120 を構築している。土器の吟味から同時期に位置する土壙群と推測される。

B 類の土壙群の中で D Y 83 が最大で 130cm・最小は D Y 36 の 76cm で平均 1 m 前後の平面形状をなし、大半の覆土から遺物が出土している。D Y 101 からは C 群 II 類土器 5 点が出土しているが、重複関係から D Y 198 からの混入と考えられる。

D Y 78 は D Y 13 の北西 6 m の地点に構築している。覆土は人工堆積状況を呈し、層位は 8 層確認された。深さは 60cm あり、覆土の中央と底面から第 24 図の土器が出土している。メルクマールの円形突刺文の箇所を赤く彩色した深鉢形土器である。土壙南西部壁面に逆立ちになつて出土した。底部の破片が認められず、この箇所は最初からなかったものと考えている。B 類は A 類と同様な目的で構築された土壙群と推測したい。

C 類の D Y 35 からは剥片が出土しているが、土器は認められなかった。しかしながら構築した場所や覆土の吟味から縄文前期初頭に位置づけられる。ちなみに前期初頭の覆土は灰褐色微砂質土が主体である。

D 類とした D Y 74・93・127 がある。D Y 74・93 は調査区の西方に位置し、東西に 9 m はなれて構築している。上場が広く、底が狭い断面形態で、各土壙群の中では最深を測る。D Y 74・93 のある地域は砂利層で覆われる。この砂利層を掘りこんでおり、砂利層は少なくとも縄文早期以前の層位であるといえる。

覆土からは F 群 II 類土器数点が出土しているがいづれも小破片である。この形態を呈する土壙群はトイレ説や落とし穴説がある。落とし穴の場合底面にピットが認められる場合もあるが今回の土壙群からは認められなかった。ここでは両者のいづれかは断定できなかった。なお前期初頭のトイレの例としては本市の一ノ坂遺跡に確認されている。

E類のD Y 21・84は調査区中央のやや東方に位置する。両者は南北に4.3mはなれて構築されている。楕円形をなす大形の竪穴状遺構であり、底面は平坦である。D Y 84の覆土からはF群II類土器が1点出土しているが、D Y 21からは遺物は認められなかった。二基の土壙は後世の土壙によって削平を受けている。

平面図を見るとD Y 84はD Y 30に、D Y 21はD Y 177と重複する。平面図ではD Y 84がD Y 30を削平する様相を呈するが、D Y 84が深いことからこの表現となったものである。

第9図に示したD Y 84は東方の一部がプラスコ状になっている。上場の縁辺から判断すると本平はプラスコ状をなす土壙と考える。第17図のセクション図はD Y 21とD Y 177の新旧関係を示している。この図から理解できるようにD Y 21の本来の形態は現状よりも大形になるものであり、推定の長径は上場で4.8mを想定する。D Y 177からはE群I類土器が多量に出土しているが平面図で示すように重複関係が著しい明確には言えないが、竪穴住居跡の可能性もある。従って、本類はD Y 21は前期初頭の竪穴住居跡に中・近世の土壙が構築された地域であり、D Y 84は貯蔵穴、もしくは墳墓と考えられる。

F類は西方の箇所に位置するD Y 73の覆土からは第53図21の小形の石籠が出土している。土器は認められなかつたが、覆土や重複関係から前期初頭の土壙に分類した。用途としてはゴミステ穴と推測される。F類のD Y 114は調査区中央の南方に位置し、上面に河原石が認められた。覆土からはF群II類土器1点が出土している。平面図状は細長い形状をなし、深さは30cmを測る用途はD Y 73と同様と考えたい。

M類はピット群を一括して説明したい。第9図に代表的な断面形態あるP 19を示した。他に縄文前期初頭に位置するピットとしては調査区中央に南方に位置するH Y 6の周辺を中心とするグループP 145-149, 151-153, 155, D Y 2を中心分布するP 22と156・160から162がある。他にK Y 20に沿ってP 19・14・45等がある。

これからのピット群はそれぞれに関連する横穴群と推測される。覆土は縄文前期初頭の土壙群と同様な土色であった。

竪穴状土壙としてはF Y 6・F Y 176の2基を検出した。第12図に示したのがF Y 6の平面図とセクション図である。セクション図が示す通り、竪穴状遺構を堀りこんで構築した土壙の様相が伺える。この土壙は長2.6mで深さが98cmを有し長円形状をなし、底面は両者とも同一のレベルである。後世に構築された土壙の覆土からは「寛永通宝」が北方から出土していることから近世の墳墓である。

底面に柱穴は確認されなかつたが、前述したピット群が関連するものと考えられる。遺物は土器片76点、そのうち縄文早期が4点・縄文前期初頭が40点・縄文後期が32点・剥片68点・石器第52図2・両尖頭状石器・第55図33・凹石5点が出土している。最終図面の平面形態は覆土の吟味や重複関係から縄文前期初頭の遺構であるが、出土土器から判断すると、各時期にわたって断続的に利用された場所といえる。

F Y 176は調査区の東方南端に位置する方形状の平面形態を有する。現代の遺構であるF Y 17 F Y 176によって東西が削平され、全容は不明と言わざるおえない。幅は64cmを有し、壁

直下に柱穴と推測されるピット合計6基、等間隔で確認されている。平面形状や覆土からF Y 176は竪穴住居跡と考えたい。方形の平面形状を呈する縄文前期初頭の竪穴住居跡としては本市でも5箇所の遺跡から確認されており、いずれも遺物の出土量が少ない。このプランを有する住居跡はE群I類の花積下層式併行に出現するとみられ、F群I類のループ文様主体土器群でも継続し、大木6式併行の円形住居跡出現までの継続期間と想定される。

・縄文後期の遺構（第10図－18図）

遺構の総数は36基を数え、前述した縄文前期初頭の遺構と同様に調査区の全域にわたって確認された。遺構の形態としては土壙が29基、ピットが7基であった。土壙を中心に遺物が出土しており復元土器の大半は縄文後期初頭の網取式併行や称名寺併行、堀之内式併行、三十稻葉式併行の土器群であった。細類した土壙群、ピット群について以下に述べる。

A類は調査区の南方の東西に分布し、西方からD Y 47・49・76・63・82・102・122の7基が認められる。これらの構築された箇所を観察すると次のようなことが言える。まず西方のD Y 76・49・47の周辺には環状に土壙群が集中しており、今回は東方の半分の調査区を考えている。次のグループはD Y 63を中心とする土壙群であり、南北に帯状に分布する様相を呈する。第3のグループはD Y 82を中心としたものであり、環状に分布するものと考えられる、第4のグループはD Y 102、122を中心とするグループでこれも環状の様相を呈する。次に各グループについて述べる。

第1グループとした土壙群はA類の他にD Y 81・53・51・48土壙群からなる。この4基はC類に細類される。第10図で示すようにD Y 47の覆土、底面から多量の土器が出土している。注目されるのは土壙覆土からN群II類、O群I類、O群II類の3形式の土器群が認められることがある。N群II類土器は網取式併行の土器であり、口縁部に「J」字状文を配する。

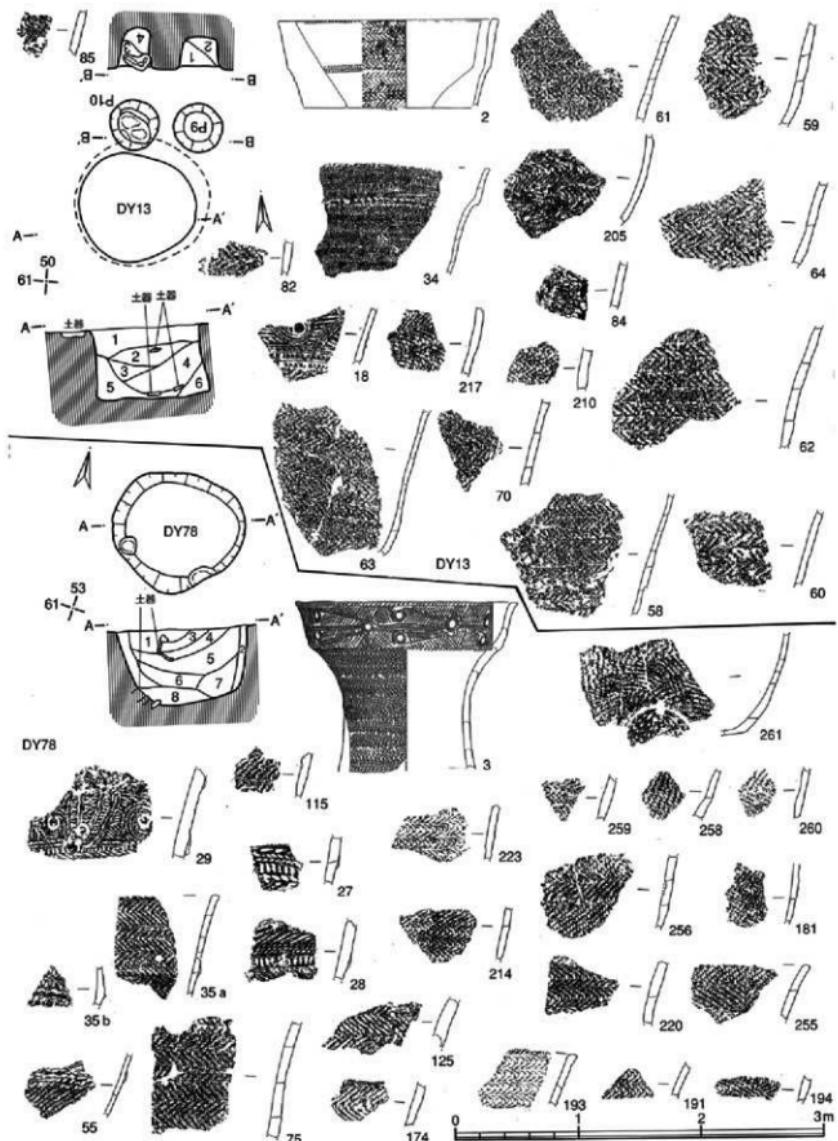
O群I類土器は堀之内I式併行の土器であり沈線文を主体としている。O群II類とした土器は三十稻葉式併行の土器群で、縄文原体先端部による突刺文を主体に文様を配する。

覆土は人口堆積を呈していることから、3形式の土器群は同時期に存在したものと理解されN群I類・O群I類・O群II土器は併行すると考えたい。この土器を伴出したD Y 47の北東2.5mの地点に同類のD Y 49がある。縄文早期のD Y 128と重複する平面形態を有し覆土は人口堆積状況を呈する。深さは60cmを測り前述したD Y 47と同様な深さ及び断面形態を有する。出土遺物はN群II類、O群I類、O群IIの3形式が認められた。

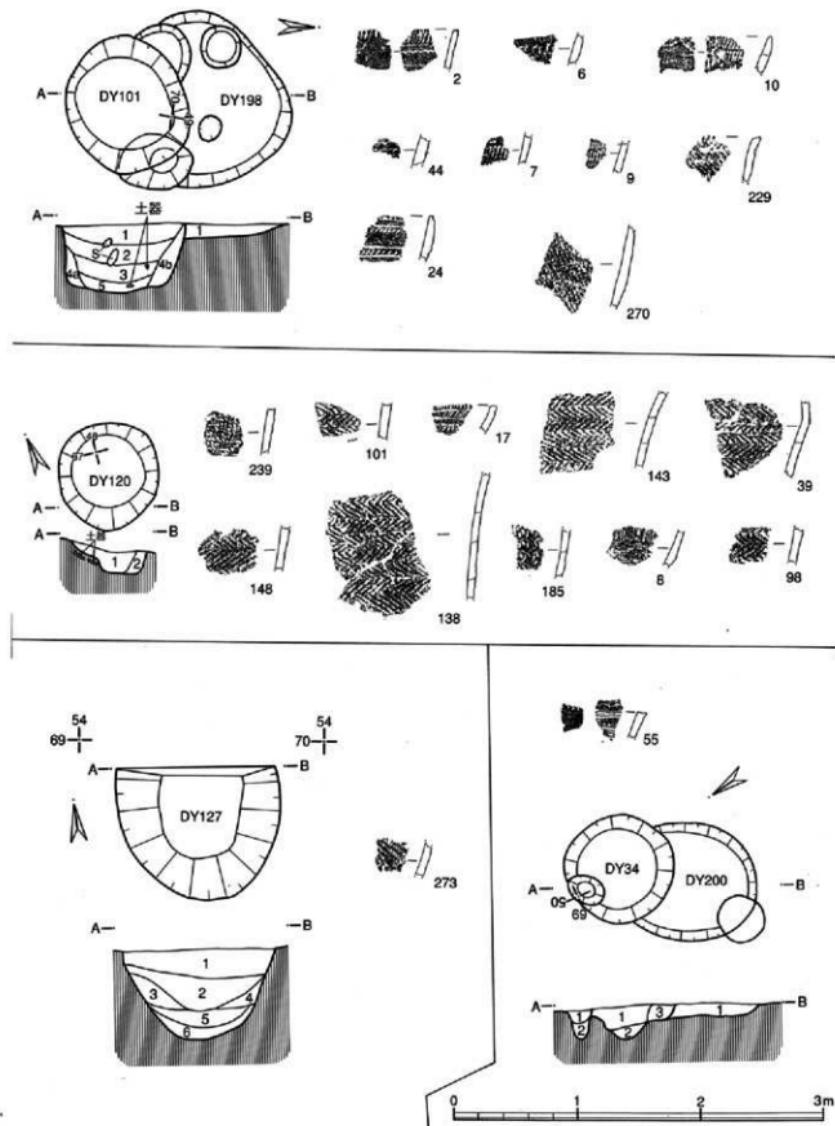
第2グループのD Y 63は他にD Y 62・68・100からなる。D Y 63は第16図で示すように近世の土壙によって北西を削平されている。深さは49cm・長径121cm・短径97cmの平面形状をなし人口堆積状況を呈する。覆土の底面直上から第25図・26図5・27図14・29図の復元土器の他に土器片が282点・剥片28点・円盤状土製品1点・石箇1点・磨石1点・焼石1点が出土している。

土器の出土状況は図版4にしめした。第25図の土器が横に倒れた状態でその下に第29図が同じ状態であった。第27図の14・第26図5は倒れた土器の内部から出土している。

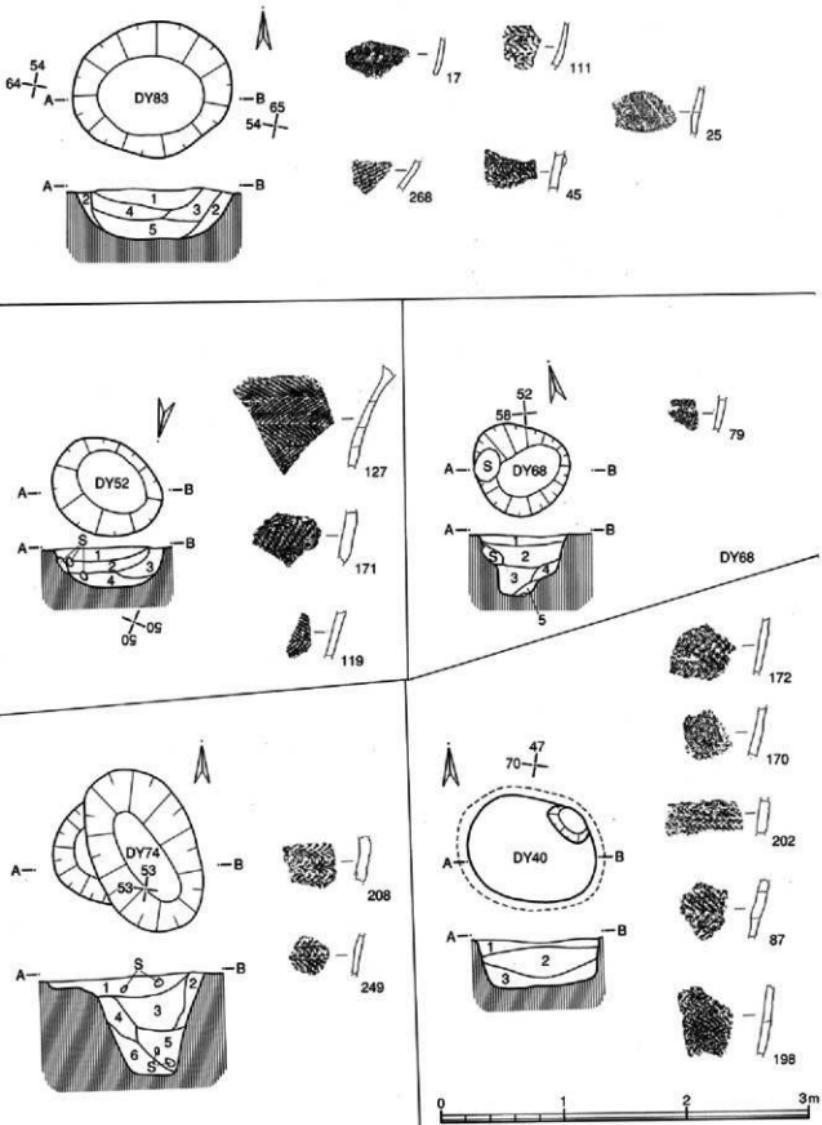
第25図の復元土器は半分が欠損した状態で、土壙中央に横転していた。当初から半分を壊して土器を土壙に置いたと考えられる。



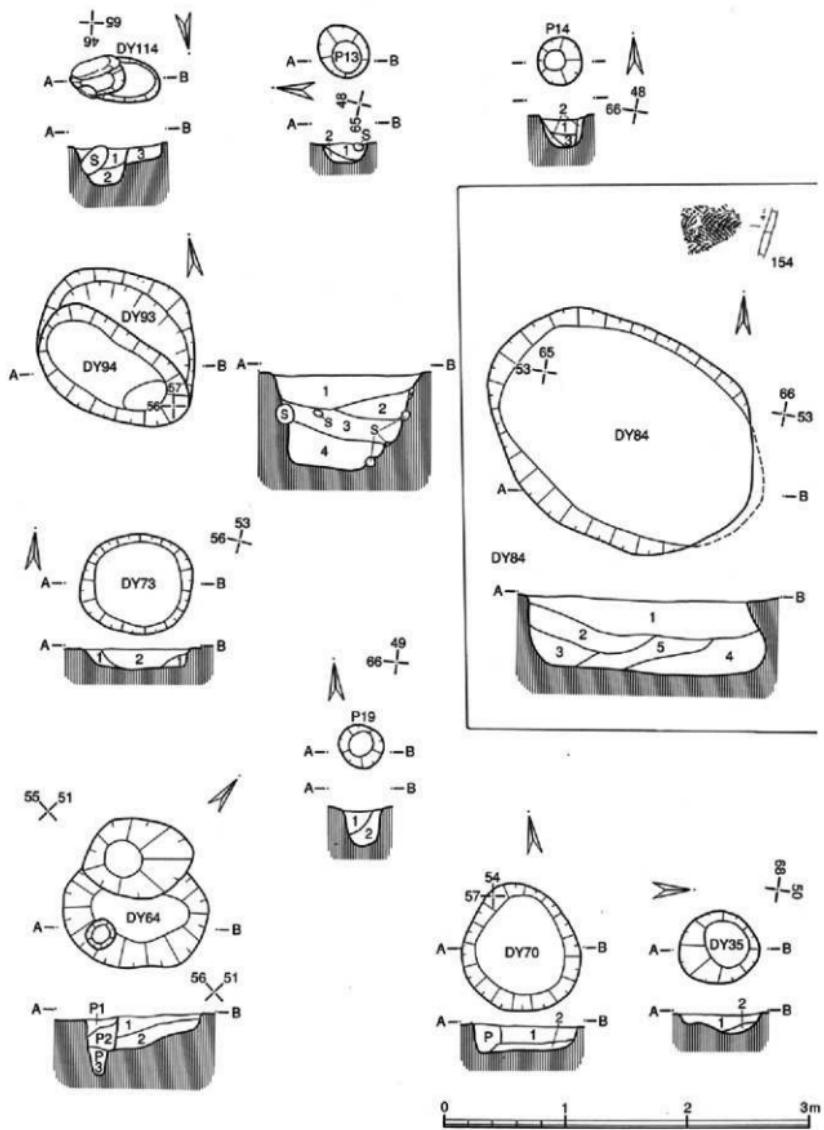
第6図 第3次調査土壤平面図(1)



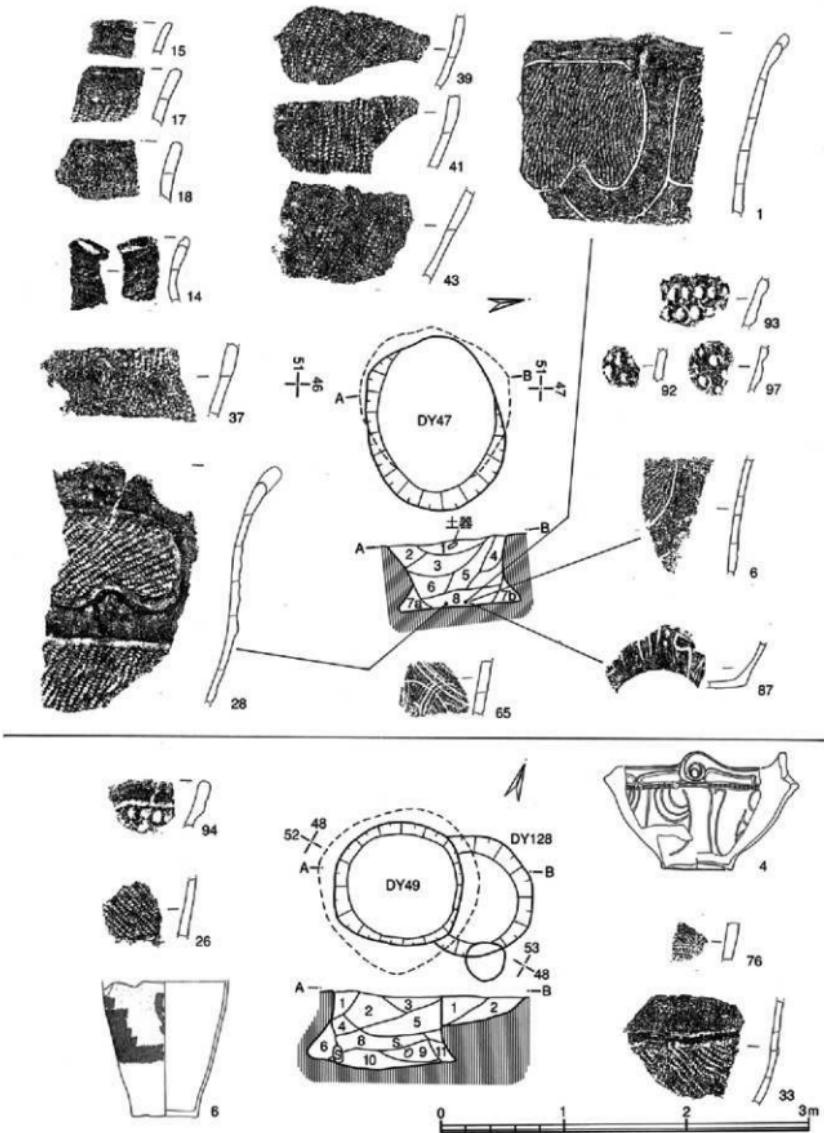
第7図 第3次調査土壤平面図(2)



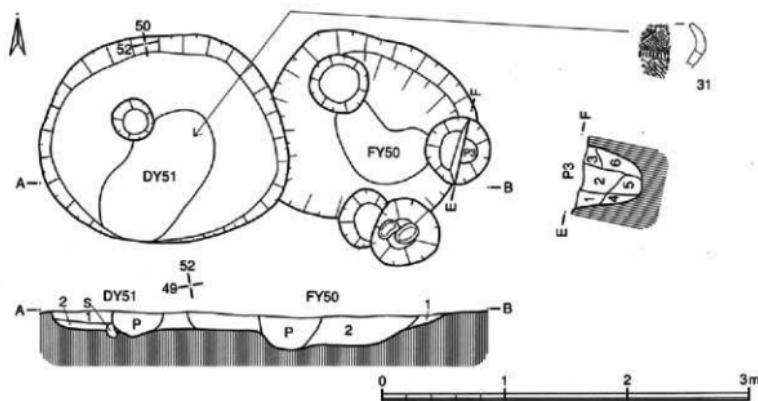
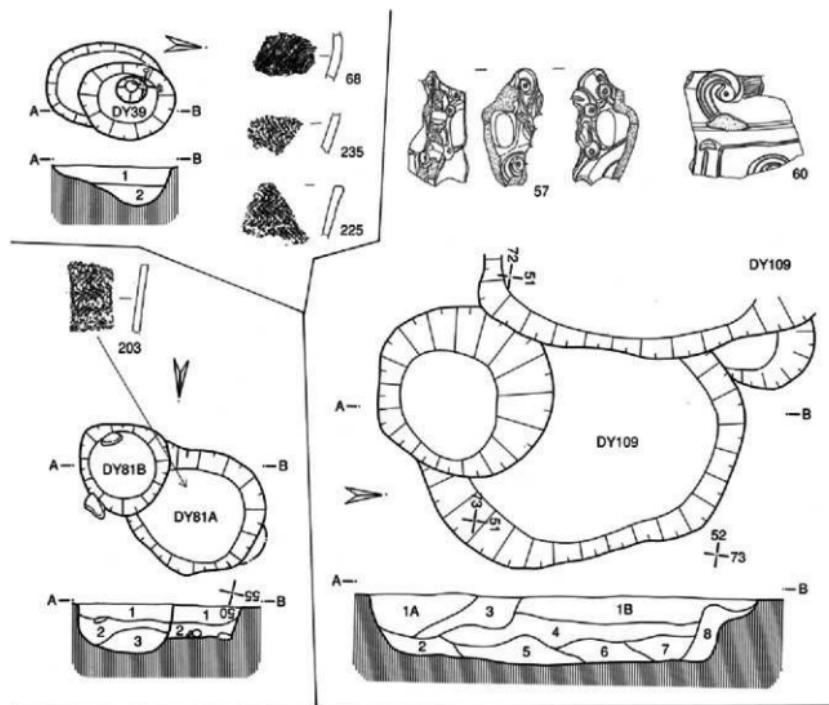
第8図 第3次調査土壤平面図(3)



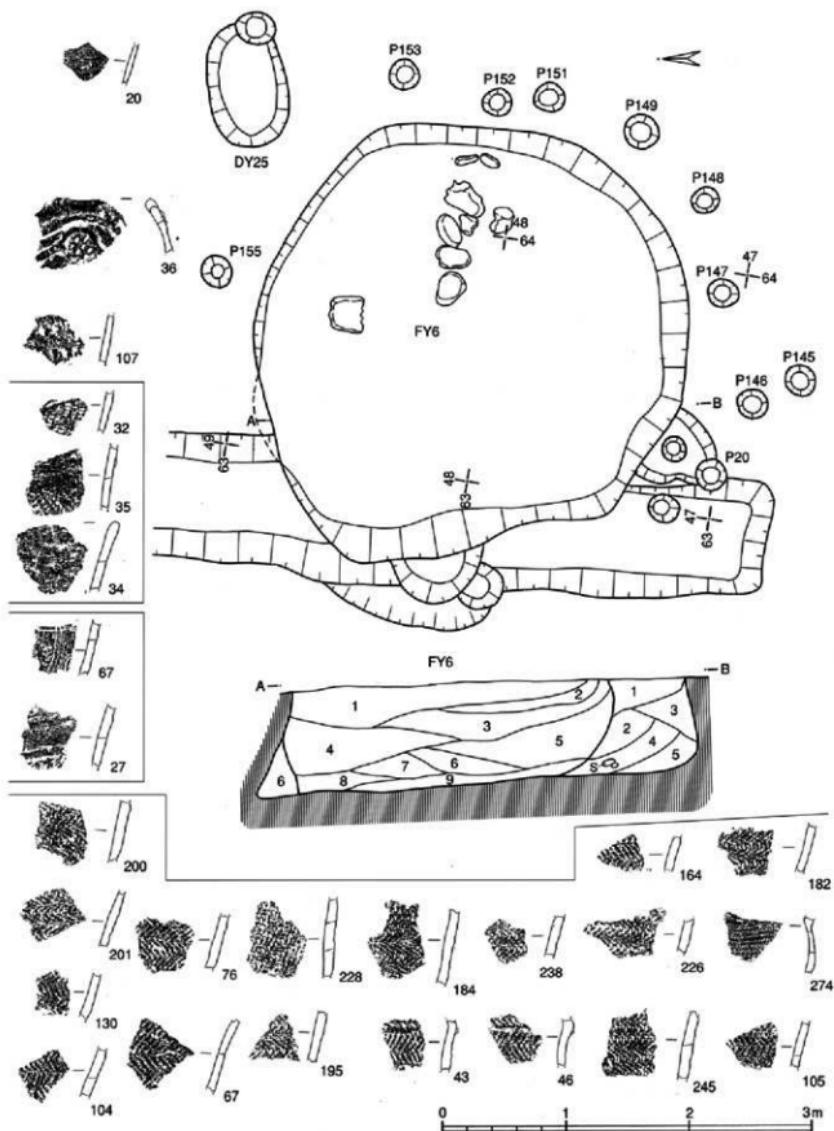
第9図 第3次調査土壤平面図(4)



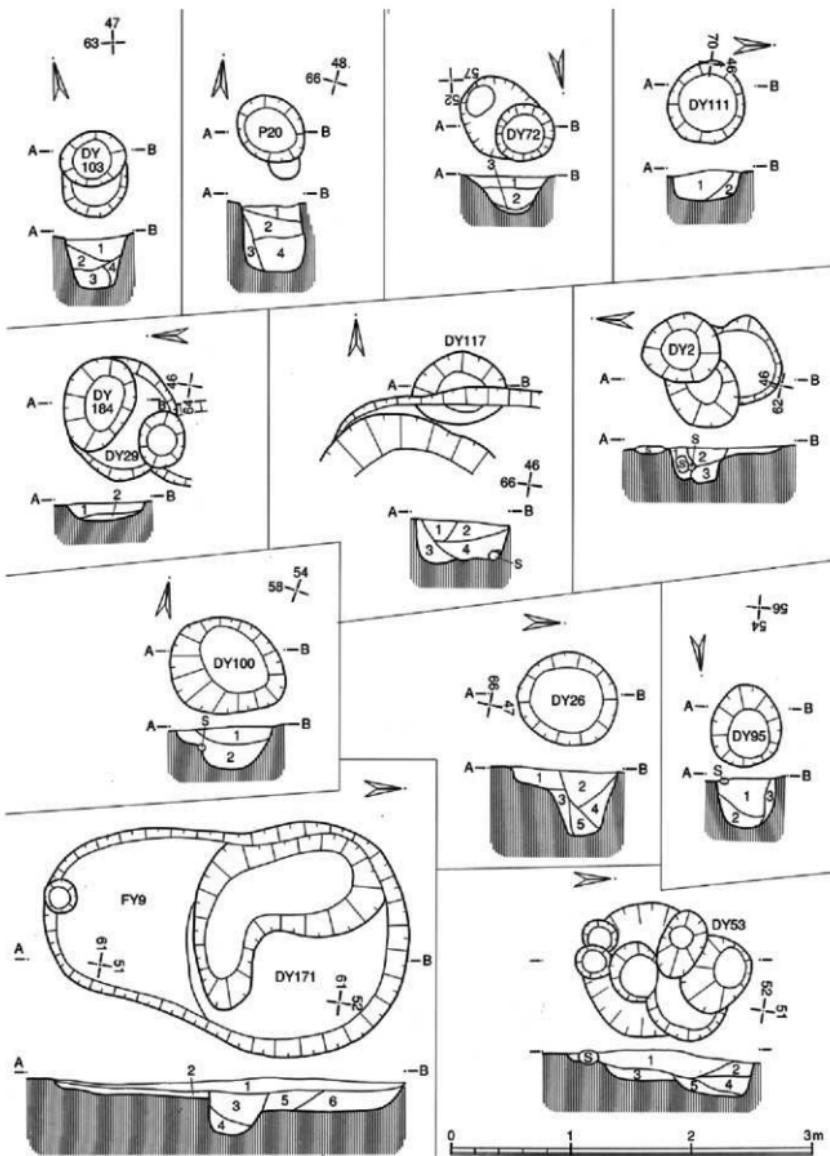
第10図 第3次調査土壙平面図(5)



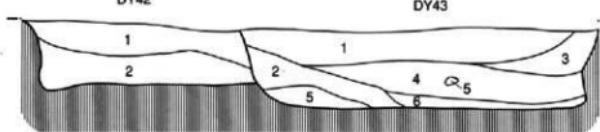
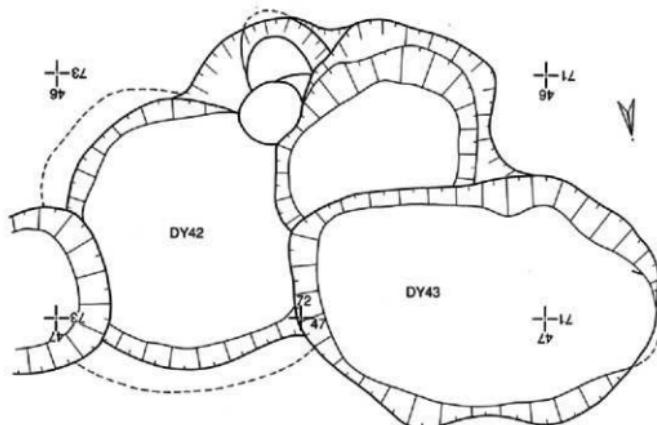
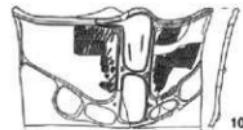
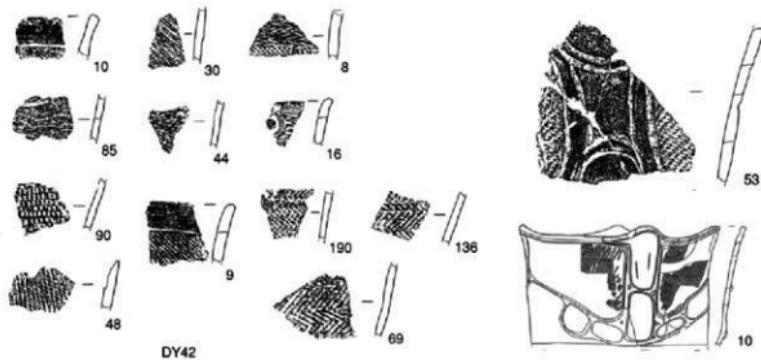
第11図 第3次調査土壤平面図(6)



第12図 第3次調査土壤平面図(7)



第13図 第3次調査土壤平面図(8)



0 1 2 3m

第14図 第3次調査土壤平面図(9)

どのような目的で半分をこわして埋納したのかは明確には言えないが三十稈葉式併行の蓋が出土しており墓壙の可能性が高い。

遺物の出土量では今回の調査区では一番である。出土土器を見てみるとN群I類、N群II類、O群I類、O群II類の4形式が認められる。出土量ではN群II類が最も多く次いでO群I類土器・N群I類とO群II類は少量であった。

第3グループを形成するDY82は調査区中央部の南端に位置する。他にDY2, 103, 29, 27の土壙群で形成する。A類のDY82は長径120cm、短径100cmの平面形状をなし、深さは30cmとA類の土壙としては浅い。これは中世のDY85構築の際に削平されたものであり、本来はDY47、49と同様な深さを有するものと考えられる。

従って遺物も散乱したと考えられ、確認した面で第27図15が出土している。この土器はO群II類に判別される土器であり、器形は壺形を呈すと推測される。また、この土壙の北方には中世、近世の土壙群が密集しており、出土遺物から考慮するとこの箇所にも、縄文後期の土壙群があったことは用意に推測される。

調査区の東方に位置する第4グループもFY17とした現代の遺構によって削平された状況を呈する。DY122, 102とも全体の約3分2が消滅している。それにもかかわらず第28図の土器が出土したのは幸運と言わざるを得ない。土器は2個の破片で出土した。1個はDY102の覆土から、もう1個はFY17の埋土からであった。FY17を掘った人物が破片をそのまま埋め戻してくれたことによる出土と言えよう。

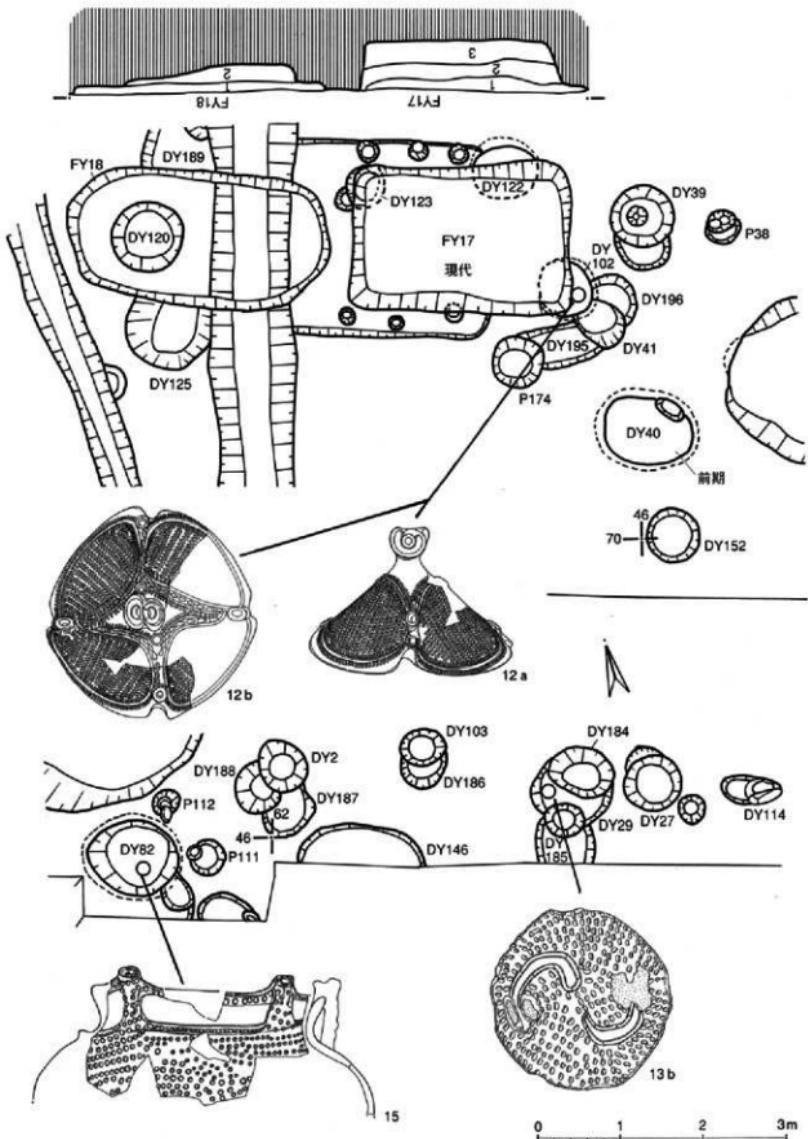
図版5にDY102の遺物出土状況を示した。現存する形状からDY102は長径64cmを有する円形をなし、深さは50cmを測る。底面には縦平の河原石2個を敷いている。出土した遺物の蓋はこの河原石の直上に置いた状況であった。蓋は割れていたがFY17を構築する際にこわしたもので本来はA類の土壙を掘り、底面に河原石を配し、その上に蓋を置き土で覆った土壙と推測される。

西北に70cmはなれてDY122がある。長径66cmの橢円形状を呈するものと推測され、深さは50cmを測る。土器片10点が出土している。その中にはF群II類の縄文前期初頭の土器片2点が含まれていた。後期の土器片はN群II類の土器群で占められている。

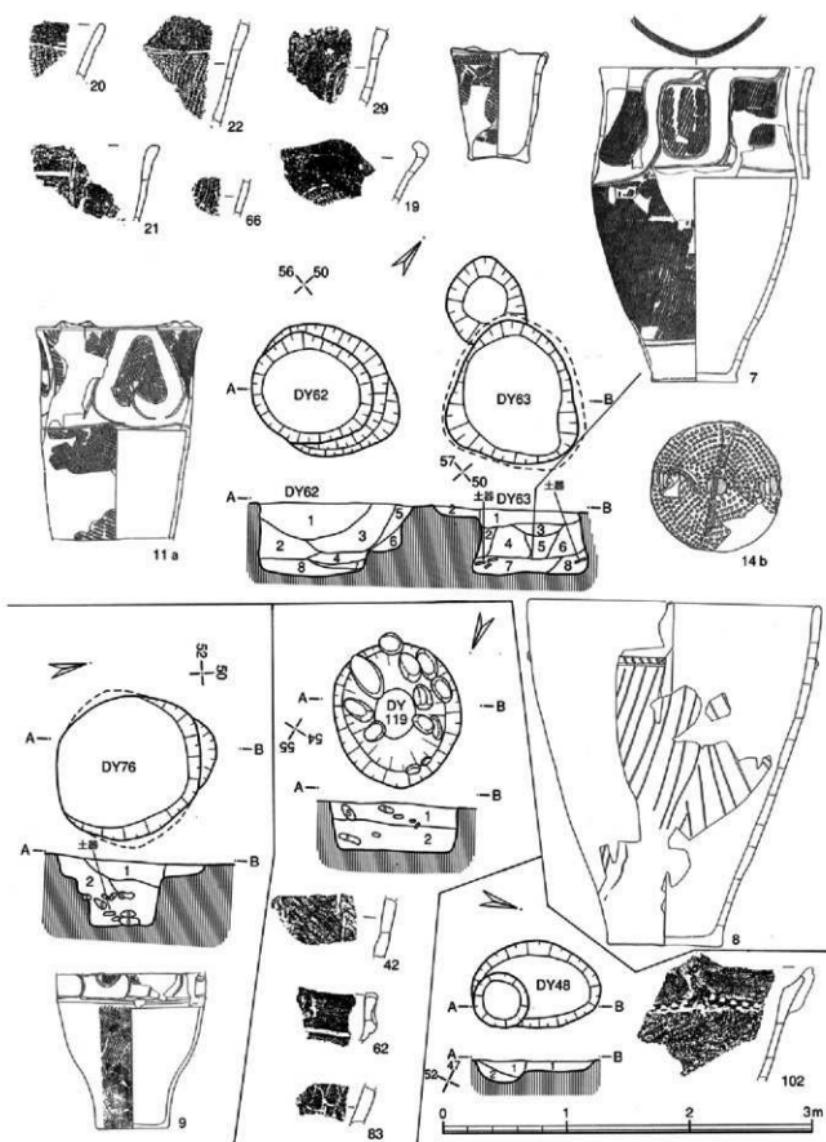
B群の土壙群は12基認められる。DY2, 26, 62, 66, 68, 95, 100, 103, 107, 108それに111, 117の各土壙群があり、最も多く認められた形態である。

前述した第2グループを形成するA類のDY62に隣接するDY62, 68, 100, 95, 66はすべてB類で占められる。覆土は自然堆積状況を呈し、A類と比較すると遺物の出土類は極端に少ないのが特徴と言える。長径は126-80cm、深さは平均40cmを測る。出土遺物はN群II類に土器が多く認められた。B群に土壙でO群II類の三十稈葉式併行の土器を併出したものは認められなかった。

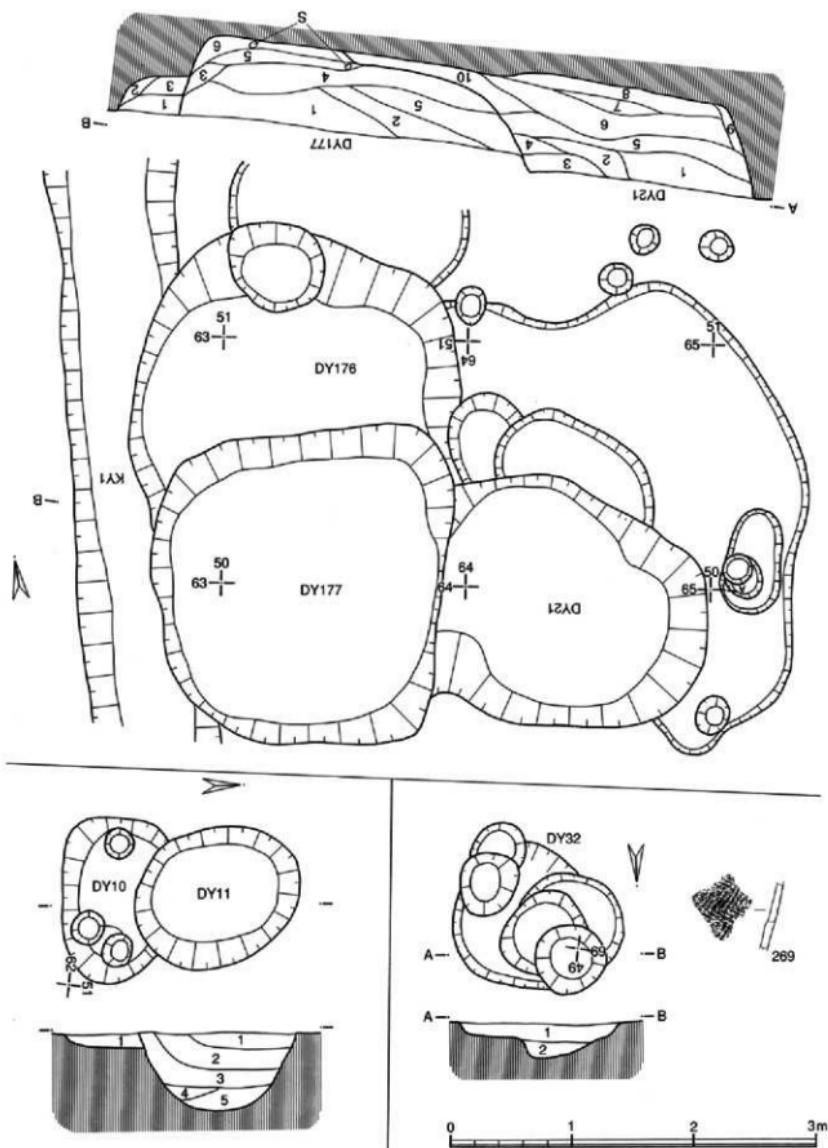
第3グループに隣接するDY2, 103, 117, 26が東西に並列して検出された。出土遺物はN群II類で占められる。次の、DY107, 108, 111の3基は調査区の東方に位置し、いづれも覆土から少量のN群II類土器が出土している。最後のDY66は調査区の北西部隅にあり覆土に多



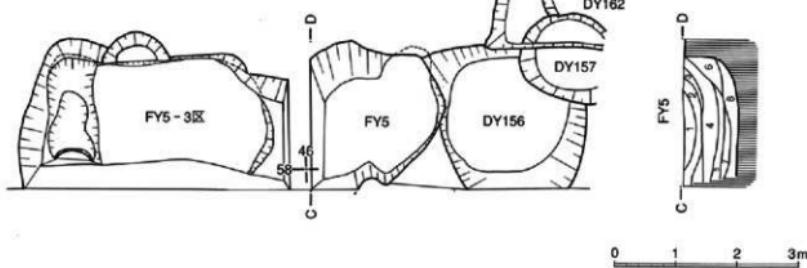
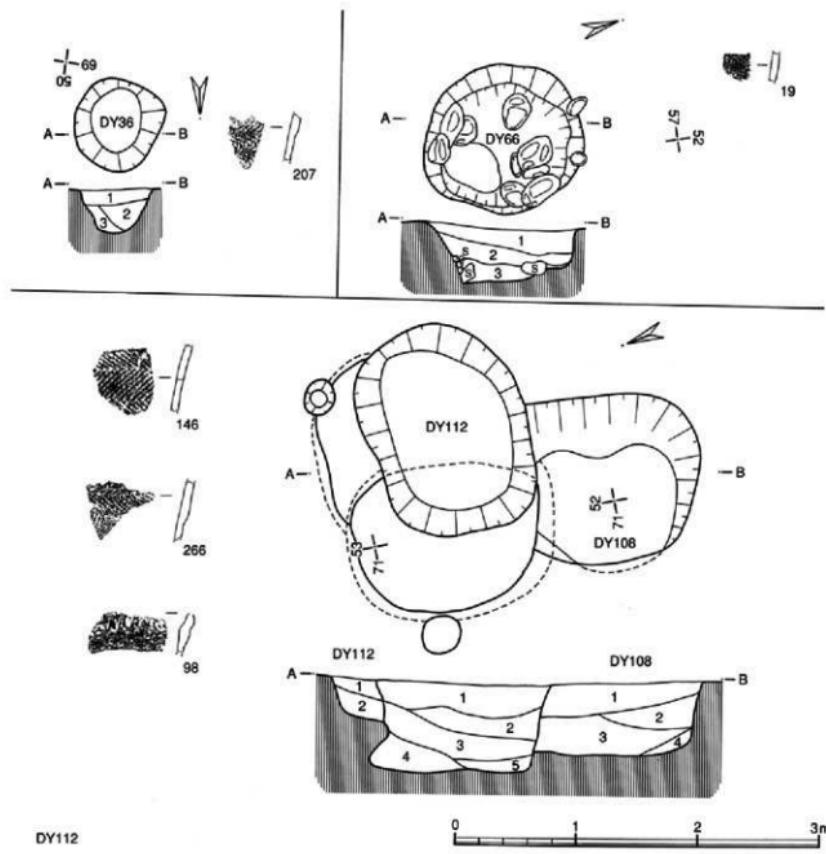
第15図 第3次調査土壤平面図(1)



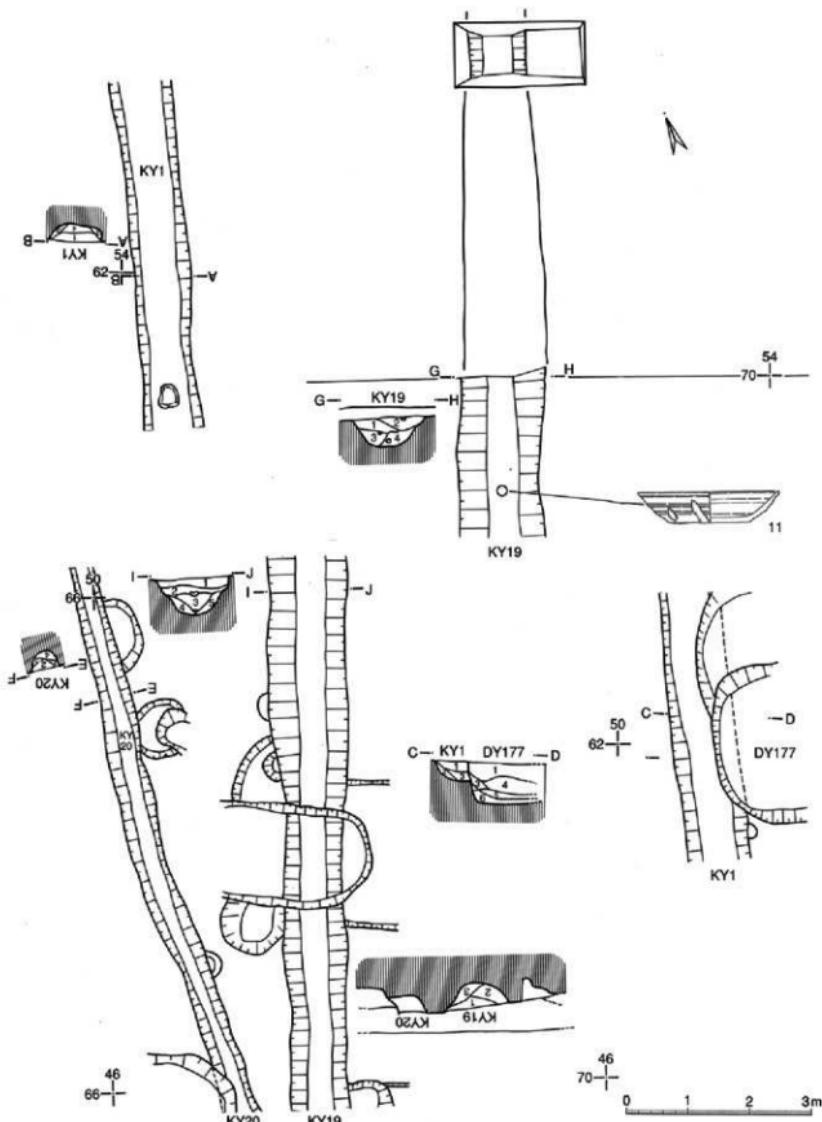
第16図 第3次調査土壤平面図 (1)



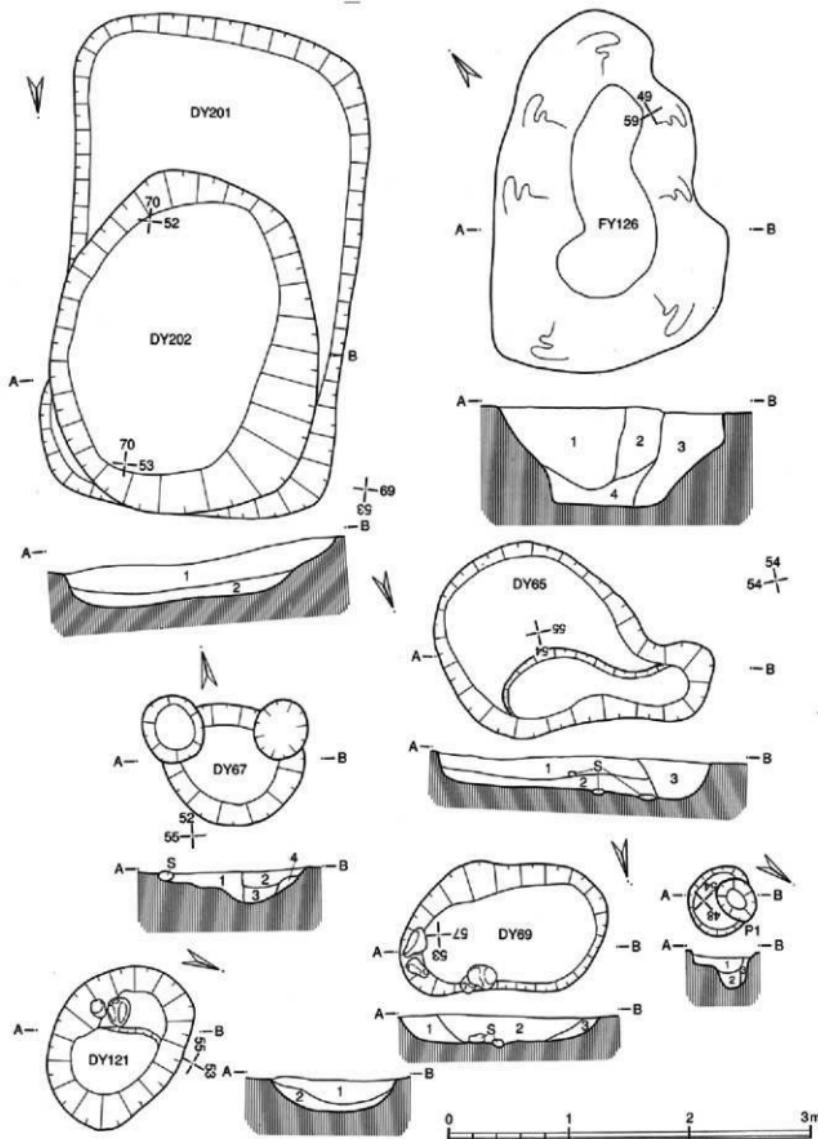
第17図 第3次調査土壤平面図 (12)



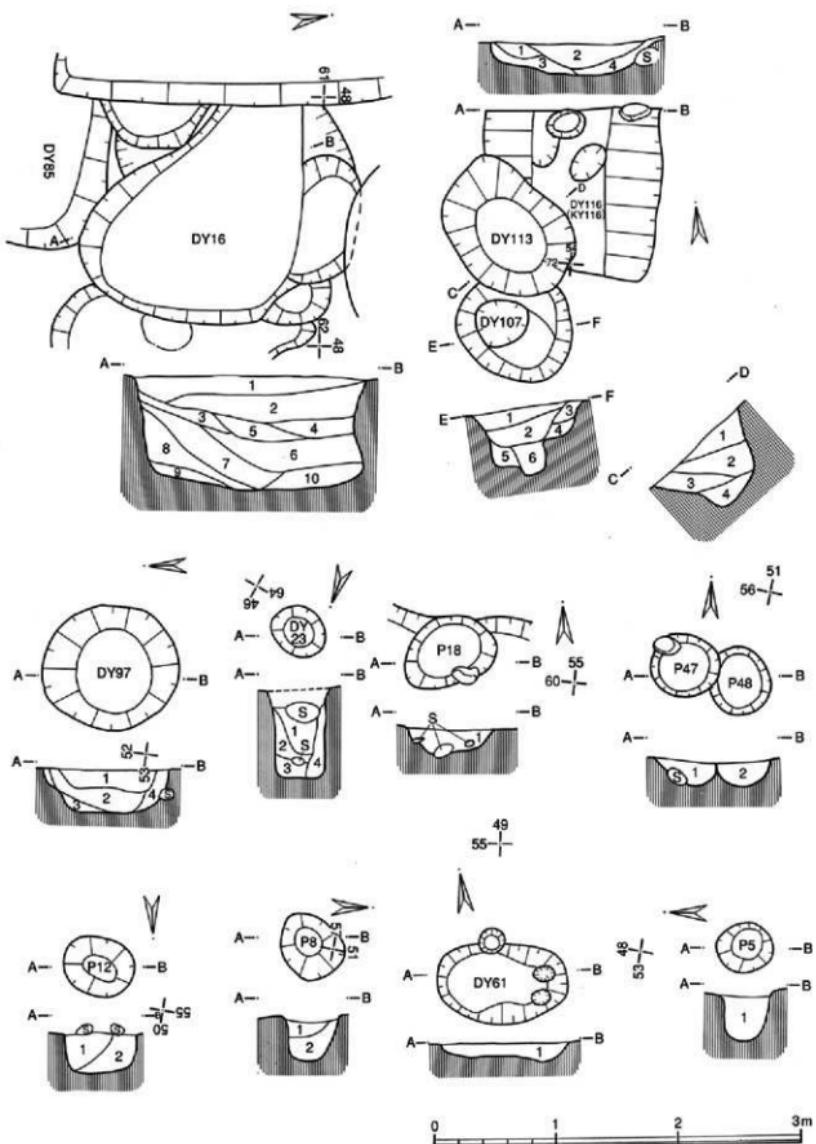
第18図 第3次調査土壤平面図 (3)



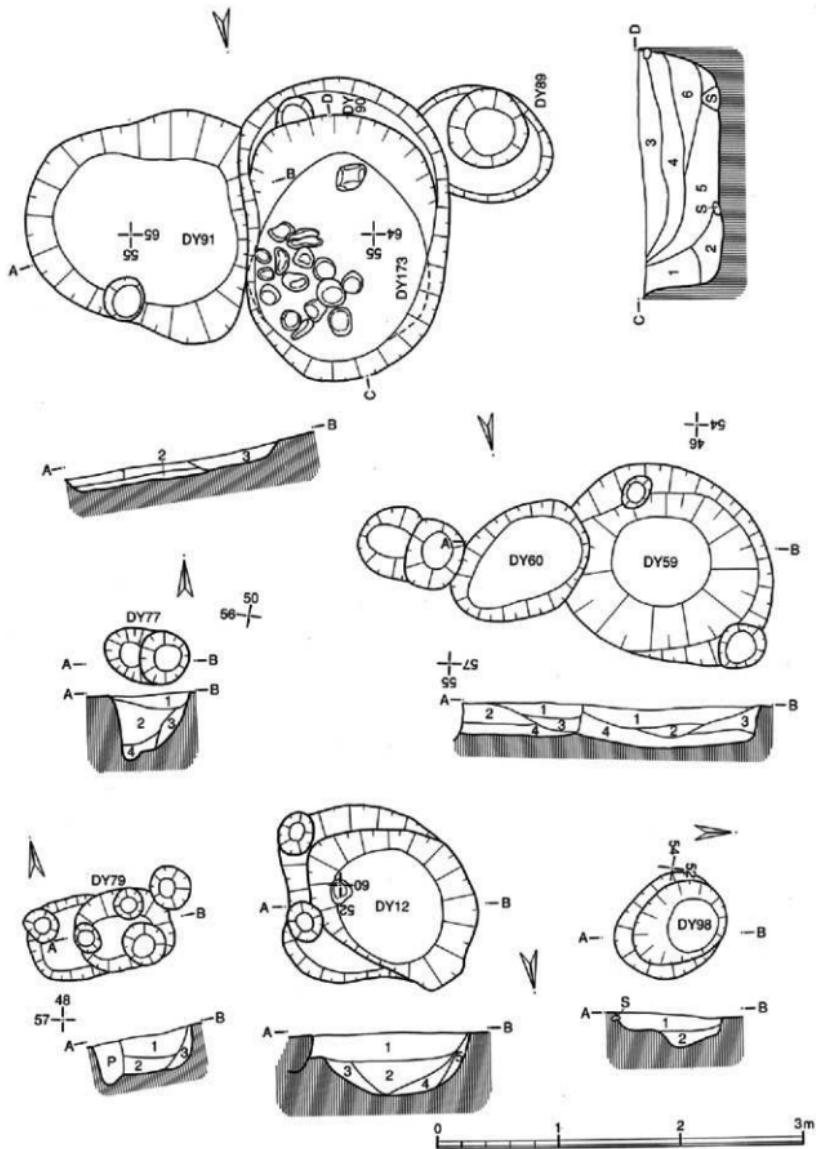
第19図 第3次調査土壤平面図(14)



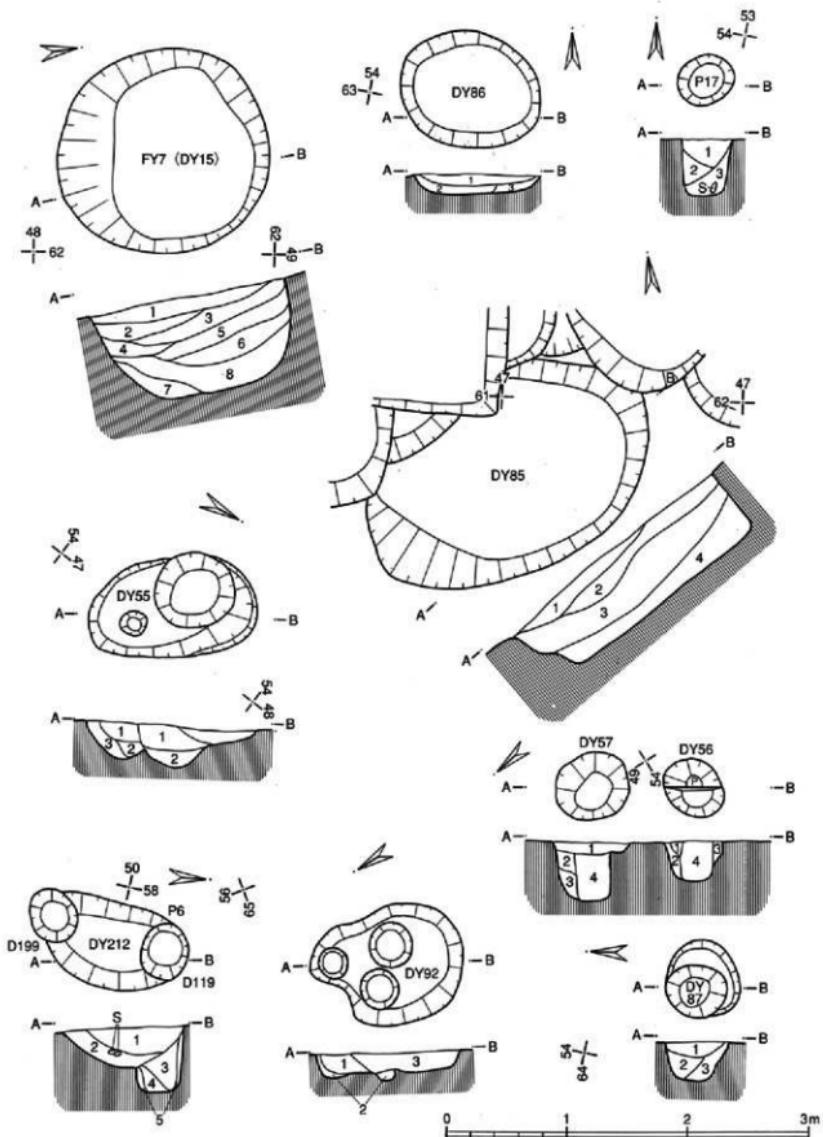
第20図 第3次調査土壤平面図 (15)



第21図 第3次調査土壌平面図 (16)



第22図 第3次調査土壤平面図(7)



第23図 第3次調査土壤平面図 (18)

量の礫を含む。前述したB群と同様にN群II類土器が出土している。

縄文後期初頭でC群に細類した土壙は7基検出した。それらについて説明したい。分布状況を見ると第1グループに2基DY48, 51、第2グループにDY721基、第3グループにもDY29の1基、第4グループにはDY32, 39の2基、H類としたDY91と隣接してDY90がある。

いづれの土壙は重複して確認された。第16図のDY48は覆土が一層で深さも17cmと浅い土壙である。O群II類の口縁部土器片が出土している。第11図のDY52の覆土からはE群II類の縄文前期の土器片が出土しているが混入と考えられ、覆土の吟味により縄文後期初頭の土壙とした。第13図のDY72も深さが12cmと浅い。P99と重複している。

DY29は第3グループの中心に位置する土壙であり、O群II類土器三十稻葉式併行の蓋が出土している。出土した蓋は第27図13で、ブリッヂ箇所が欠損している。図版4で示した遺物の出土状況は、裏返しの状態である。DY184, 185によって北方、南方が削平されている状況を示す。長径は100cmの円形状を呈すると推測され、深さは22cmを測る。

今回に調査区からは蓋は3点出土している。DY63, DY102そしてDY29である。これら3基の土壙を中心として、他の土壙が集中する傾向が認められる。偶然かもしれないが何らかの意図が感じられる配列と推定したい。

調査区の東方にはDY32, 39がある。第17図のDY32は重複しており、覆土からは混入したと想定されるF群II類土器が出土している。DY39は縄文前期初頭の土壙と重複しており、覆土からはF群II類土器5点、N群II類土器10点が出土している。

縄文後期の土壙群からはD群に細類する形態は認められなかった。E類としてはDY109, 122の2基を検出した。いづれも調査区の北東隅に位置し、平面形状は楕円形状を示す。第11図に示したのがDY109であり、覆土上面からP群II類土器に細類した十腰内式併行の土器口縁部片が出土している。縄文後期中葉の土器であり、今回の調査においてはDY119から出土している第49図54, 55の加曾利B式併行土器2点だけである。

DY122は長径170cm、短径120cmを測る。深さは55cm、底面は平坦である。覆土からは土器片10点が出土している。2点はF群II類の縄文前期初頭である。混入したものと考えられる。DY109の覆土からは、円盤状石製品・石箇が出土している。2期の構築目的としては平面形状や出土遺物から墳墓の可能性が高い。

H類に細類したDY91は第22図に示した。N群II類土器が1点出土している。深さは12cmと浅い。土器片の他に剥片3点が出土している。不整形であり、自然の落ちこみと考えられる。

L類は縄文後期のピット群を一括した。第13図に示したP20の断面形態を有する。住居跡等に関連するピットは検出されなかった。

以上、縄文時代の造構群について述べた。これらの多くは中世・近世の造構群と重複しており、明確に把握するのは困難な地域もあった。また、縄文時代においても重複している箇所も認められた。住居跡については、明確に断言できるのはFY17bとした方形の竪穴住居跡1棟だけであったが、重複関係の吟味から、FY6, DY21が住居跡としての可能性が高いことをつけ加えておく。

・中世の遺構 [第19図-23図]

覆土は明黄褐色の砂質土で縄文時代の覆土より柔らかい土質である。また、西方区域のピット群の多数に焼土を含む覆土が認められた。出土遺物は第56図に示したカワラケが主流を占め少量の陶磁器・瓦質土器が出土しているが、数は非常に少ない。

遺構の広がりを見ると調査区中央やや東方に位置す溝状遺構KY1の西方区域に集中して分布する。この分布状況から判断するとKY1と中世遺構群は密接な関係あると言える。このような状況で検出した中世の遺構としては、土壙49基、ピット群116基、溝状遺構2基で総計は167基であった。これらの遺構群についての細類を付け加えたい。

土壙は細類して述べるB類2基、C類3基、D類1基、E類3基、F類20基、G類1基、H類1基、不明3基となる。不明とした遺構は近世・現代の削平によって、著しく形状が失しなわれた状況を呈する。また、土壙の中には覆土に縄文土器が多く含むが、覆土の吟味から中世に位置づけした。

細類した形態の中で最も多く認められるのはF類としたもので、平面形状が橢円形をなし浅い形態を有する土壙群である。細類した順に述べる。

B類はDY42、59で、DY42は調査区の東南隅に位置する。縄文土器が多量に出土しているが陶磁器が含まれていることや、土質の吟味から中世土壙と判断した。図示は出来なかったが、中央部に現代の土壙も構築されていた。第14図参照。

DY59は第22図に示した。重複するDY60も中世に位置する。覆土からは遺物は出土していない。覆土には焼土や炭化物が少量混入していた。二基の土壙とも構築意図を示す資料が得られなかった。それゆえ、用途不明と言わざるを得ない。

C類としてはDY98、212、67がある。3基とも覆土から置物は認められなかった。B類と同様に用途不明としておく。D類は第22図に示したDY77で、自然堆積状況を呈する。本類は縄文時代では、落とし穴やトイレと考えられているが、中世では前述した用途は考えにくうことから、不明と言わざるを得ない。

E類はDY43、173、85を検出した。第14図に示したDY43は、長径307cm・短径87cmを測る大型の竪穴状遺構である。覆土からF群II類土器が出土しているが、後世の混入と推測される状況を呈する。第23図に示したDY85は中世の墳墓と推測した土壙である。縄文後期初頭の土壙で削平して構築している。さらに、上面を現代の方形状竪穴遺構によって削平を受けた状況を示して検出した。覆土から遺物は認められなかった。

DY173は第22図に示した。底面に多数の河原石がある。壁面の立上りや、平面形状から判断して墳墓と考えられ、碟は当初上面にあったものが底面に落下したものと理解される。遺物は認められなかった。縄文後期初頭のDY90と重複する。

F類は図示したDY121、69、60、86、55、92について述べる。第22図のDY121は自然堆積状況を示す。遺物は認められなかった。他の6基も同様な状況で検出した。用途は不明と言わざるを得ない。G類は第21図に示したDY61の1基を検出した。状況はF類と同様である。

H類もDY65の1基だけである。重複して構築した結果、不整形状を呈するを考えたい。遺

物や焼土は認められなかった。本類も用途不明である。以上で土壙の説明を終わる。

ピット群は4形態に細別した。第5図に示すようにK類・IV類である。中世のピット群は縄文時代のピット群とは覆土が異質であり、容易に判断できた。大半は平面形状が円形で浅いタイプであった。代表的なP 12, 8を第21図に示した。また第23図DY 56, 57の様に対痕跡が確認された例もあるが、掘立柱建物跡を構成する柱穴群は検出されなかった。

#### ・中世の溝状遺構〔第19図〕

調査区の中央に南からやや北西方向に延びるKY 1, 東方に位置するKY 19の2基が認められる。KY 19は調査区に直交して南北に走る。KY 1は幅48cm, 深さは39cmを測り、長さは18m確認された。覆土は自然堆積状況を示し、断面形態は壁が緩やかに立上がる「U」字形を有する。覆土からは縄文前期土器片25点、縄文後期土器片7点、縄文早期土器片1点、石箆状石器2点、石皿1点、砥石1点、石匙未完成1点、打製石斧未完製1点、凹石1点、陶磁器1点が出土している。

重複関係を観察すると地方のDY 124(縄文前期), DY 176, FY 6を削平して構築している様相を呈する。DY 177はKY 1を堀り込んで構築しているのがセクションから確認した。

KY 1は南部で止まる。溝は建物や屋敷の区画する施設であり、今回検出したKY 1も前述の周辺で構築されたものであろう。なお溝が止まる箇所は出入口と考えられる。

KY 19はKY 1よりやや幅広く72cmを測る。深さも47cmと深い。北方の底面からはカワレケが完形で出土している。第56図11である。なお堀りは土壘が付随する場合が多く、KY 19も土壘を伴う形態が想定される。後世の土地利用によって土壘は削平され、掘跡だけが現存したと考えられる。

#### ・近世の遺構〔第18図-20図〕

土壙12基を検出した。調査区の南方区域に分布する遺構が大半である。遺構番号で述べると次のようになる。DY 11, 15, 16, 55, 94, 99, 156, 177, 201, 202, FY 5, 6の遺構番号である。第18図に示したFY 5, DY 156, 157, 16, 15が連続して構築された状況を示している。楕円形状をなす平面形状で、壁が直角に立上るB類・E類に細別される土壙群である。

陶磁器が出土しており、土壙の形態及び覆土の観察から近世の墳墓と判断した。他に、FY 6やDY 177がある。FY 6は縄文前期の竪穴状遺構を堀り込んでいるので、平面図で示すのは不可解であったが、第12図のセクション図のその存在を知ることができる。第17図のDY 11も墳墓の可能性が高い。

#### ・現代の遺構〔第15図〕

明確に現代(明治以降)に位置する遺構としては第15図のFY 7, FY 3がある。FY 7は縄文前期初頭の住居跡と、縄文後期初頭の土壙群を削平して、堀り込んだゴミステ穴で、内部からは多量のビン類・陶器類が混入していた。「NIPPON」ビールとかかれたビンであり、少なくとも日本でビールが普及するのは明治以降と考えられ、現代の遺構とした。FY 3は方形に掘り込んだ竪穴状遺で、開墾の際に出た石をする穴である。

#### 4 出土遺物

今回の調査区から出土した遺物の総数は3,578点であった。大別すると復元土器14点、土器片2,145点、石器39点、剥片1,159点、礫石器79点、カワラケ39点、陶磁器39点、古銭5枚、鉄製品1点となる。

出土状況を見てみると復元土器は土器内部からの一括土器が大半であった。調査区域としては遺構が密集する西南から南東部に最も多く認められ、遺構の分布と遺物の出土量が関連することを示している。

遺構の中でも述べたが、遺物の出土状況は混在している例が多く、陶磁器と石器が同時に出土する場合もあった。今回の調査区域が、長年継続して利用されてきたことが、遺物の観点からもうなづける。

出土遺物については、実測図を必要と認識した復元土器14点、石器39点、礫石器22点さらにカワラケ7点、拓影図420点を作成したので参照願いたい。またこれらについては細類も示した。第58・59は石器、第60図は礫石器の形態分類図である。

土器片は縄文時代早期（C群土器）114点、縄文時代前期（E、F群土器）796点、縄文後期（N、O、P群土器）1235点であった。石器は石鎚（I群石器）7点、石匙（II群石器）6点、石砲状石器（III群石器）14点、削器（IV群石器）3点、尖頭状石器（V群石器）4点そして磨製石斧（VI群石器）3点となる。

礫石器は（VII群石器）凹石56点、磨石8点、焼石3点、叩石2点、石皿3点、円形石製品6点、石棒1点となる。

剥片はフレーク622点、チップ537点であった。カワラケ97点の中で7点を復元し、図示することができた。陶磁器は小破片である為、復元できなかった。鉄製品も小破片であり、図示できなかった。以下大別した遺物に細類を付け加えたい。

##### ・縄文早期の土器 [第32・33図]

復元した第33図1の1点、破片39点を選出した拓影図を作成した。出土した早期の土器を細別するとC群I類の常世式併行、C群II類の明神裏Ⅲ式併行、C群III類の無文土器類の3形態が認められる。復元した土器は、器高31cm・口径34cmを測る常世式併行であろう。口縁部はゆるやかな波状を4単位有する形態であり、半載竹管を工具に用いた細沈線で三条に区画した空間を描き、貝殻腹縁連続文をなす文様構成である。

器構は薄く、焼成は良好である。調査区の北西部DY140周辺が出土している。本市における早期の復元土器は5点を数えるが、その出土地域としては、東南に位置する万世地区に集中している。遺跡名で言えば八幡原遺跡群のNo.24遺跡、法将寺遺跡、横山遺跡、柿ノ木遺跡、そして今回の大樽遺跡となる。

C群I類土器は第32図1～23である。遺構出土としてはDY90が1, 2, 4, 5, 13, DY101が2, 6, 7, 9, 10, DY120が8, DY83が17となる。薄く、焼成は良好で赤褐色や明褐色の色調である。文様は貝殻腹縁連続文を有する1～13, 16沈線文を主体とした14～23が認められる。2や5のように口辺部の表裏に文様を有する土器片もある。口縁部破片から想定

すると、外反する器形で占められる。

C群II類は第32図24～31で、連続突刺文を主体としている。特に29は拓本では沈線文のよう見えるが、連続突刺文によって線状に構成されている。明神裏Ⅲ式併行の土器群である。

第33図の32～39は無文土器のC群III類である。焼成や器厚から早期の土器群と判断した。胴部片は32～37、39、底部に近いのは38と推測される。早期の遺跡において、無文土器の出土数は全体の約3割は認められる。

今回出土したC群I、II、III類土器は縄文早期中葉の土器群であり、本市遺跡では桑山IV期からV期に併行する。文様の偏年は撲糸文系・押型文系→初期沈線文系→沈線文系・突刺文系→貝殻文系→表裏条痕文系と言った一連の流れが想定される。ちなみに本市の桑山遺跡群No.5二夕侯A遺跡からは早期の住居跡群が19棟確認された。

I期からV期に細別される住居跡群で、住居跡から出土した土器群を桑山I期～V期とし、本市の標準遺跡となっている。各時期とも2棟から4棟で構成される集落であり、本遺跡にも縄文早期住居跡群があったことはまちがいないが、今回の調査では残念ながら明確に出来なかった。

#### ・縄文前期の土器

第24図・第34図～第44図がE群、F群に細別した土器群で、E群I類は第34図1～6であり、関東の花積下層式併行の土器群である。

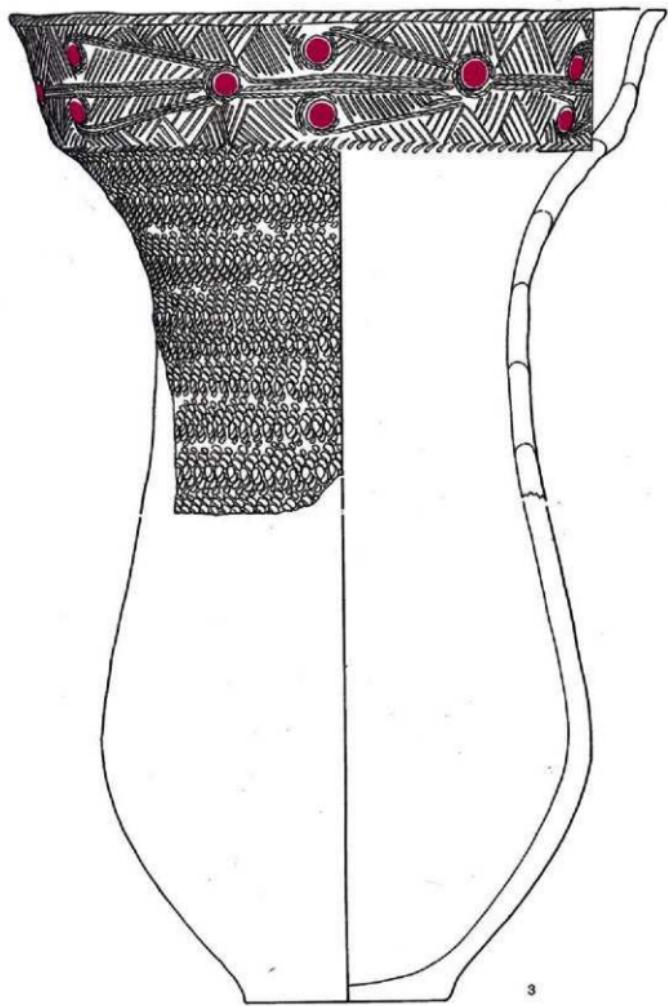
中世の遺構であるK Y 1 覆土からの出土が多い。外反する器形で口縁部が波状を呈する破片である。焼成は良好で暗赤褐色を有する。本類の特徴は蕨状撲糸圧痕文を施し、「ハ」状の短沈線で文様を構成する。本市の縄文前期初頭の土器偏年で言えばII C段階に相当し、蕨状撲糸圧痕文の最後の段階である。すなわち初期段階の蕨状撲糸圧痕文の中心は撲糸であるが、本類は中心に円形の突刺文を有し、縄文を施す箇所に「ハ」状文を示すことが上げられる。(第24図参照)

E群II類土器は第24図3、第34図7～23、第35図28、31～33であり、関東地方の関山式併行の土器群である。第24図は唯一復元した土器であり、口径20cm、器高は推定で30cmを有すると考えられる。胴下半部については一ノ坂の出土例を見本として復元したが、必ずしも正確と言えない。口縁部に集中して文様が認められ、円形の突刺文を赤く彩色してメルクマールとし、蕨状撲糸圧痕文を配す。口辺部に斜状のキザミ、交互の斜状沈線で口縁部文様帯を施す。それ以外は、結束羽縄文を施す。

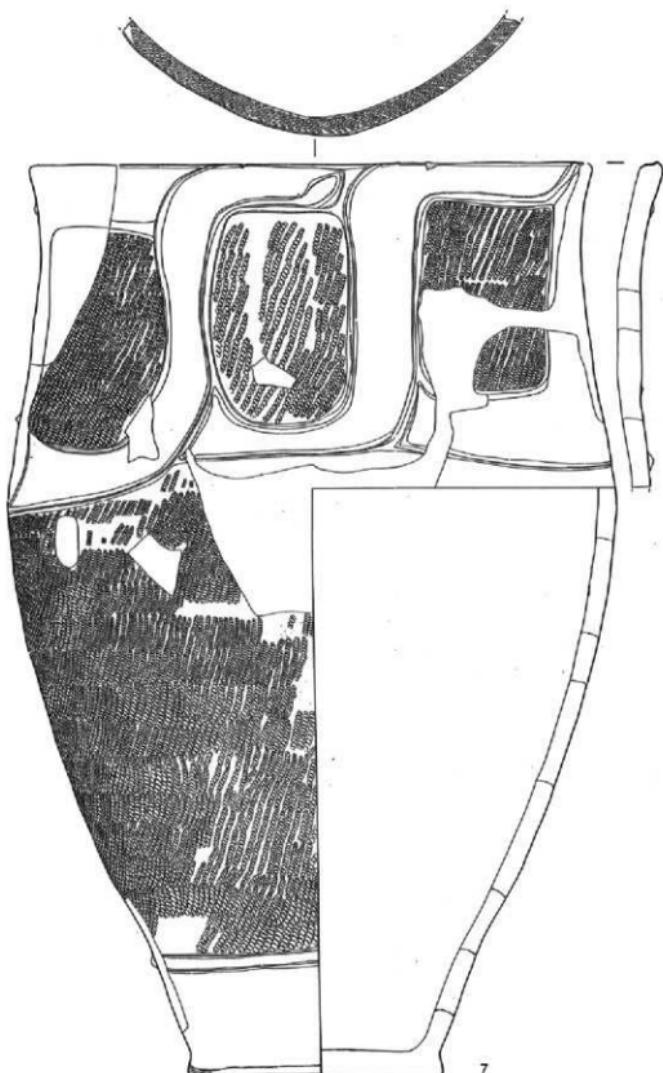
第35図7～27、第35図28、31～33の土器片は口縁部破片であり、胴部と口縁部を区画するために粘土粒を貼付している第34図13、19、18、27、第35図28が認められる。

器形は外反する第33図7、12、16、14、17、20、26、内反する第35図32、31、30がある。胴部は結束羽状文や羽状縄文を施文するものと考えられる。ループ文を施文した破片は確認されなかった。

F群I類はループ文で第44図247、248、250、第45図251～254がある。ループ文が出現するのはIII a段階の一ノ坂遺跡や松原遺跡が知られる。器面全体をループ文で施文するものと口縁部に方形状や三角形状の無文帯を施す文様が認められる。今回出土した土器片は小破片



第24図 第3次調査出土土器実測図(1)



0 2 4 6 8 10 12 14 16 18 20

第25図 第3次調査出土土器実測図(2)

であり、文様構成は不明と言わざるを得なかった。

F群II類は結束羽状縄文を一括した。第34図35～50、第35図41～64、第36図62～75、第38図の2、103～123、第39図124～145、第40図147～174、第41図177～194、第42図の198～221、第44図222～246・249、第45図253～273がある。

口縁部片としては第35図35・34、第36図52、第37図65・66、第39図2、第42図188・193・186、第43図215、第44図225・229・232・244の14点がある。第39図2は口縁部が直交する口縁部形態であり、口唇部と屈曲する箇所に突刺文を有する。口縁部の形態で内反するには認められなかった。

F群III類は第38図80～104は羽縄文のグループを一括した。口縁部片の88、89は外反する器形を有し、口唇部に楕円形の列点を施す。

F群III類としては、第44図2741点がある。小形の器形をなし、赤褐色を有する焼成で、器面に連続突刺文を施す。胎土に若干石英砂を含み、焼成はきわめて良好である。

縄文前期初頭の土器編年としては塔之原の表裏縄文土器→八幡原Bの蕨状撚糸压痕文→窪平の巻があまい蕨状撚糸压痕文→同じく窪平の蕨状撚糸压痕文に突刺文が出現する土器→一ノ坂遺跡に代表されるループ文を主体とする土器群→蕨状撚糸压痕文が姿を消しかわりに突刺文が主体をなす。胴部にはループ文を施す。今回出土のE、F群土器は窪平の蕨状撚糸压痕文に突刺文が出現する時期に相当する。

#### ・縄文後期の土器

今回の調査区で出土数が最も多い土器群であり、土壤を中心に出土している。復元土器も12点を数える。器形としては深鉢形土器6点、小形土器1点、注口土器1点、壺形土器1点、蓋形土器3点が出土した。細別して説明したい。

N群I類土器は関東では称名寺式併行、東北南部の網取I式併行、東北北部の門前式に併行する土器群で第29図8、第49図52が出土しており、1点復元することができた。この土器は器高が45cm・口径39cmを測り、明赤褐色を呈する。口縁部は無文帶と推測され、帯状に粘土を貼付し、斜状のキザミを有し、胴部には斜状の沈線を配する文様帶である。本類土器は胎土が異質であり、搬入された可能性も有する。

N群II類土器は東北南部網取式併行の土器をまとめた。出土状況からN群I・II類、O群II類土器は併行する土器群である。N群II類の復元土器は第25図7、第26図5・6・9・10・16第30図11、拓影図は第46図、第47図、第48図31・33、第49図53がある。

本群土器は第25図の実測図で示すように「J」字状文が変形した様相を呈する。復元した土器の器高は55cm、口径は短径31cm、長径34cmの楕円形である。口唇部内部にも縄文を施している。第31図の下段に示したのが展開図であり、縄文で示した箇所が現存する。「J」字に区画した箇所に長円形状、方形状を交互に7箇所に配し文様構成である。

胴上半部と底部に配した沈線の区域は横位回転して縄文を施している。同様な文様を有する土器は飯豊町の郡之神遺跡から出土例がある。注目されるのは突刺列点文が併行していることである。三十稻葉1式併行の土器であり、北陸地方との関連を示す資料と言える。

他の本類復元土器も「J」字状の変形を基本とした文様構成であり、第26図10は「J」字状箇所に長円形状の梢円文を配す。口縁部がゆるやかな波状文4単位をなす。第30図も口縁部に突起部を4箇所なす。突起部の中間に向にあって、「J」字状文を交互に配する文様構成であり、4単位認められる。

拓影図で、明確に「J」字状文を有するのは第46図1、第47図28が認められる。他の破片もこの文様を構成するものと理解される。小形土器の第26図5は器高が9cm、口径8cmを測る。波状口縁を有し、全面に繩文を施す。DY63から出土している。

O群I類土器としては、第26図4、第48図36～46、第49図50・51・62～70、第50図の57・60・61・99・89・88を除く土器群で、壠之内I式併行と考える。第26図に示した注口土器は沈線文及び隆蒂文、突刺文から文様を構成している。細沈線を多様する土器片が多く認められる。第49図50・64・39・66・67・70である。50・51は綱取式併行土器でN群II類土器に細別したい。

O群II類土器は三十稻葉式併行の土器群を一括した。第27図13～15、第28図12、第50図88と89・99、第51図90～107の土器群である。

突刺による列点を主体とした文様構成を特徴とする。器形は主に蓋形と壺形を呈し、つまみ部や、ブリッヂ状の装飾をほどこした形態を有する。第28図は全体の約3分の2が出土し、復元可能であり、完形を想定して図示した。平面形状は円形をなし直径19cm、四箇所に凹部を有し、この凹部を中心に文様が展開する。前述した様に列点は繩文原体を固く撲った先端で突刺して施文しており、仮称「原体突刺文」と呼ぶことにしたい。第27図14は三角形を呈する列点で原体突刺文ではない。中央部のつまみ部、ブリッヂ状の箇所が欠損している。文様構成が第28図12と類似し、直径は12cmを測る。Bは原体突刺文であり、ブリッヂ箇所が欠損している。

15は口縁部だけの出土であり、器形は不明である。器面全体に円形突刺文を施文している。突刺文が大、小あることから工具は二種類以上使用していると考えられる。蓋の破片としては第50図88の1点があるだけである。第50図の土器片の中には93や94のように大きめな突刺を有するものも認められる。

P群I類としては第59図54・55の2点が認められる。平行沈線の合間に列点文を有するもので加曾利BII式併行土器と考えられる。

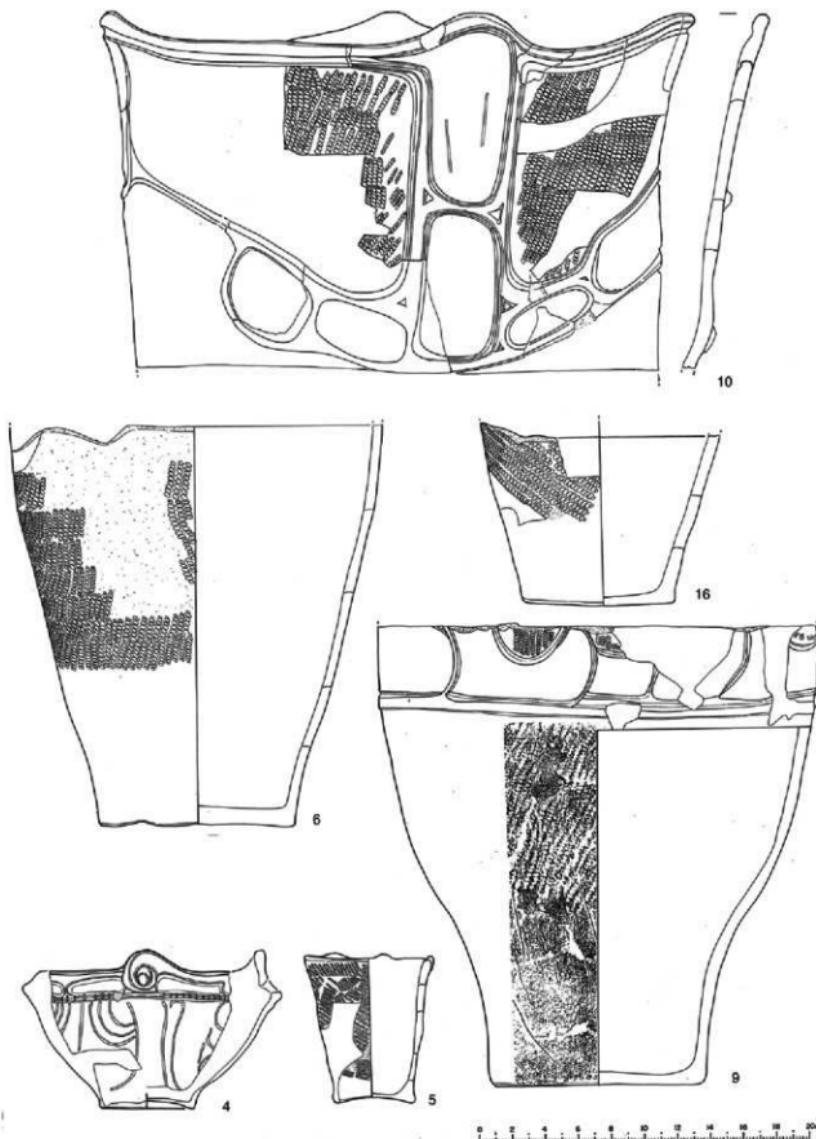
L群II類は第50図57・60がある。十腰内工式併行の土器と推測される。暗赤褐色を呈する色調である。いづれも口縁部片で同一個体の破片と考えられる。なお、第49図の56はE群II類の繩文前期初頭の土器である。

#### ・中世の土器

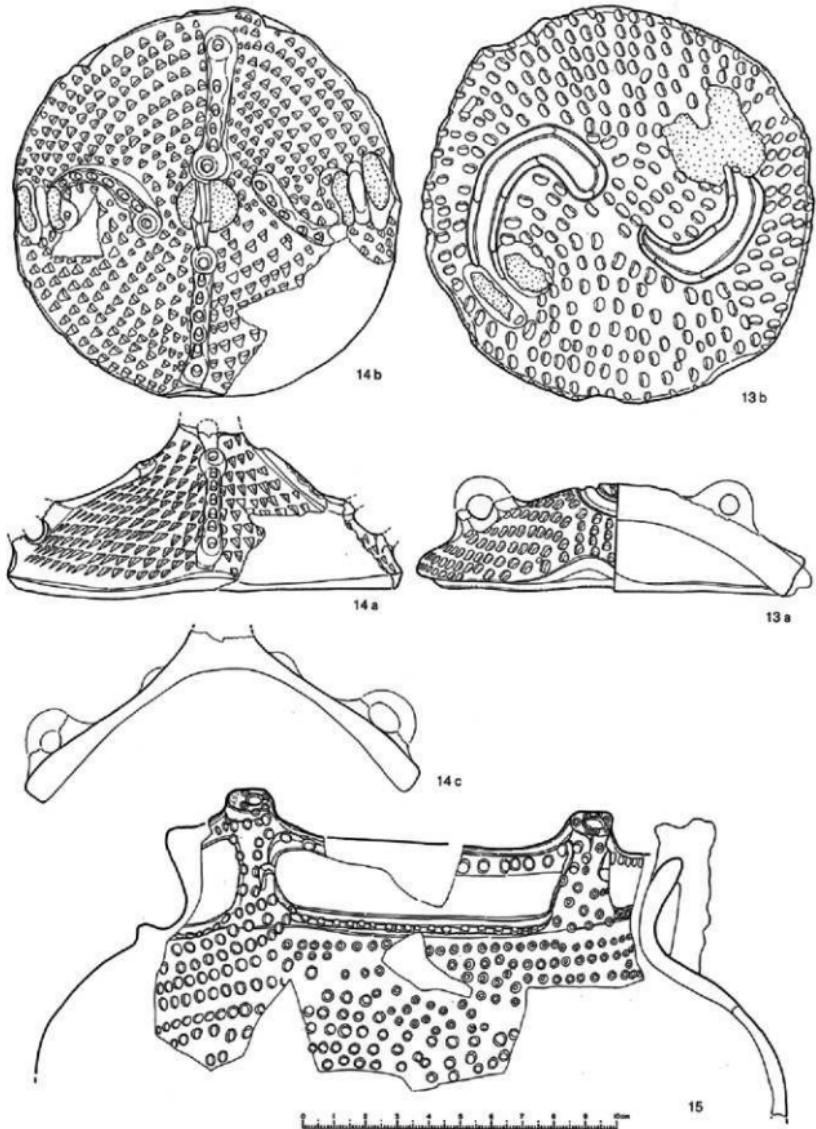
カワラケ7点を復元し図示した。第56図13のスクリントン部分は金箔を有する箇所である。墓壙と推測されるDY25出土している。金箔は全面ではなく部分的に塗られた痕跡を示す。同図11はKY1の底面出土であり、口径は13cm・器高は28cmを測る。

#### ・近世の陶磁器

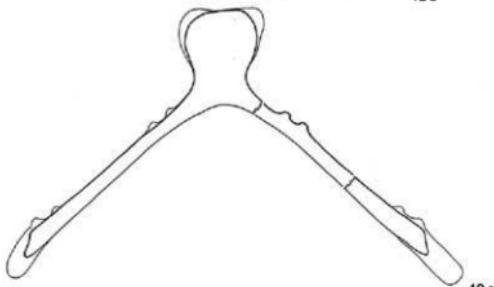
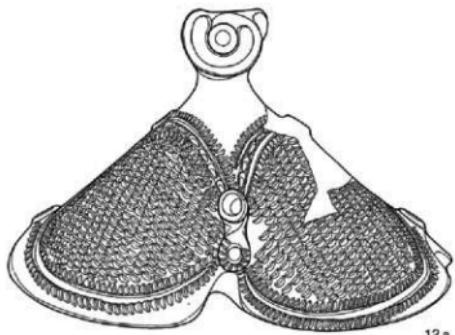
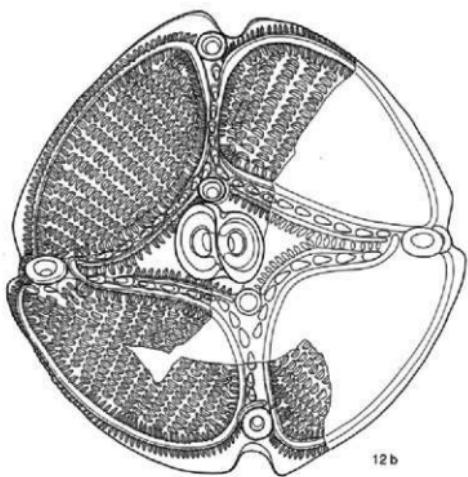
いづれも小破片であり、図示することができなかった。現代の遺物は割愛した。



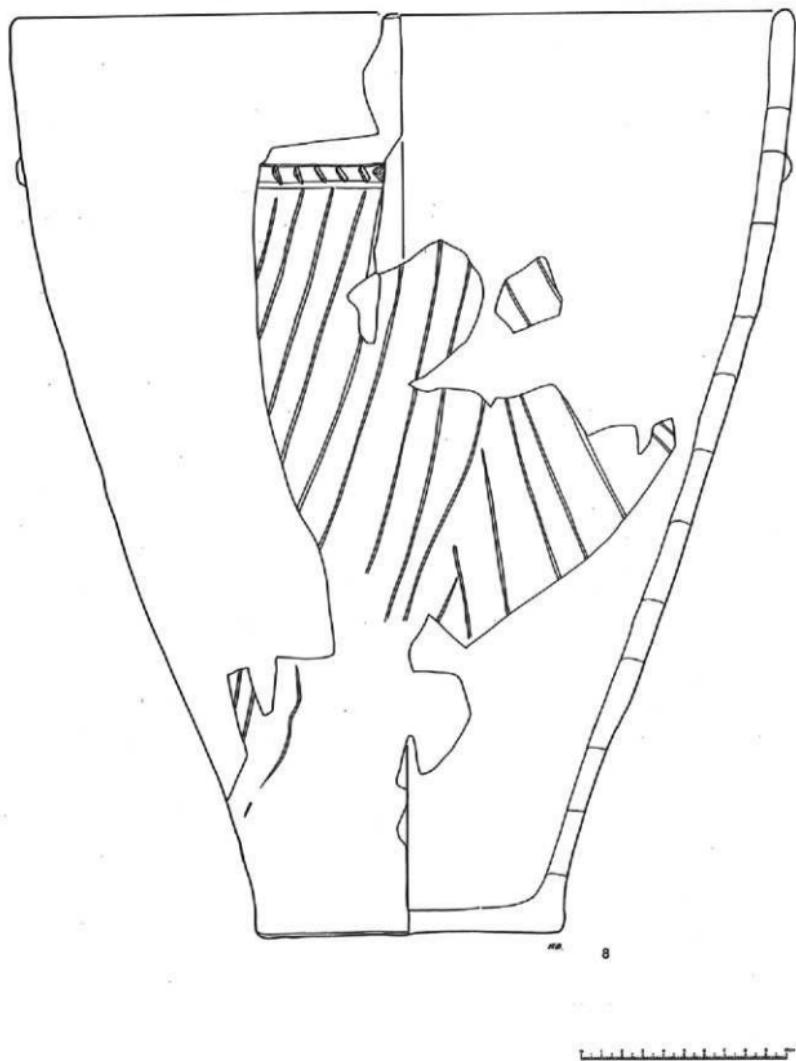
第26図 第3次調査出土土器実測図(3)



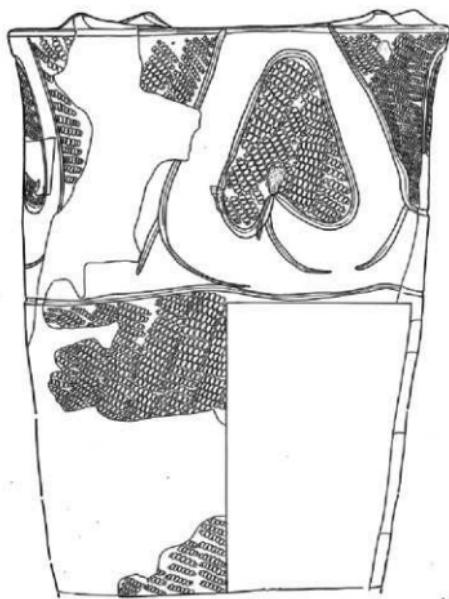
第27図 第3次調査出土土器実測図(4)



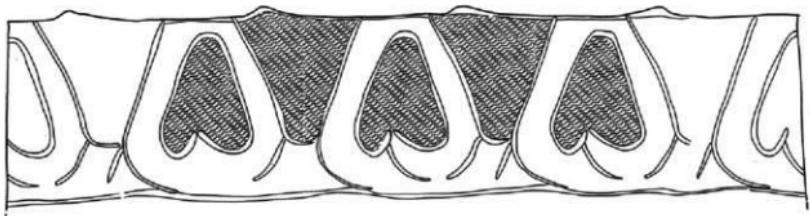
第28図 第3次調査出土土器実測図(5)



第29図 第3次調査出土土器実測図(6)



11 a

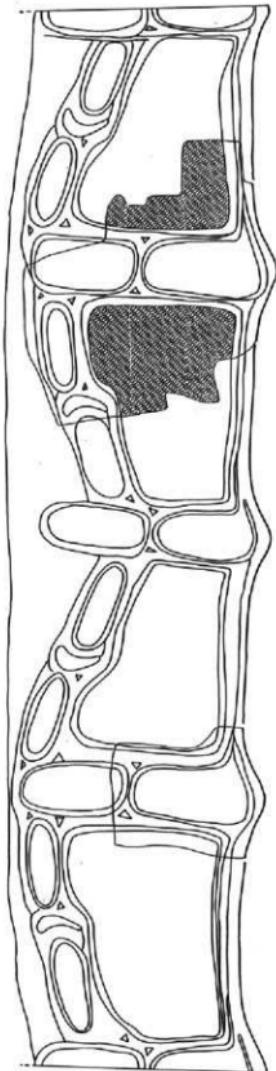
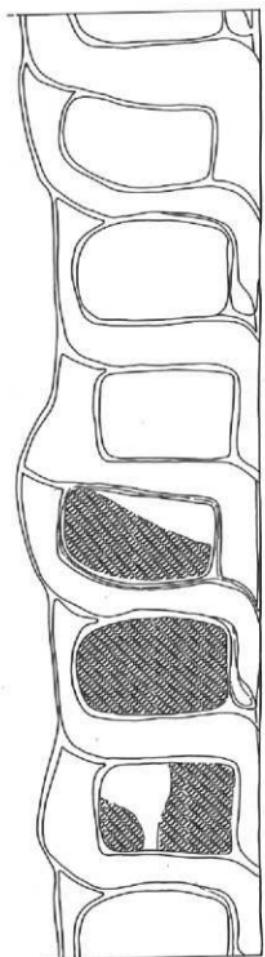


11 b

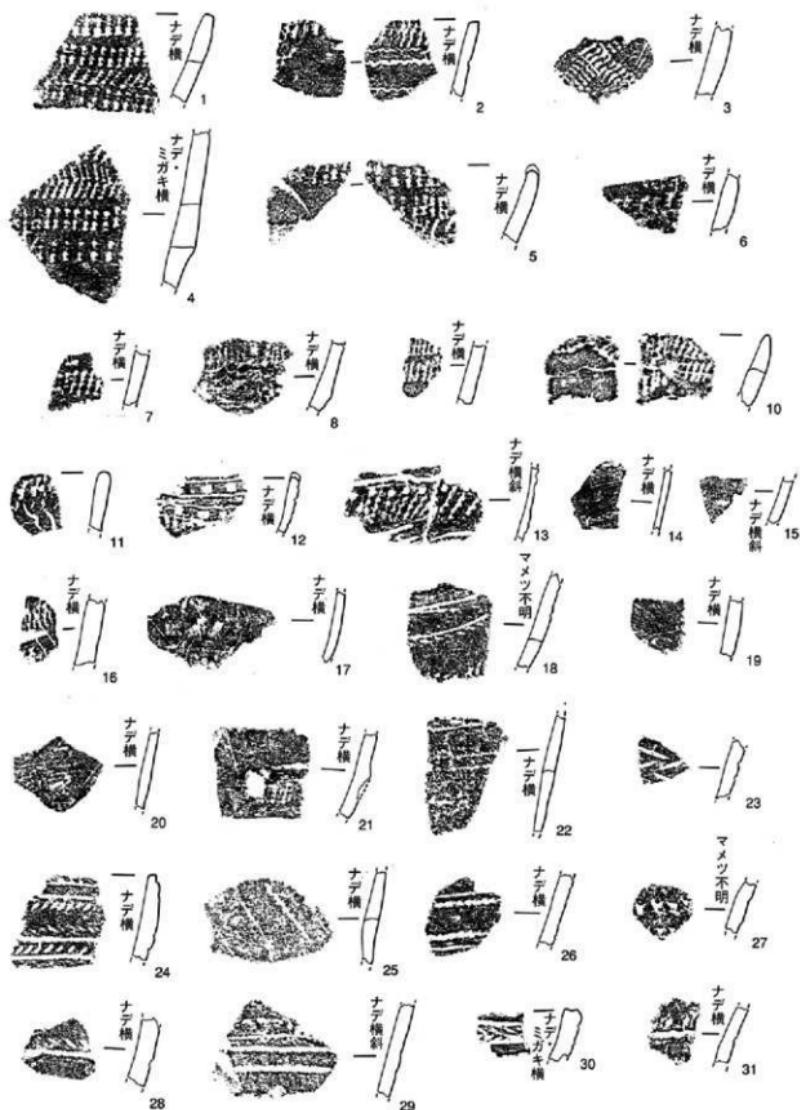


第30図 第3次調査出土土器実測図(7)

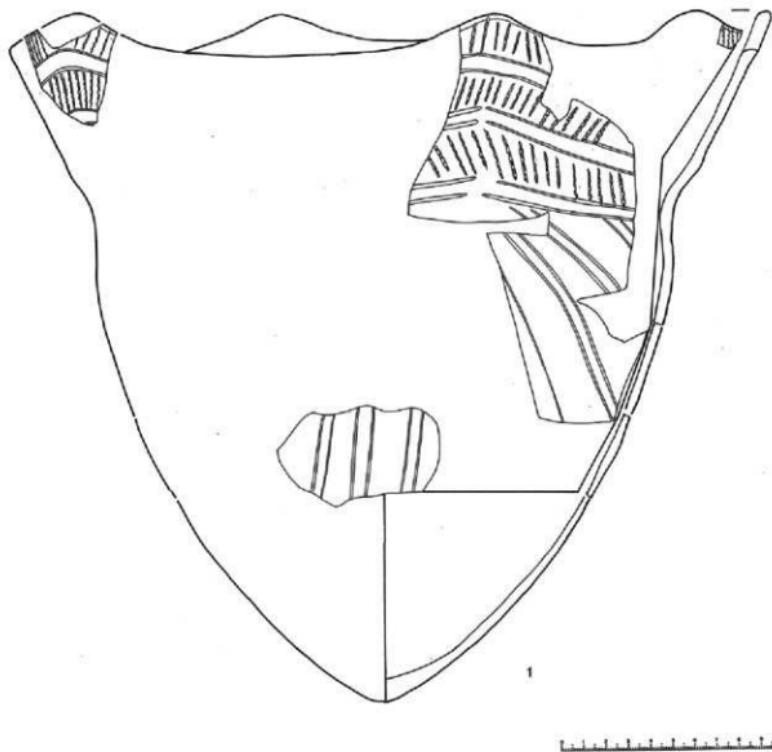
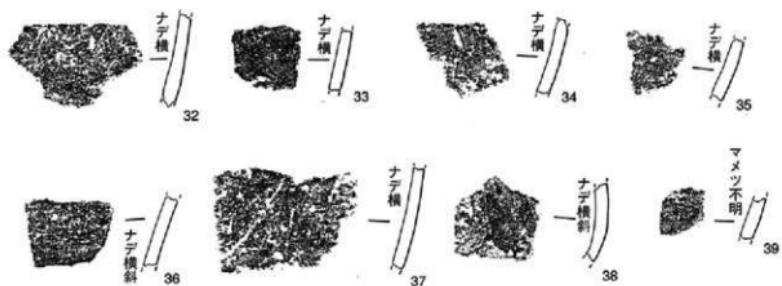
1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100



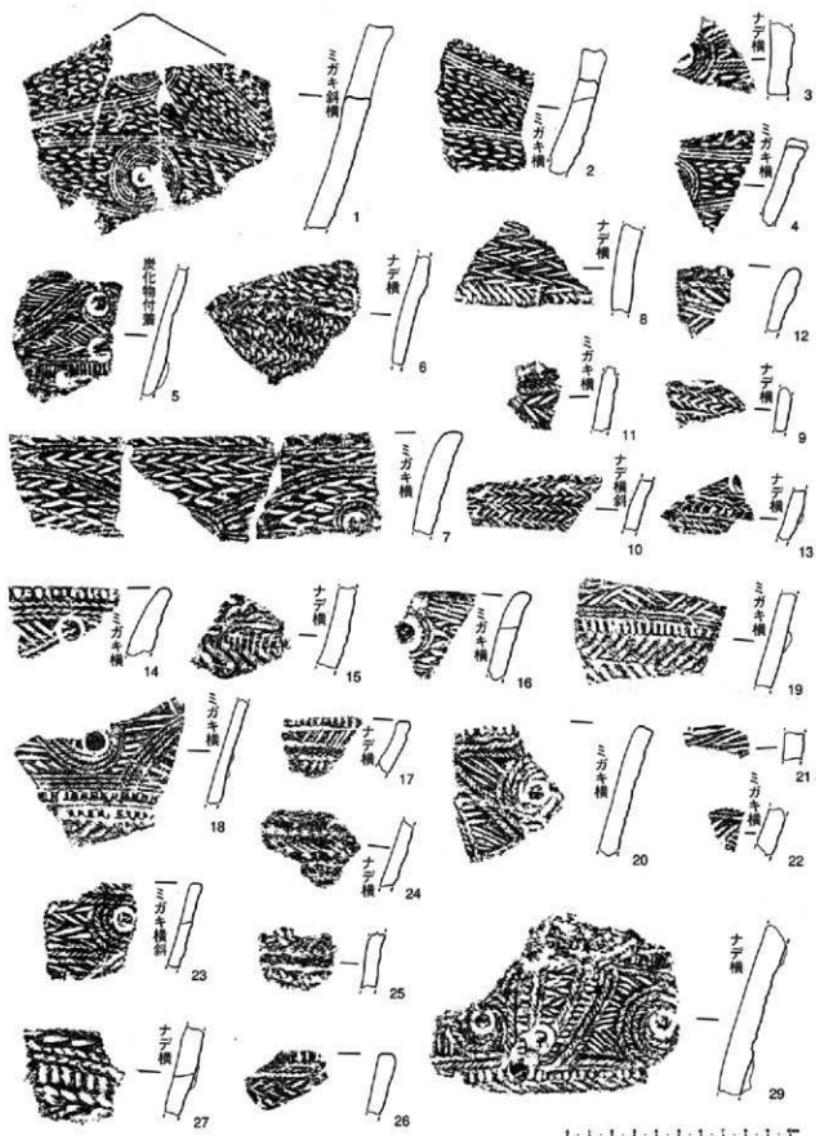
第31図 第3次調査出土土器展開図(8)



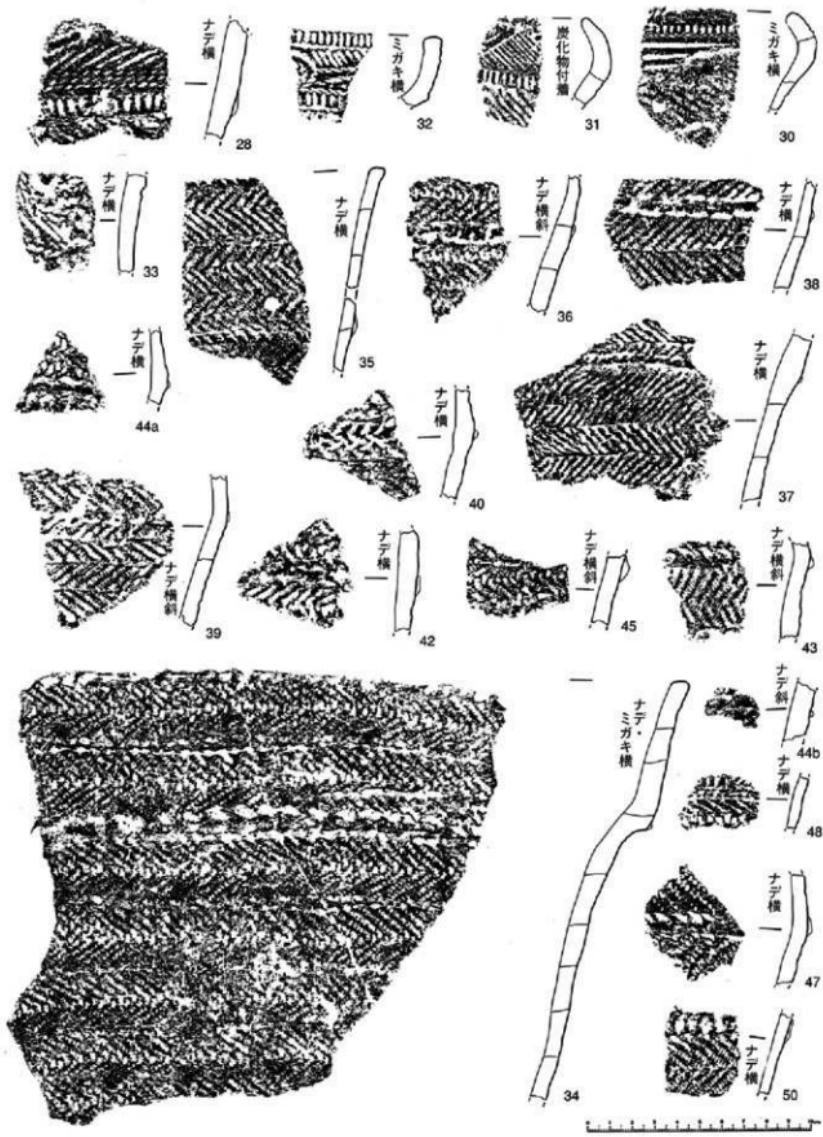
第32図 第3次調査出土土器拓影図(1)



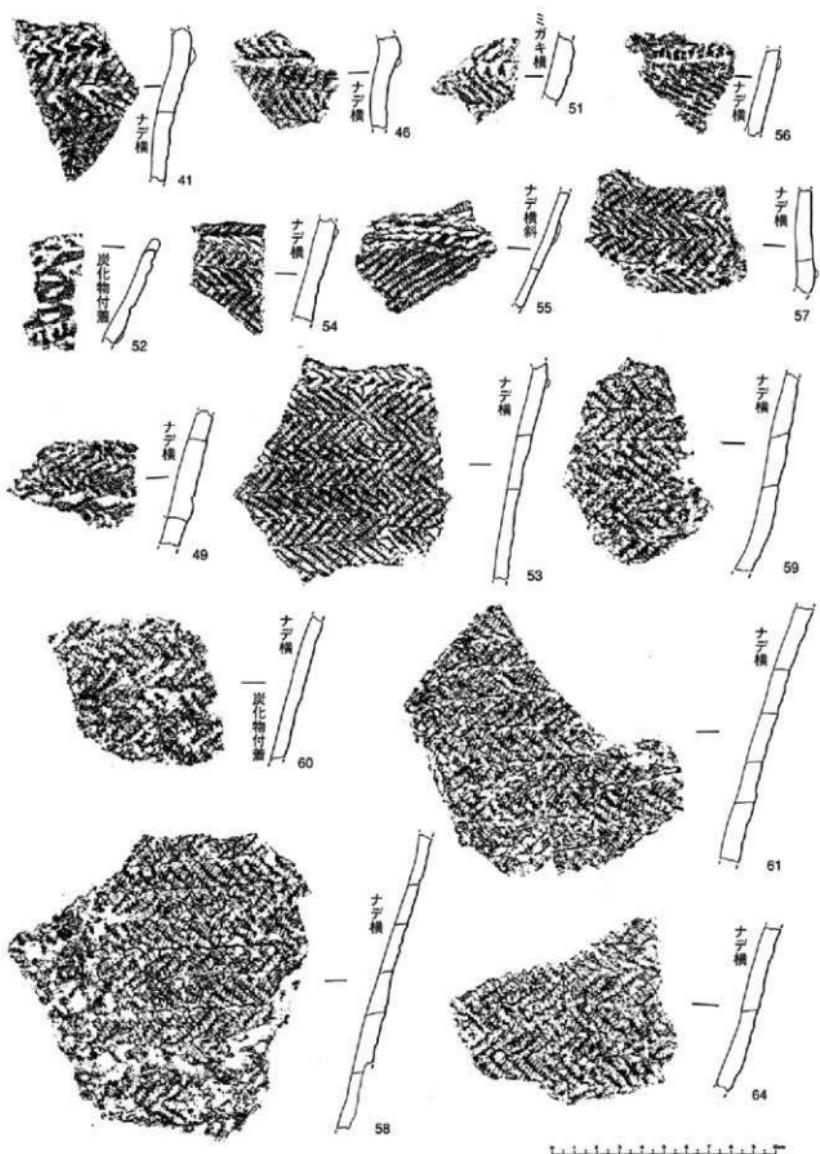
第33図 第3次調査出土土器拓影図・実測図(2)



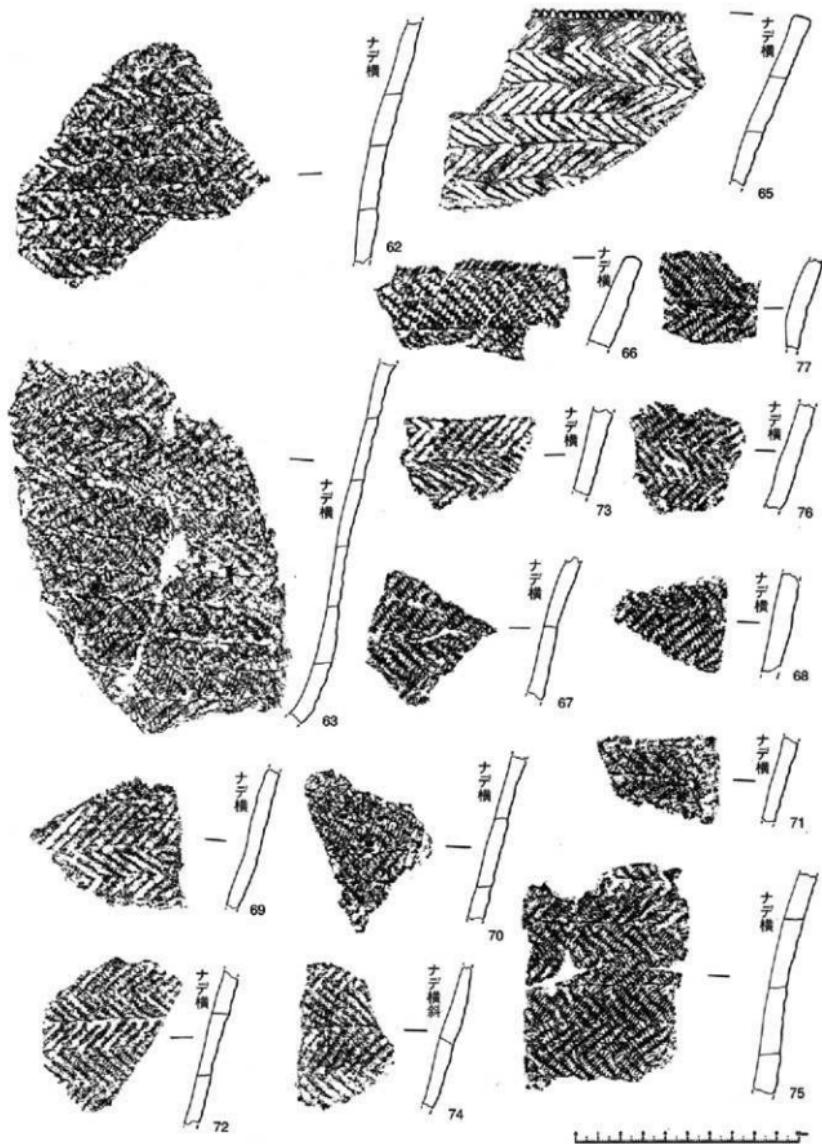
第34図 第3次調査出土土器拓影図(3)



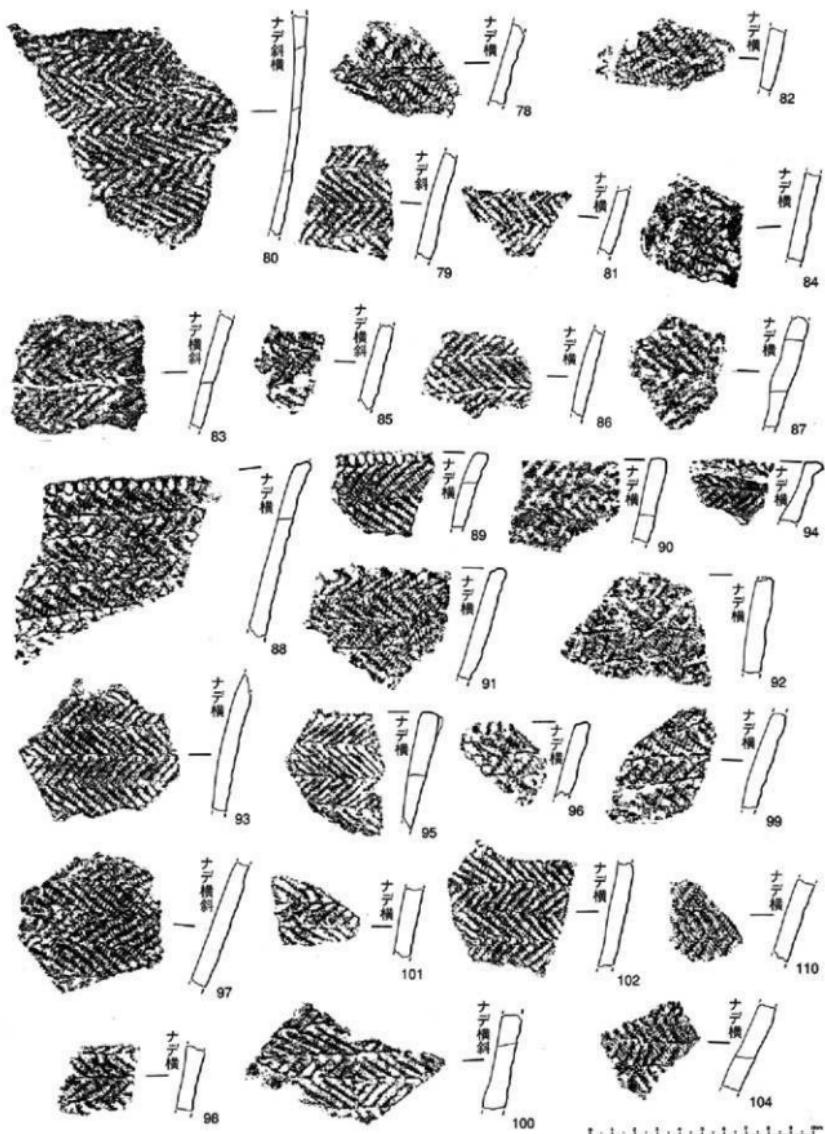
第35図 第3次調査出土土器拓影図(4)



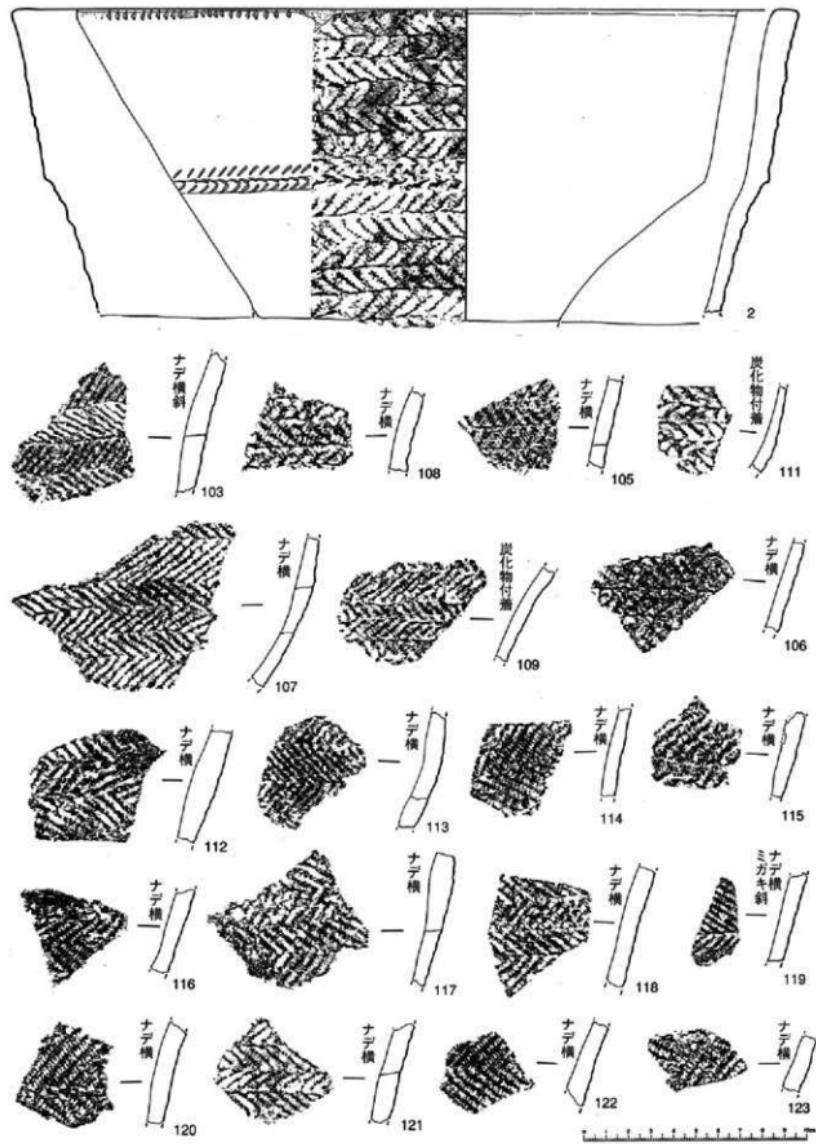
第36図 第3次調査出土土器拓影図(5)



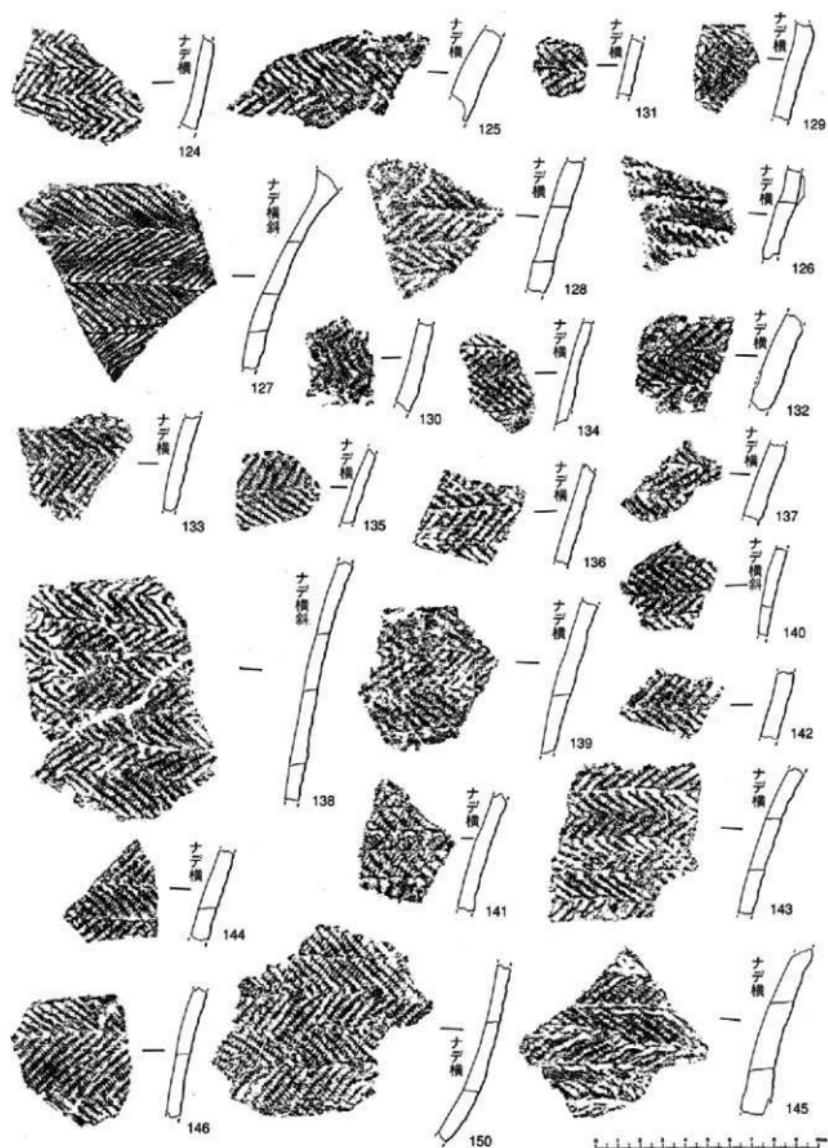
第37図 第3次調査出土土器拓影図(6)



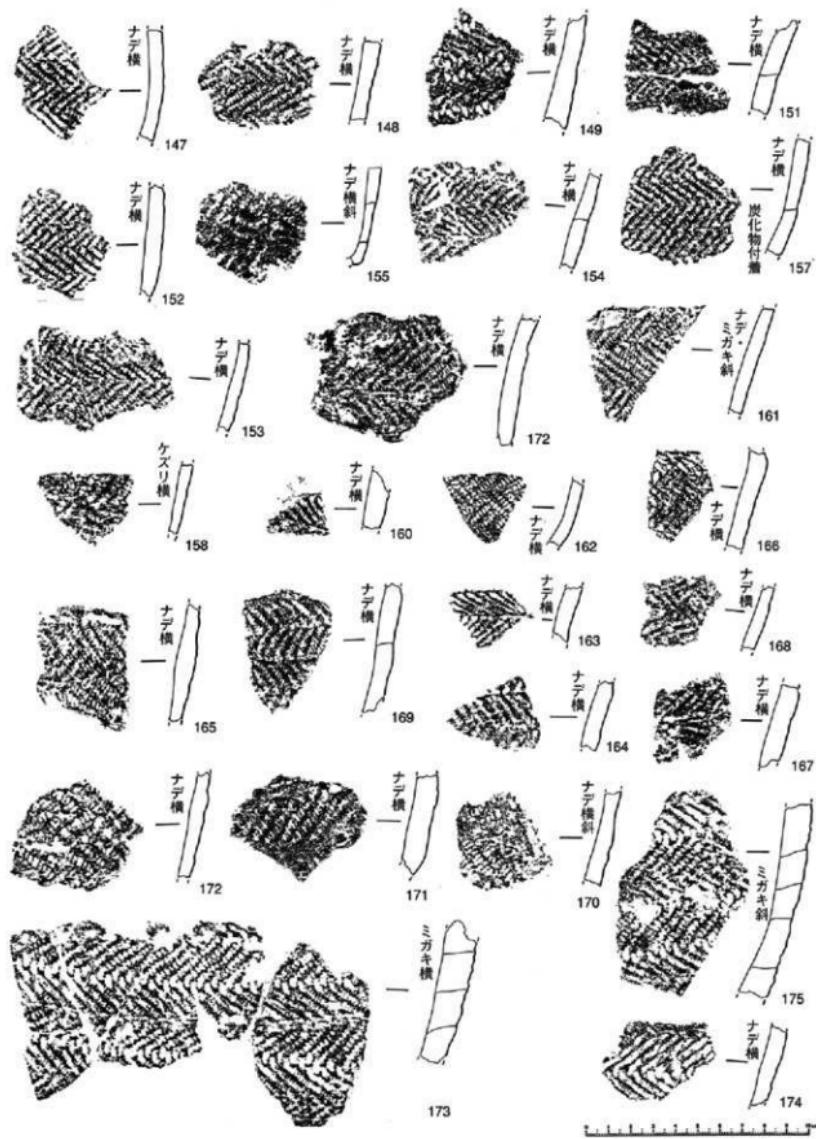
第38図 第3次調査出土土器拓影図(7)



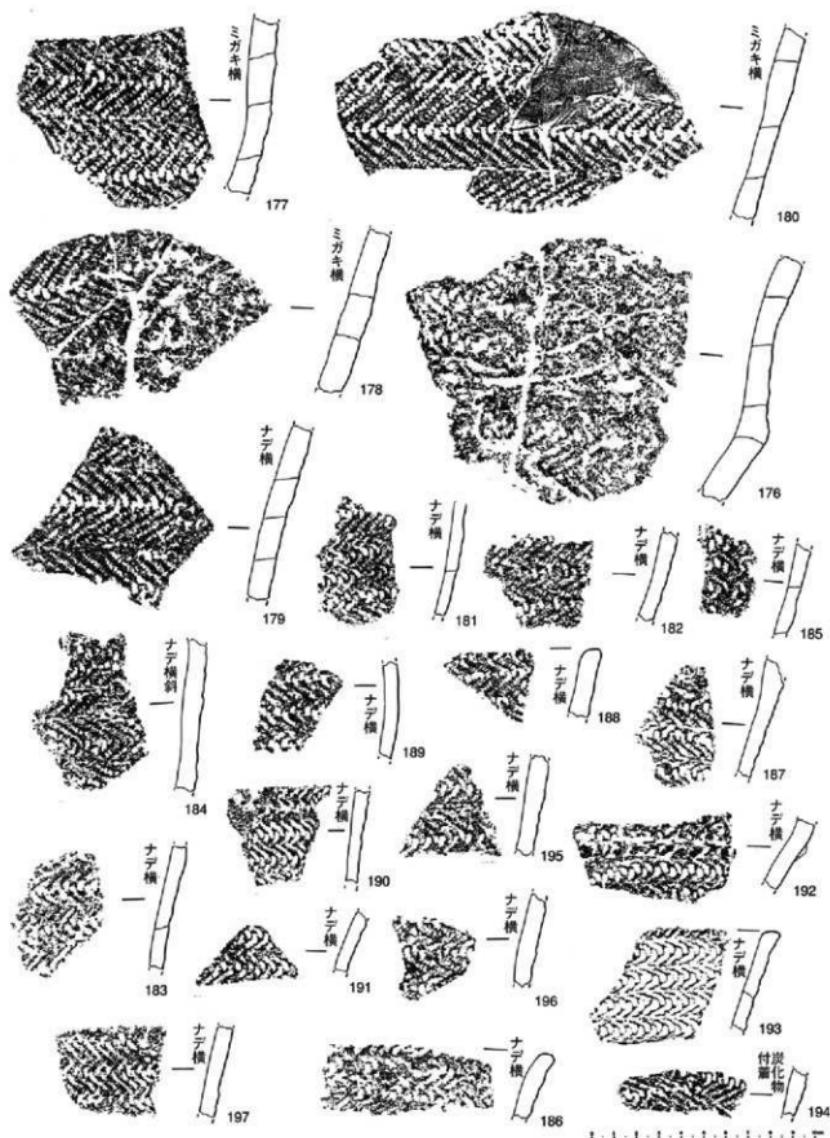
第39図 第3次調査出土土器拓影図(8)



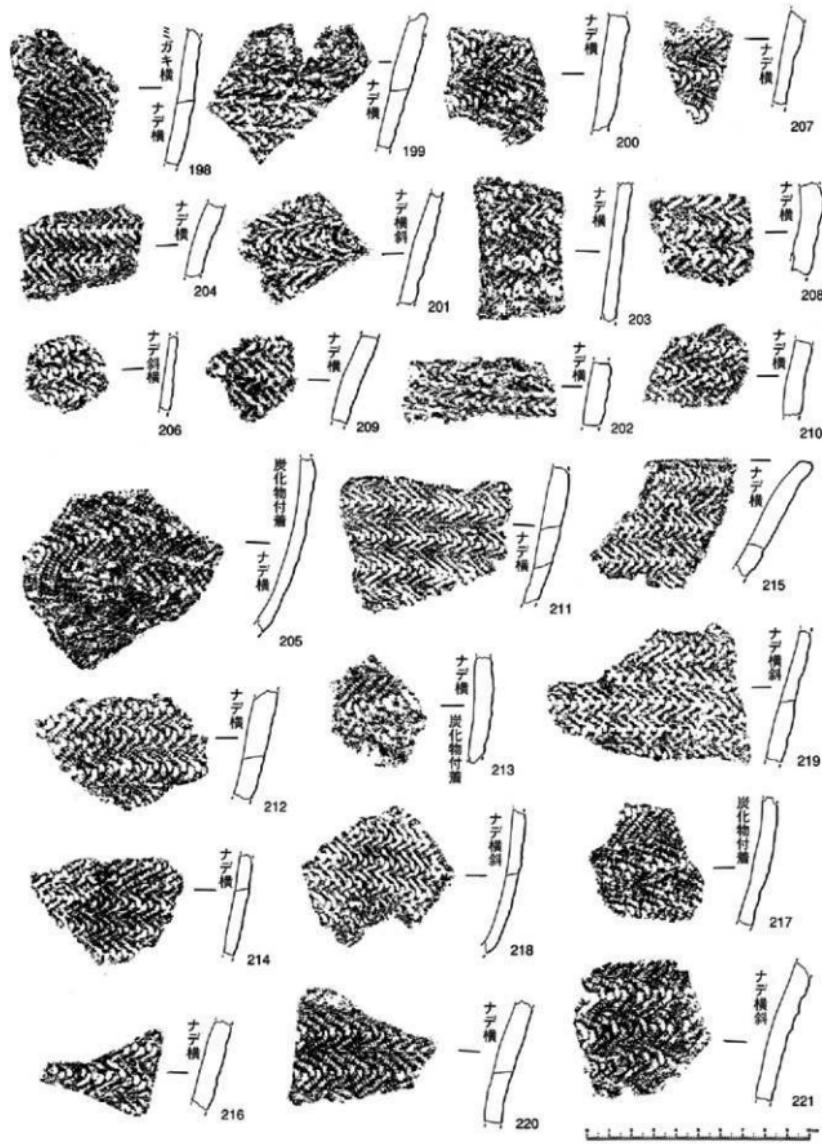
第40図 第3次調査出土土器拓影図(9)



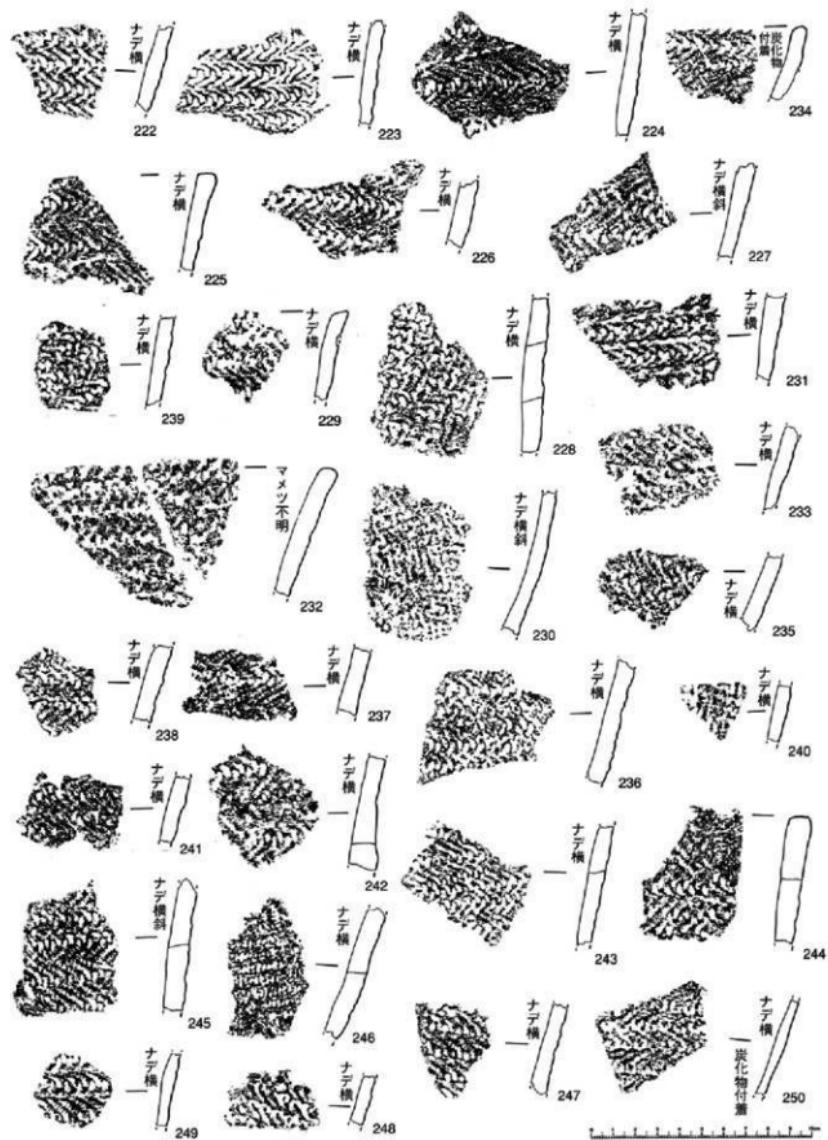
第41図 第3次調査出土土器拓影図(10)



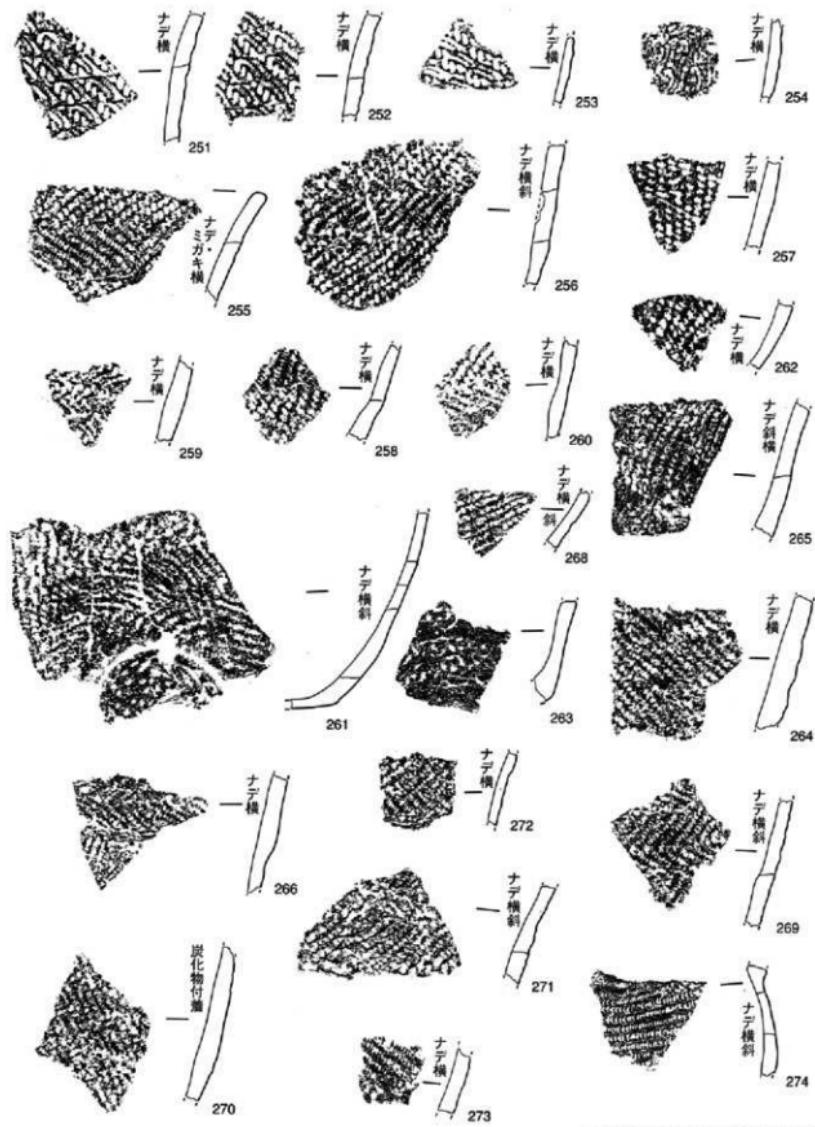
第42図 第3次調査出土土器拓影図(1)



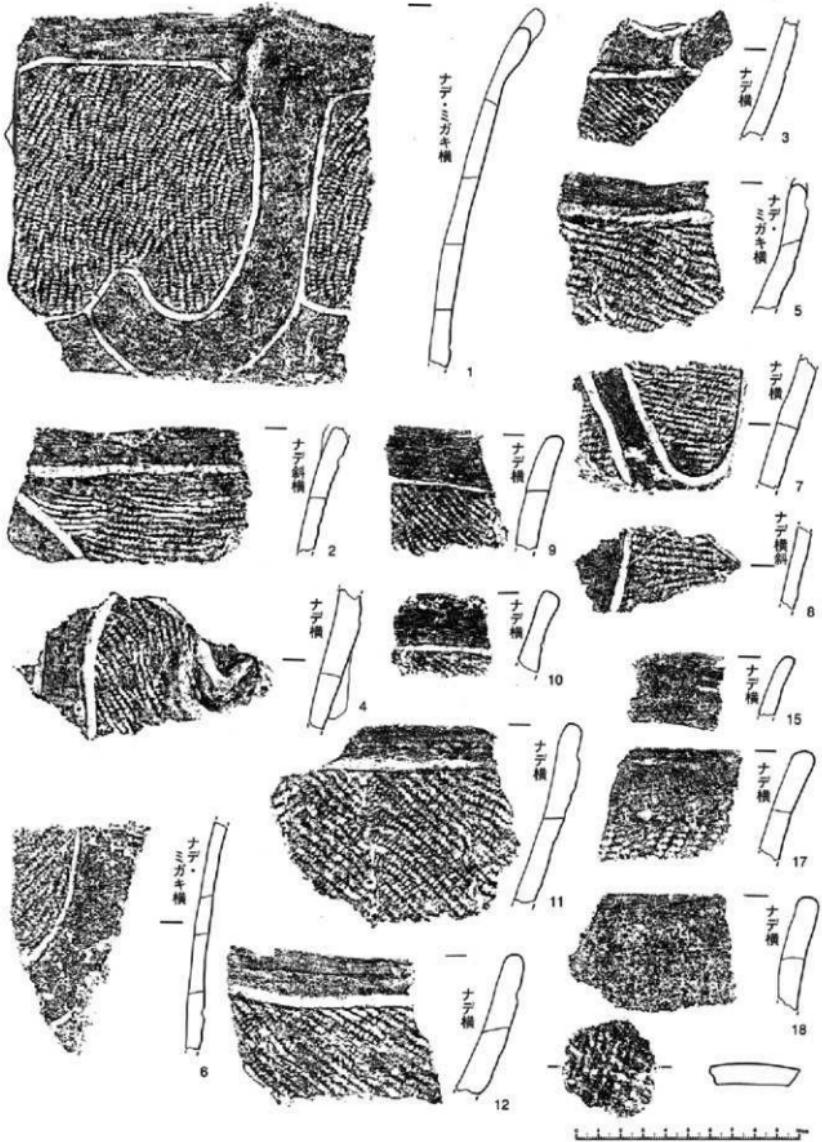
第43図 第3次調査出土土器拓影図 (12)



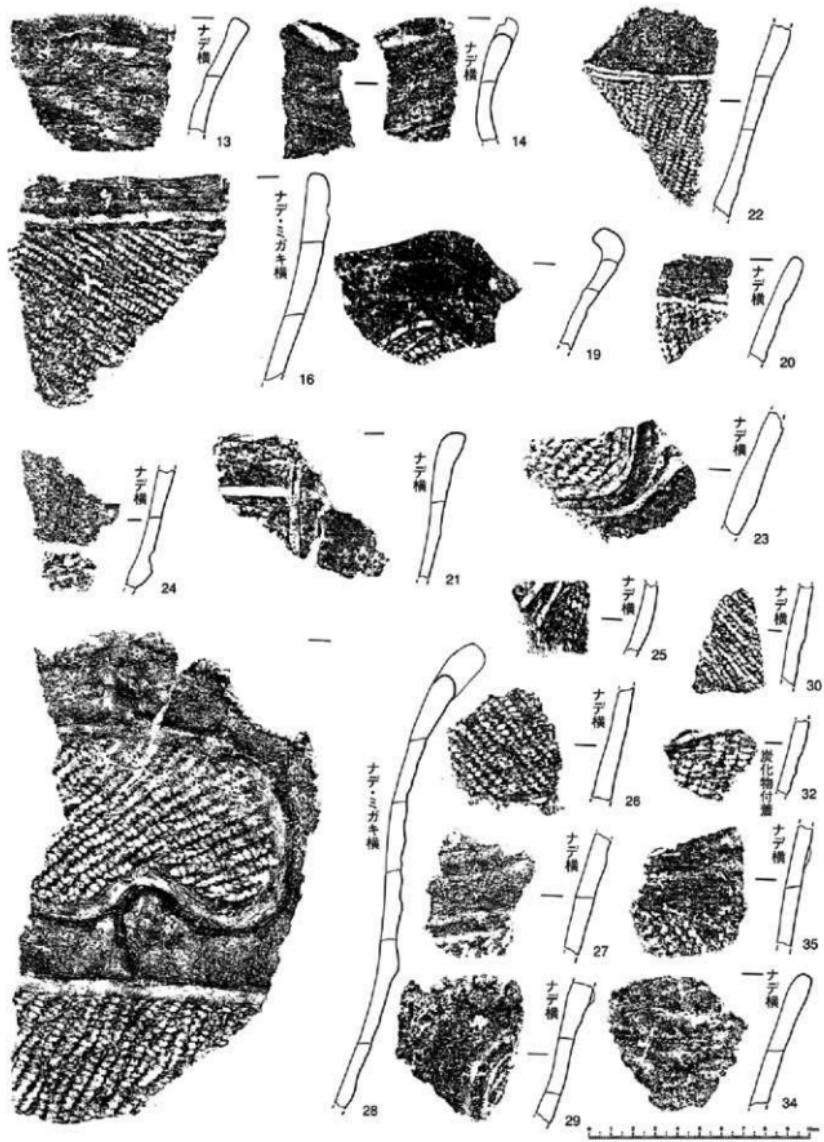
第44図 第3次調査出土土器拓影図(13)



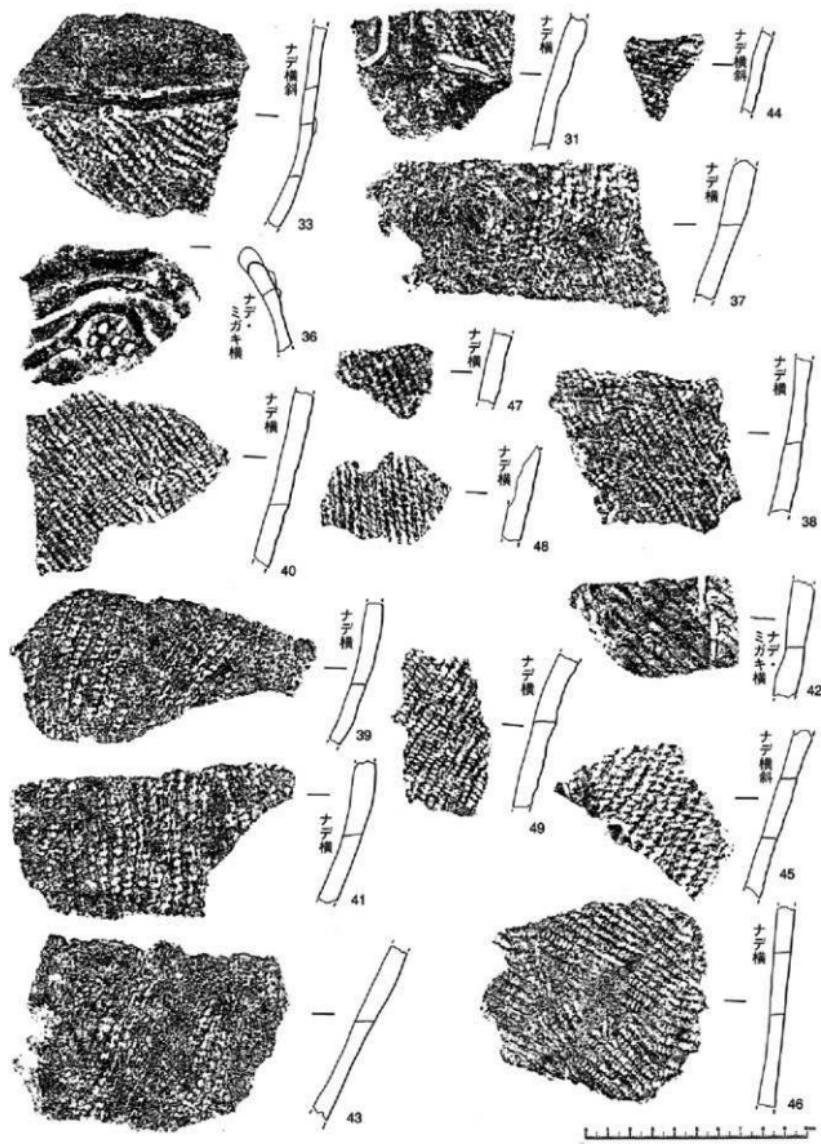
第45図 第3次調査出土土器拓影図(14)



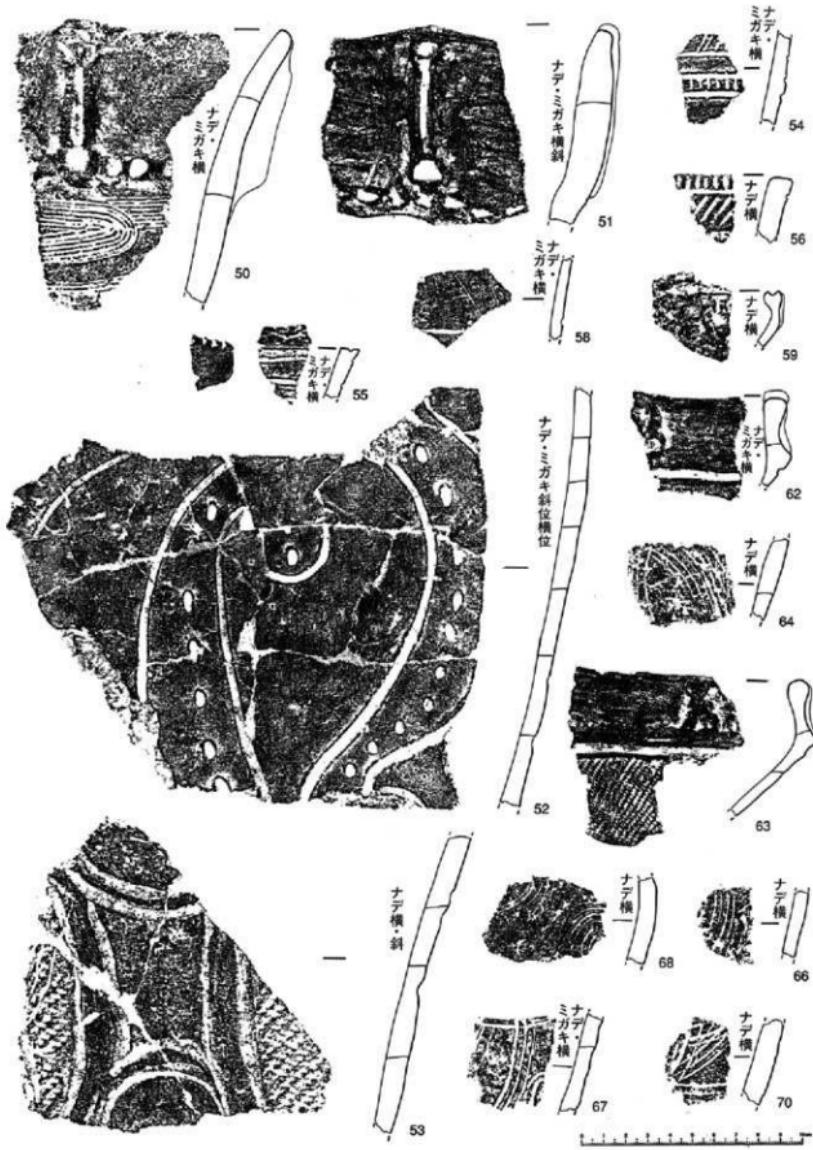
第46図 第3次調査出土土器拓影図(15)



第47図 第3次調査出土土器拓影図 (16)



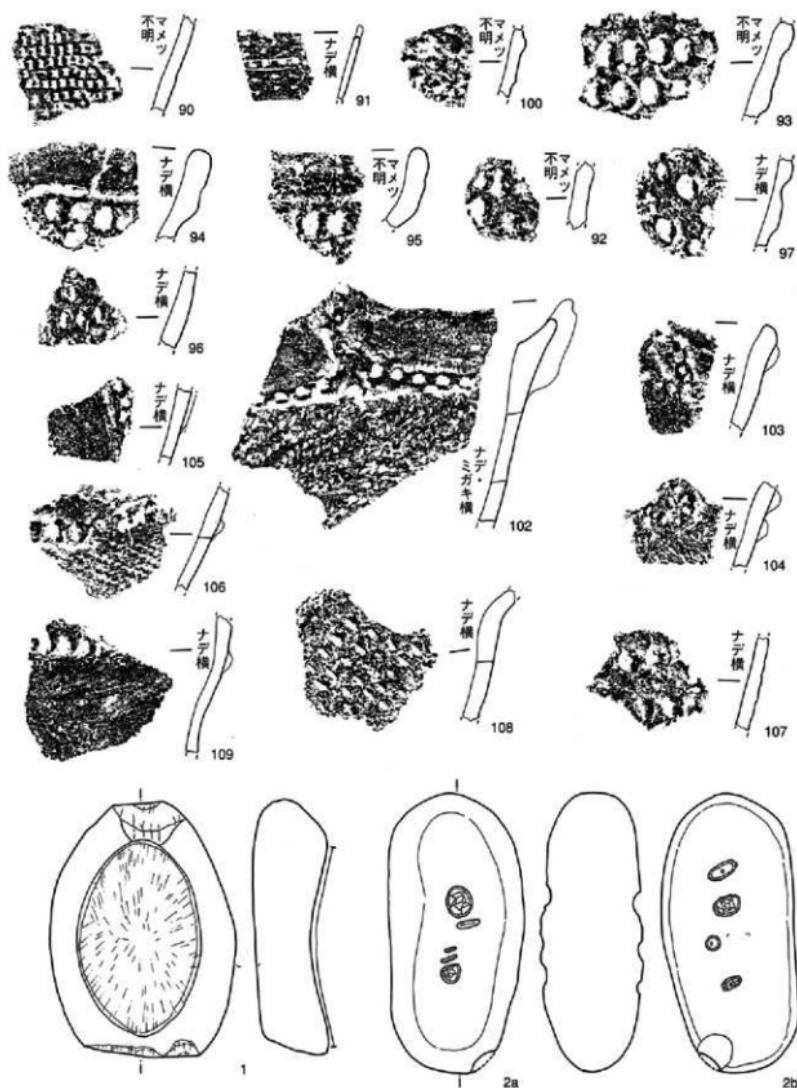
第48図 第3次調査出土土器拓影図 (7)



第49図 第3次調査出土土器拓影図 (18)



第50図 第3次調査出土土器拓影図(19)



第51図 第3次調査出土土器拓影図(20)

・出土石器

I群石器（石鎌）7点、II群石器（石匙）6点、III群石器（石箆状石器）14点、IV群石器（削器）3点、V群石器（尖頭状石器）6点、VI群石器（磨製石斧）3点が出土している。第58図に形態分類図を作成したので参照願いたい。礫石器（VII群石器）69点となる。これらについては第52～55、第57～60図に実測図、形態分類を作成したので参照願いたい。以下に分類した石器群について述べる。

I群石器は第52図1～7であり、完成品と製作断念品に細別される。1～3は押圧剥離を加えたものでありI群a類、4～7は製作を断念したI群b類に細別した。製作工程については米沢市埋蔵文化財報告書第53集「一ノ坂」遺跡本文編272頁・273頁・274頁に示すように素材となる剥片が2種類有る。第51図1のように一次剥離面を有する形態は薄形剥片を素材としている。2・3の形態は一次剥離面が認められず素材が当初から大形であったことを示す。

石鎌製作工程は薄形剥片を素材とした場合は第I段階から第Ⅴ段階、大形剥片を使用した場合は第I段階から第X段階の工程を得て製作されることが判明している。後者の大形剥片を素材とした石鎌製作工程を「一ノ坂技法」と呼ぶ。従って、4～6は第V段階、7は第VI段階のそれぞれ製作断念石器である。

II群石器は第52図8～13の6点が出土している。形態からII群a1類は8・9であり、尖状を有する。II群a2類は縁辺が丸味をなす形態である。II群C類は欠損面を示すもので11～13の3点認められる。Bは基部が欠損した形態であり、使用痕が観察されることから、完成品として使用している時に破損した石匙と推測される。11・12は完成に至らない製作途上での失敗品であろう。II群石器についても前述した報告書の275～281頁に示すように3通りの製作を確認している。11は両面調整の石匙でつまみ部を整形する段階までており、完成に近い第VII段階においての製作破損品と想定したい。

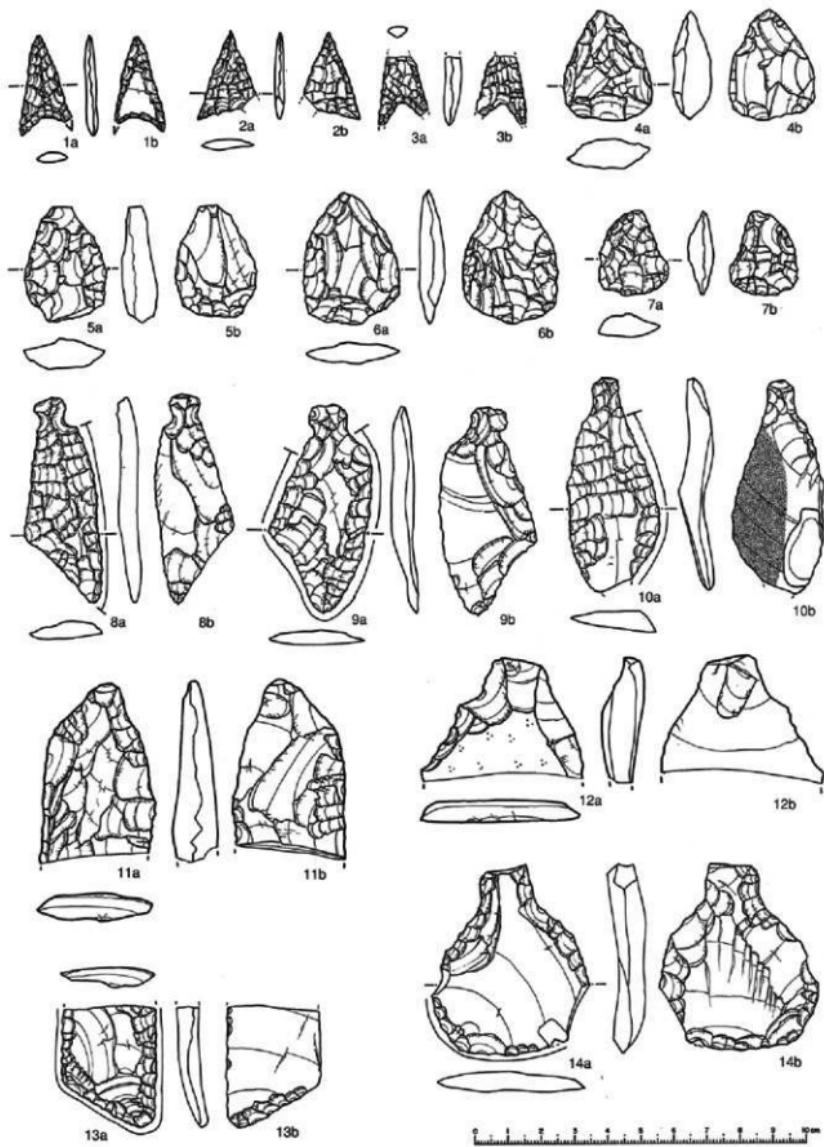
12は一ノ坂技法による片面調整の破損品で、つまみ部を整形しており、11と同様に第VII段階の石器と言える。

III群石器は第52図14、第53図15～22、第54図23・25・27が出土している。いづれも完成石器であり、使用痕が認められる。本群石器はa類～e2類の6形態に細別して説明したい。III群a類は鍔形を呈する形態であり、第52図14、第55図32の2点がある。このような形態を有する石箆状石器は縄文中期から出現するものであり、大木10式併行の小野川町塔之原遺跡、縄文後期初頭壙之内式併行の八幡原上竹井遺跡から多数の出土例がある。ゆえに、本遺跡で言えばN、O群土器に併行する石器形態と想定したい。

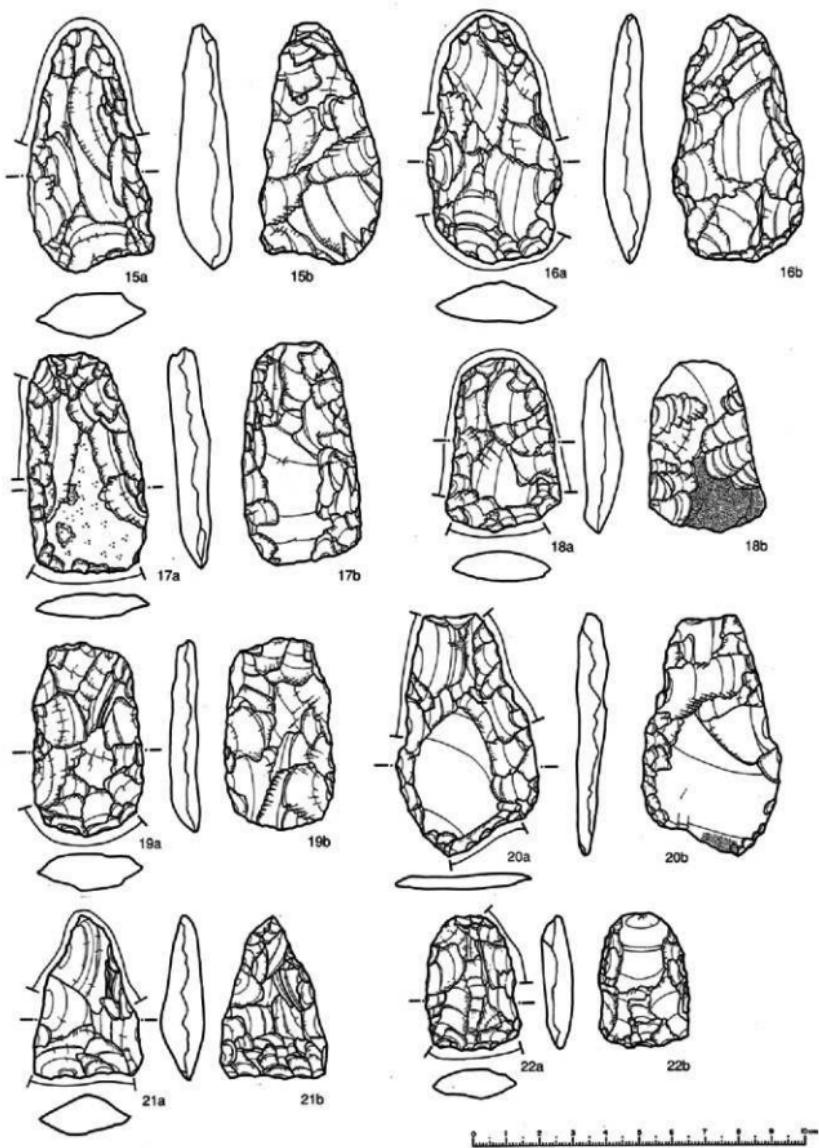
III群b類は基部が尖状を有する形態である。第53図15・16であり、両者とも柄着装痕が認められるが、15は刃部に使用痕が認められない。これは刃部再調整の失敗によるものと考えられ刃部が直角に近い形態を呈する。

III群C類としては第53図17・19・20が認められる。方形を呈する形態を本類とした。柄着装痕及び使用痕が観察される。20には磨滅痕が観察されスクリントンで示した。

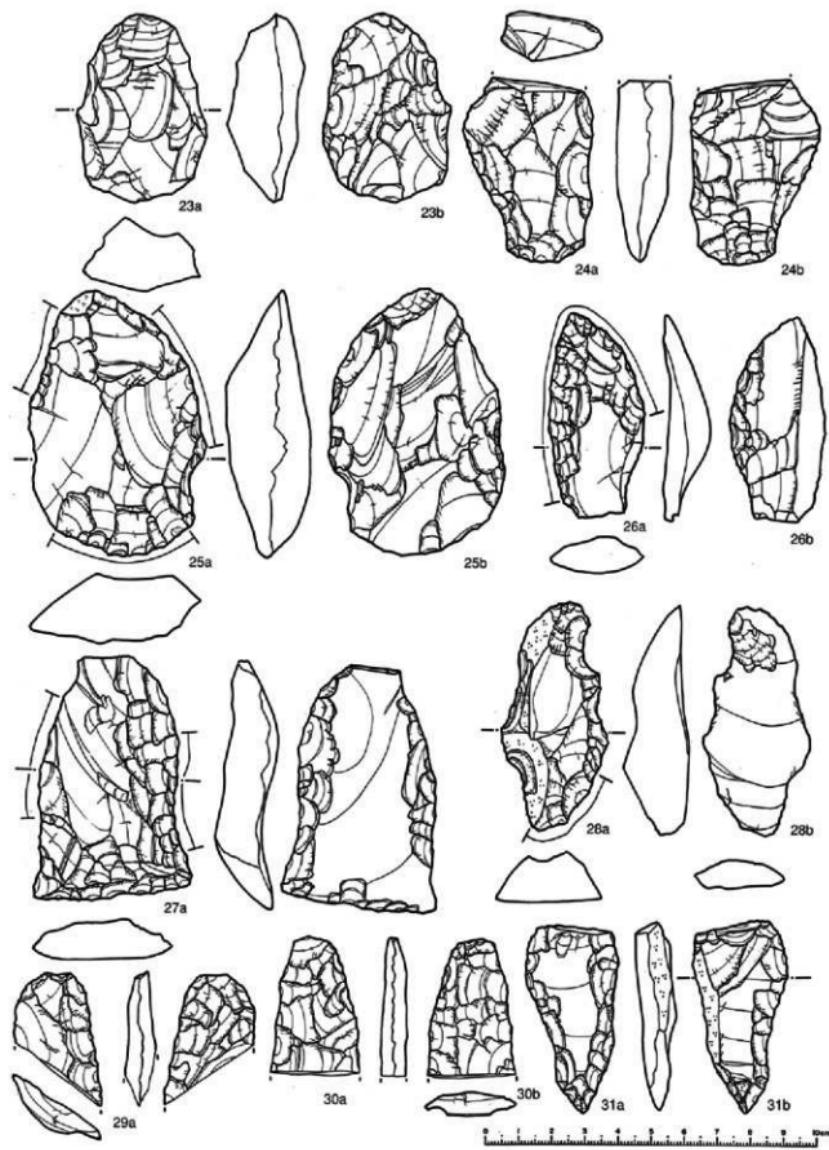
III群d類は第53図18・21・22がある。小形を有する形態を本類とした。形態の吟味から18



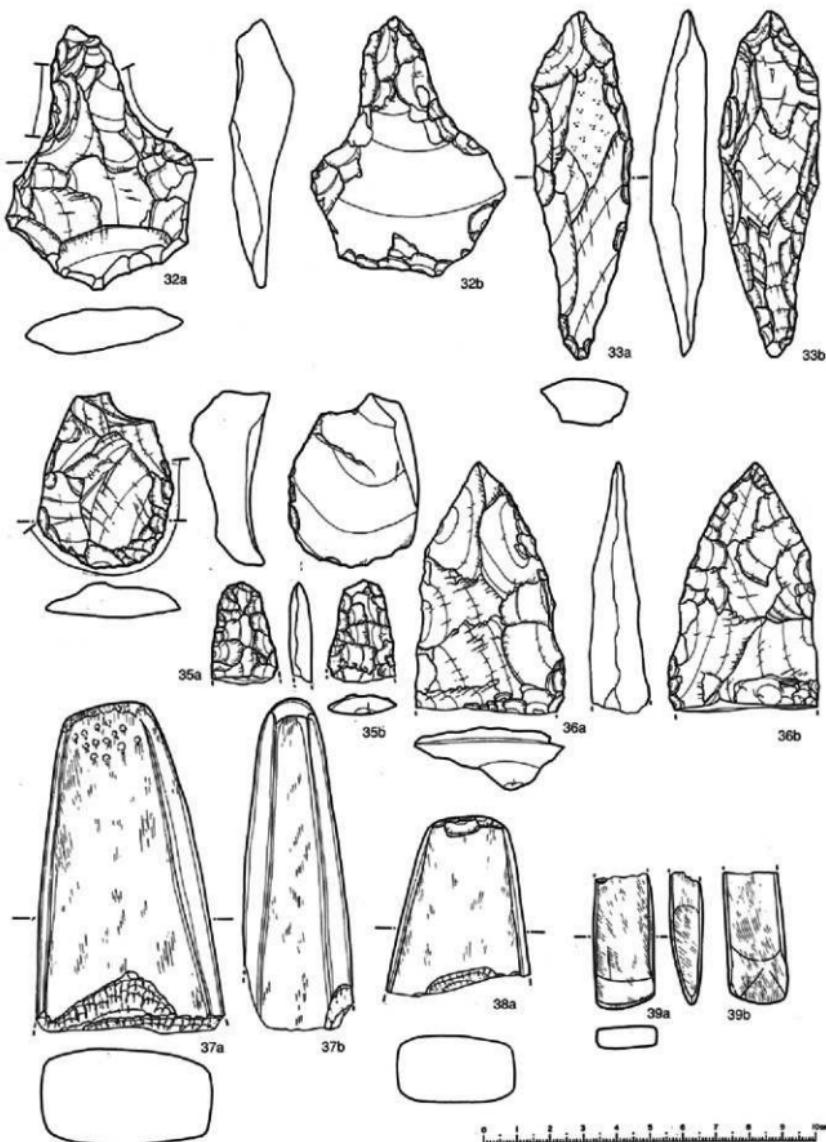
第52図 第3次調査出土石器実測図(1)



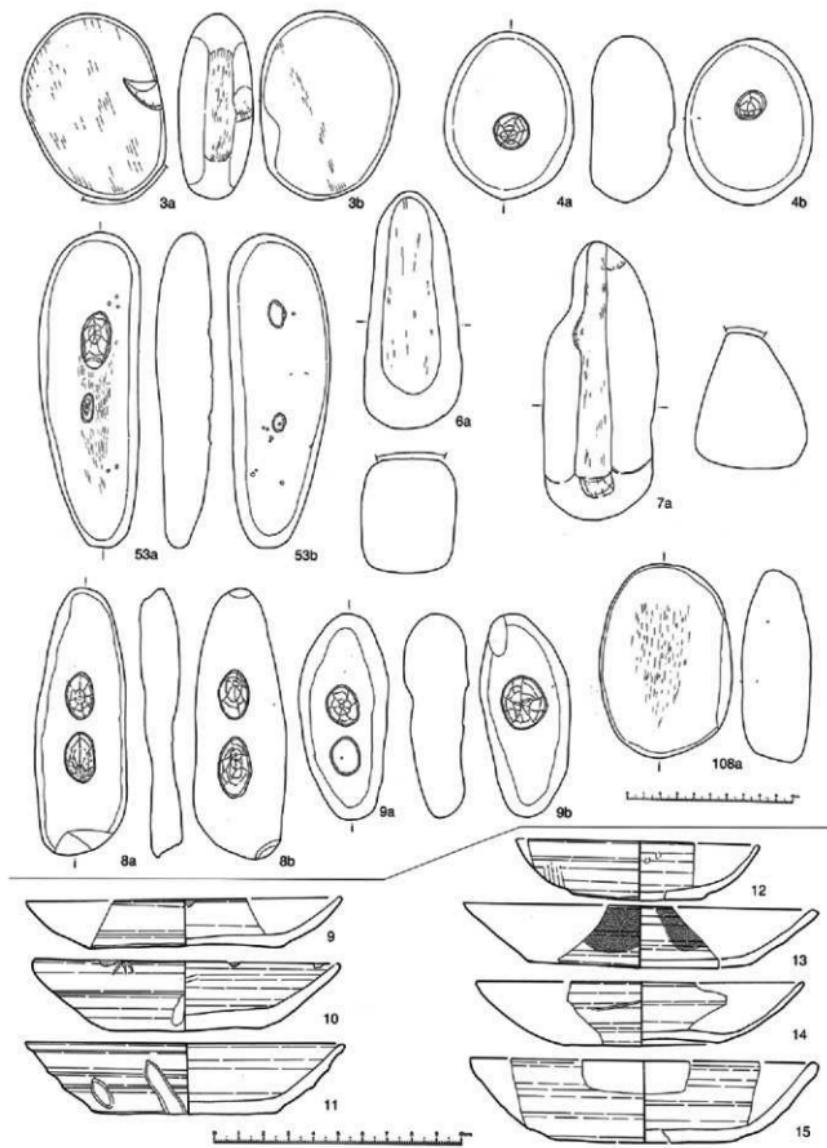
第53図 第3次調査出土石器実測図(2)



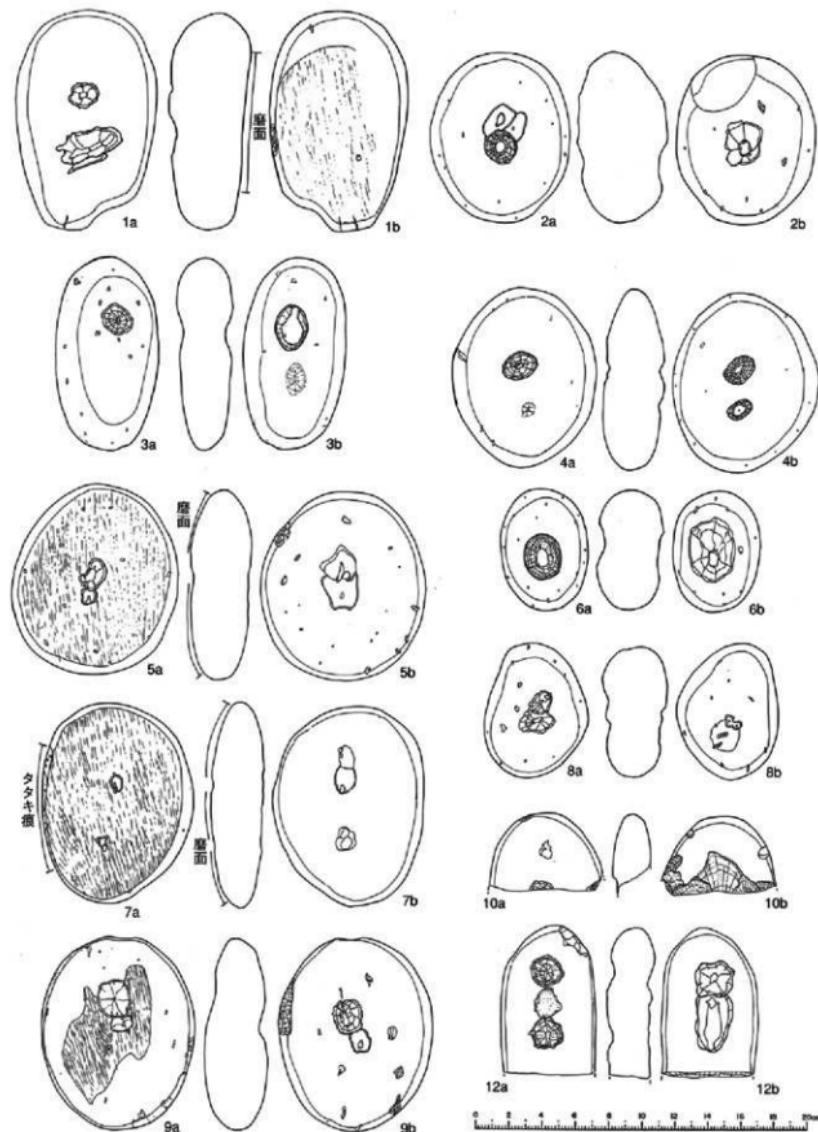
第54図 第3次調査出土石器実測図(3)



第55図 第3次調査出土石器実測図(4)



第56図 第3次調査出土器・カワラケ実測図(1)



第 57 図 第 3 次調査標石器実測図

は刃部再生によって小形化したものと考えられる。スクリントンに示したのが磨滅痕であり、長期間使用されたことを物語る。他の2点は製作当初から小形に整形したものである。

Ⅲ群e1類は両端が丸味を有する形態で、第54図23・24・25がある。23・24とも縁辺に使用痕が観察されなかった。25は柄着装痕及び使用痕が刃部に観察された。今回出土した打製石器の石材は、硬質頁岩で占められる。

Ⅲ群e2類は第54図27の石器で、柄着装痕は観察できるが刃部が用途に的さない状態になつたので廃棄されたものと推測される。このような形態を示す石器として、前述した第53図15、第55図32がある。使用による破損よりも、再調整剥離の失敗と考えたい。

IV群石器としては第54図26・28の削器IV群a類と第55図34の搔器IV群b類に細別した。26と28は尖状を有する形態で、使用痕が観察される。34にも使用痕が観察され、引いて使用する痕跡を呈する。

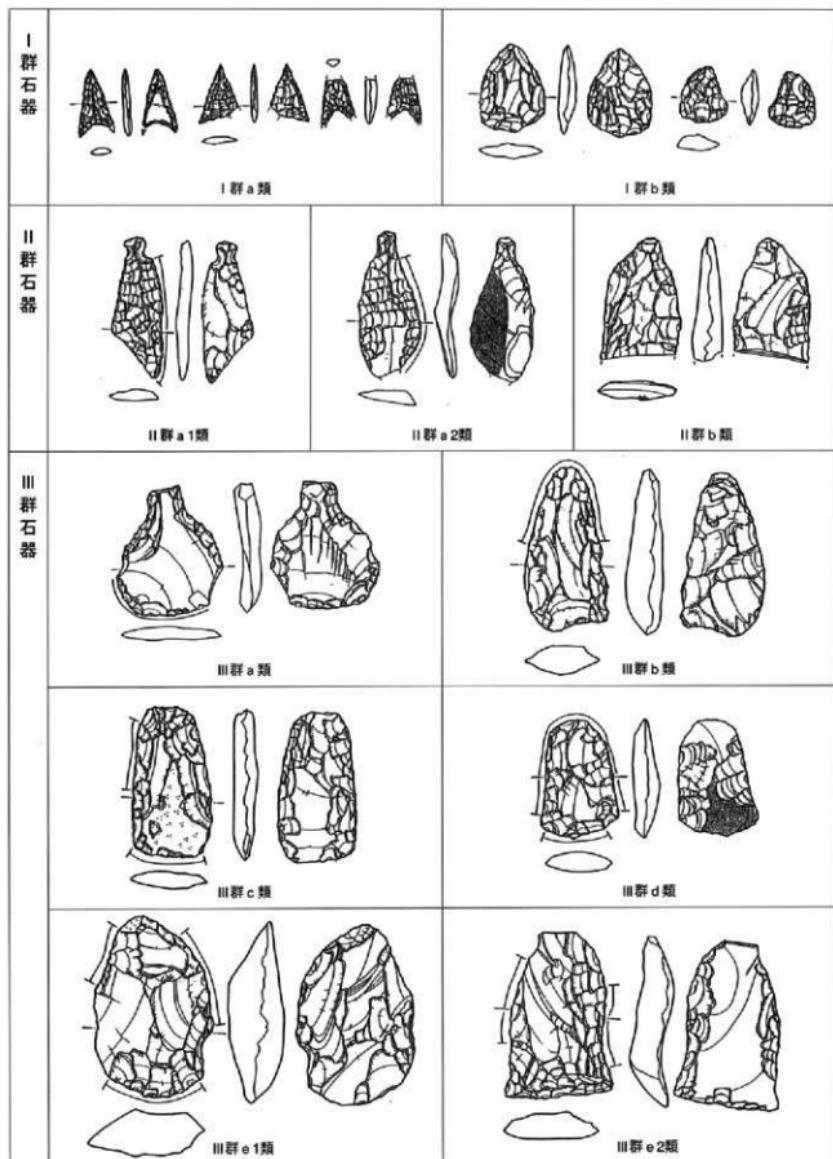
V群a類は欠損面をもたないグループで、第54図31、第55図33の2点がある。完成石器が石鋸と想定されるのが33で一ノ坂技法の第Ⅷ段階の形態を有する。31は石匙の第Ⅱ段階の形態であり調整開始後まもなく断念したものと考えられる。石鋸は縄文前期初頭の製作断念石器に類似することから本遺跡のD群II類土器に併行すると考える。

V群b類は第54図29・30、第55図35・36の4点がある。両面調整の石匙工程における破損面を有するものと考えられ29・30・35が相当する。押圧剥離を開始する第Ⅸ段階と想定する。36は両尖匕首の破損石器と考えられ、尖状部破片であり第Ⅶ段階の形態を有する。V群b類は一ノ坂技法の両尖状匕首の製作工程における形態に類似する。

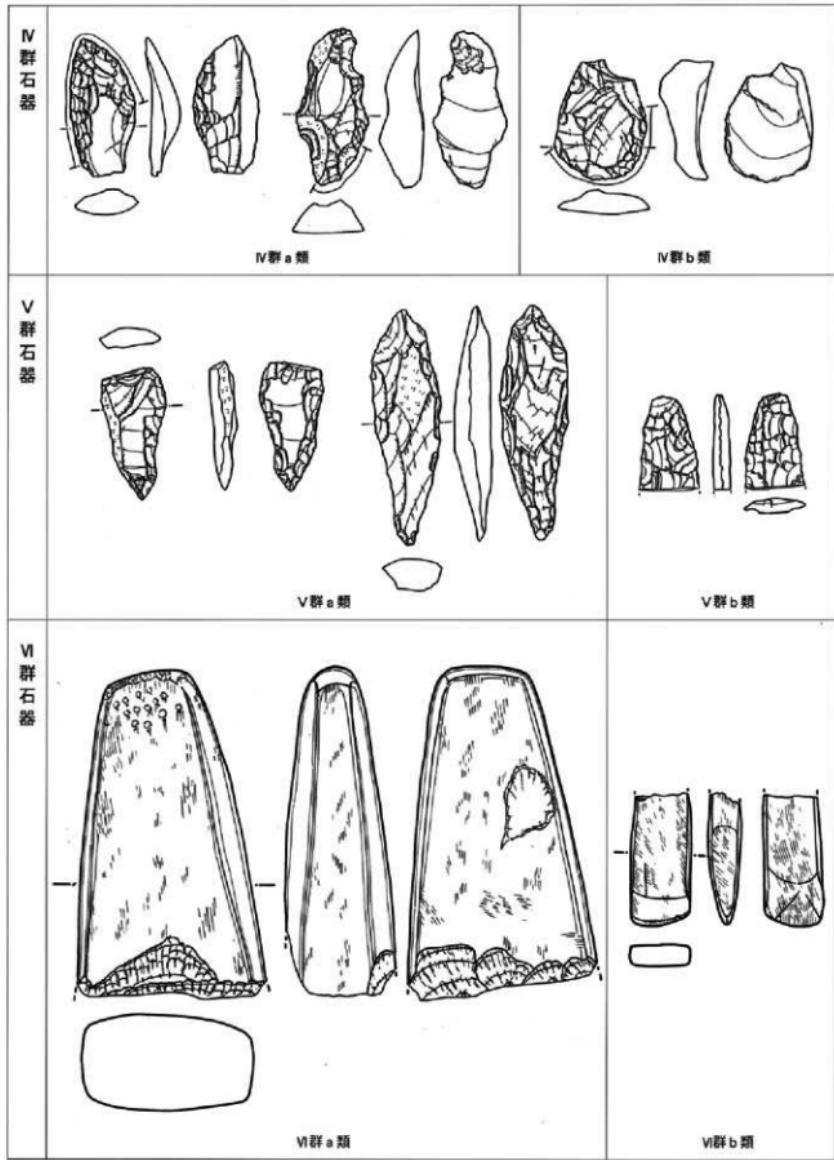
VI群石器は第55図37・38・39の3点出土し、大形状を呈するVI群a類37・38、小形の形状を有するVI群b類の39に細別される。37・38は刃部が欠損しており、形態は不明である。39は基部が欠損している。刃部に使用による磨滅痕及び線状痕が観察され、使用方向が理解される。石材は硬質の変成岩質の岩石を使用している。

VII群石器はVII群A類を凹石、VII群B類を磨石、VII群C類を石皿、VII群D類を石棒、VII群E類を石製品、VII群F類を砥石、VII群G類を焼石とした。VII群A類の形態が最も多く59点出土している。第60図に分類図を作成し、各形態を選出して図示した。石材としては石英粗面岩や泥岩のやわらかい石と緑色斑岩のようにかたい石の両者が認められるが割合からすれば前者の石材を多く用いている。凹石を形態を観察すると第57図3・6のように深く、広い凹部は回転によって生じた形態を呈する。一方、同図12のように連続する形態の凹部は凹面が平坦でない。これは、尖端部を有するもので連続して突くと生じる凹部と考えられる。このように2通りの使用が考えられる砾石器である。

VII群B類の磨石は2点だけであった。凹石の中にも磨面を有するものが多く認められ、磨面だけをもつのは少ない。VII群C類は3点出土しているが、すべて小破片であった。VII群D類も欠損しており、石棒の未完成品と考えられる。VII群E類としては刻線を有するもので、中央から半分に折れた状態であった。絵画的要素は認められなかった。VII群F類は1点ある。グリット出土であり、中世とも考えられる。VII群G類はDY36、63から各1点の出土があった。



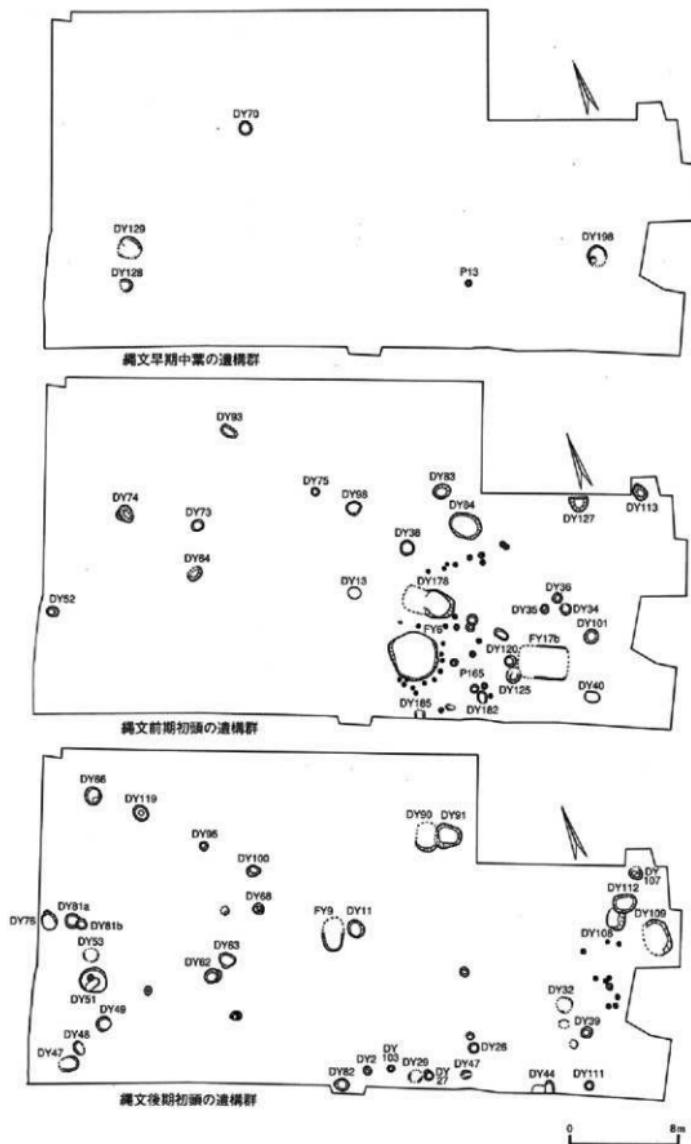
第 58 圖 第 3 次調查石器形態分類圖 (1)



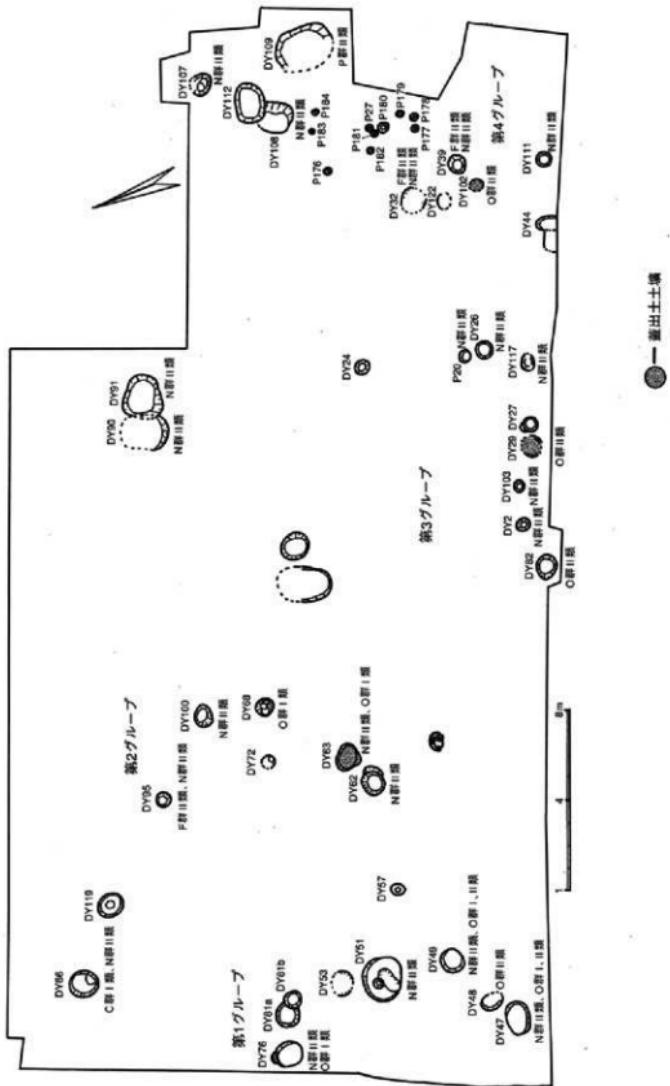
第59図 第3次調査石器形態分類図(2)

VII群a類		
VII群b類		
VII群c類		
VII群d類		
VII群e類		
VII群f類		

第60図 第3次調査VII群（櫛石器）分類図



第 61 図 第 3 次調査縄文時代遺構変容図



第62図 第3次調査区縄文後期遺構全体図

第1表 米沢市の縄文土器編年表

1998 手原

1万年前	大槻遺跡出土土器	米沢	間	東野	東北南部	東北北部	新潟県	
草創期	(+)			橋立I 花見山 西鹿田 西谷 大谷寺	日向I 一ノ沢I	大平山元I	小瀬ガ沢1 小瀬ガ沢2	
8,000				井草I 大丸井草II 夏鳥 穂荷台 穂荷原 平坂 三戸 善門寺	一ノ沢Ⅲ 尼子 竹之内I 竹之内II	日計	前 業	
早	大槻A群土器 大槻B群土器 大槻C群土器	+ + 桑山I + +	大槻山	田戸下層 田戸上層 子母口 野鳥 蘭ヶ島台 茅山下層 茅山上層 + + 打越I 神之木合 下吉井	大平 筑刈田 大寺 當世 明神葛 機木I 塗山II 上田名I	白浜 小船渡平 物見台 博田 小坂平	中 業	
6,000	大槻D群土器	桑山III 桑山IV 桑山V 横山I 横山II + + 慶賀清水B 板谷I			梨木畑 打越II 船入島下層	早稻田V 長七谷地	後 業	
前	大槻E群土器 大槻F群土器	塔ノ原I 八幡原B I・窪平I 大槻I・窪平II 窪平III 一ノ坂I・松原 横山I・板谷I 板谷II 笠原B 窪平I 塔ノ原II 塔ノ原III 八幡原A V 八幡原A VI・大槻V 八幡原A VII 合ノ上I		花積下層 関山I 関山II 黒浜 猪房 諸磯a 深島I 諸磯b 深島II 諸磯c 深島III 十三菩提 津	上田名II 桂鳥 桂鳥 大木1 大木2a 大木2b 大木3 大木4 大木5 大木6古 大木6新	尾鶴 表館 深瀬田 円筒下層a 円筒下層b 刈羽 内筒下層b 2 内筒下層c 5 内筒下層d 1 内筒下層d 2	布目	前
期	大槻G群土器 大槻H群土器					泉籠寺 鍋屋町1 鍋屋町2	中 業	
5,500								
中	大槻I群土器 大槻J群土器 大槻K群土器 大槻L群土器 大槻M群土器	台ノ上II 台ノ上II・成島I 台ノ上II・成島II 台ノ上II・成島III 台ノ上II・大槻W 台ノ上II・窪I 台ノ上II・窪II・大槻W 台ノ上II・窪III 窪I 窪I・大槻W 八幡原B I・花沢A I 八幡原B II・大清水 八幡原B III・花沢A II 大清水		五頭ケ台I 五頭ケ台II 下小野 清水台 阿玉台I a 阿玉台I b 勝坂I 阿玉台I 勝坂II 阿玉台II 加曾利E I 勝坂III 阿玉台W 加曾利E II 加曾利E III古 加曾利E III新 大木9 a 大木9 b 大木10 a 大木10 b 大木10 c +	棘塚 大木7 a 大木7 b 大木8 a 大木8 b 大木9 a 大木9 b 大木10 a 大木10 b 大木10 c	円筒上層a 円筒上層b 円筒上層c 円筒上層d 中の平II 櫻林II 中の平II 櫻林II 馬高1 櫻林I 馬高2 櫻林II 馬高3 櫻林II 馬高2 大平	+ 柄倉1 長者が原 馬高1 中の平II 櫻林I 馬高2 櫻林II 馬高3 柄倉2 大平	前 業
後	大槻O群土器 大槻P群土器 大槻Q群土器	大槻X 横山IV 竹井境A III・大槻XI 竹井境A IV 竹井境A V・大槻XII 左沢I + 左沢II・大槻X III 左沢III + 上ノ町 + +		称名寺 堀之内I 堀之内II 加曾利B I 加曾利B II 加曾利B III 金剛寺	網取II 南・堀 宝ヶ峰 西ノ浜	門前 大曲I 大漫 十腰内I 十腰内II 十腰内III 十腰内IV	+ 三十石糞業1 三十石糞業2 +	前 業
3,000		安行II 安行III a 安行III b. 鹿山 安行III c 前瀬I 安行III d 前瀬II 全代I 全代II					上山	前 業
晚		菅原院 清水北C 丹所I 丹所II 全代I 全代II			大糸B I・B II 大糸B C 大糸C 大糸C 大糸A 大糸A'	石倉1 石倉2 朝日1 朝日2 大糸A 大糸A' 砂沢	蒲原 中 後 業	
2,000								
				弥生時代				

\*山内清男・林謙作・小林達哉氏らによるものを参考に作成した。

(+)は該当する土器が見つかっていないもの。+は土器はあるが、編年に至らないもの。

## 5 まとめ

### ・遺構

第61図に縄文時代の遺構群を各時期別に示した。縄文早期では西方と東方地域に5基の土壙が検出され、付近に集落跡が存在した可能性がある。

縄文前期初頭になると、D Y 178, F Y 6, F Y 176の竪穴住居跡の推測される遺構群を中心に、多数のピット・土壙群が構築される。縄文前期初頭の遺跡としては、本遺跡の東方に位置する一ノ坂遺跡があり、土器の吟味から一ノ坂遺跡の前段階から同時期にあたる。

このことは、一ノ坂遺跡の工房を構築した集団の一部が本遺跡に生活していた可能性が高く、石匙の未完成品や石鋸等の形態からも、一ノ坂技法に類似することも注意したい。

縄文後期の遺構群としては土壙群がある。第62図には各土壙群から出土した土器を細類して示した。また蓋が出土箇所はスクリントンで示してある。今回の調査区は、住居跡は確認されなかったが、周辺に分布するものと考えている。

中世は、今回の調査では主要な遺構は確認されなかつたが、館山城との係りで相当規模の遺構が分布しているのは明らかである。

### ・遺物

縄文早期から後期の幅広い時期にわたって出土している。特に縄文後期初頭の土器は関東や新潟県の影響をもつ土器が検出され、さらにこれまでほとんど確認されなかつた中期から後期に移行する時期の土器が認められ、他の地域の文化交流や縄文中期から後期にかけての土器形式の変容を知る上で重要な資料といえる。(第4表参照)

石器としては第63図に示した一ノ坂技法による石器製作工程図を参照願いたい。この図の各段階に類似する形態の石器が認められたことが上げられる。前述したように一ノ坂遺跡の石器工房構築に関連した集団の一部と言える。

中世の遺物としては、数量的には少なく、カワラケ片を中心であった。

最後になりましたが大樽遺跡第2次・3次調査にあたり、格段のご協力を得ました関係機関に深く感謝申し上げます。

### 【参考文献】

- |               |                                      |
|---------------|--------------------------------------|
| 1979 山形県教育委員会 | 郡の神遺跡・周辺遺跡発掘調査報告書<br>山形県埋蔵文化財報告書第23集 |
| 1994 米沢市教育委員会 | 塔之原遺跡発掘調査報告書<br>米沢市埋蔵文化財報告書第43集      |
| 1996 米沢市教育委員会 | 一ノ坂遺跡発掘調査報告書<br>米沢市埋蔵文化財発掘調査報告書第53集  |

第Ⅰ段階	第Ⅱ段階	第Ⅲ段階	第Ⅳ段階	第Ⅴ段階	第Ⅵ段階	第Ⅶ段階	第Ⅷ段階	第Ⅸ段階	第Ⅹ段階
石 器 部 品 圖 示									

第63図 一ノ板技法による石器製作工程図

第2表 大樽遺跡第3次調査 遺構細類表

単位(cm)

遺構番号	細類	出土地区	埋土層位	長径×短径	深さ	出土土器細類	掲図参考	備考	年代
DY 198	C類	G 70-49	1 f	138×-	12		第7図	D Y 101に物混入か?	早期
DY 70	C類	G 57-54	3 f	106×97	20	C群	第9図	B II - 1点	早期
DY 128	C類	G 52-48	2 f	98×(94)	24		第10図	埋土で判断した	早期
DY 50	C類	G 52-50	2 f	115×(123)	25		第11図	埋土で判断した	早期
P 13	N類	G 65-48	2 f	47×39	15	C群	第9図	B II - 1点	早期
DY 13	A類	G 61-50	6 f	97×86	57	E群 F群	第6図	D II - 35点 C II - 2点	前期
DY 40	A類	G 70-47	3 f	107×83	35	E群 F群	第8図	C III - 1点 D II - 4点	前期
DY 78	B類	G 61-53	8 f	109×99	62	E群 F群	第6図	D II - 75点	前期
DY 101	B類	G 70-49	5 f	110×96	55	C群 F群	第7図	B I - 5点 B II - 1点 C II - 2点 D II - 1点	前期
DY 120	B類	G 67-48	2 f	87×82	17	C群 F群	第7図	B I - 1点 D II - 2点	前期
DY 83	B類	G 64-54	5 f	130×110	41	C群他	第8図	B I II - 各2点 C III - 2点 D II - 1点	前期
DY 52	B類	G 50-50	4 f	92×76	33	F群	第8図	D II - 9点	前期
DY 36	B類	G 69-50	3 f	76×69	36	F群	第18図	D II - 1点	前期
DY 35	C類	G 68-50	2 f	67×60	15		第9図	剥片1点埋土から判断した	前期
DY 127	D類	G 69-54	6 f	-×132	72	F群	第7図	D II - 2点	前期
DY 74	D類	G 53-53	6 f	137×86	80	F群	第8図	D II - 3点	前期
DY 93	D類	G 57-56	4 f	132×74	74	F群	第9図	D II - 3点	前期
DY 84	E類	G 66-53	5 f	239×175	58	F群	第9図	D II - 1点	前期
DY 21	E類	G 64-50	10 f	(220)×191	75		第17図	スクレーパー1点	前期
DY 114	F類	G 65-46	2 f	74×36	30	F群	第8図	D II - 1点	前期
DY 73	F類	G 56-53	3 f	95×81	16		第9図	第53図21	前期
DY 64 a	F類	G 55-51	2 f	120×(55)	27		第9図	第53図29	前期
P 14	L類	G 66-48	3 f	39×36	22		第9図	埋土から判断した	前期
P 19	M類	G 66-49	2 f	37×34	28		第9図	埋土から判断した	前期
DY 47	A類	G 51-47	8 f	140×110	54	N群 O群 M群	第10図	J II - 75点 K I - 2点 K II - 3点	後期
DY 49	A類	G 52-48	11 f	111×104	60	N群 O群	第10図	J II - 50点 K I - 2点 K II - 1点	後期
DY 102	A類	G 66-50	4 f	-×64	50	O群	第15図	第27図	後期
DY 82	A類	G 58-50	3 f	-×100	30	O群	第15図	第26図15	後期
DY 63	A類	G 57-50	8 f	121×97	49	N群 O群	第16図	第24図	後期
DY 76	A類	G 50-52	2 f	130×115	54	N群 O群	第16図	第25図	後期
DY 68	B類	G 58-52	5 f	80×73	49	O群	第8図	k I - 1点 C III - 5点	後期
DY 103	B類	G 63-47	4 f	56×45	40	N群	第13図	J II - 7点	後期
DY 111	B類	G 70-46	2 f	67×64	25	N群	第13図	J II - 3点	後期

遺構番号	細類	出土地区	埋土層位	長径×短径	深さ	出土土器細類	排図番号	備考	年代
D Y 117	B類	G 66 - 46	4 f	79 × 60	36	N群	第13図	J II - 9点	後期
D Y 2	B類	G 62 - 46	3 f	117 × 68	28	N群	第13図	J II - 1点	後期
D Y 100	B類	G 58 - 54	2 f	99 × 80	34	N群	第13図	J II - 2点	後期
D Y 26	B類	G 66 - 47	5 f	81 × 76	52	N群	第13図	J II - 17点	後期
D Y 95	B類	G 56 - 54	3 f	67 × 58	41	F群 N群	第13図	D II - 10点 J II - 2点	後期
D Y 62	B類	G 56 - 50	8 f	126 × 103	59	N群	第16図	J II - 2点	後期
D Y 66	B類	G 52 - 57	3 f	128 × 122	43	C群 N群	第18図	B I - 1点 J II - 1点	後期
D Y 108	B類	G 71 - 52	4 f	135 × 119	58	N群	第18図	J II - 6点	後期
D Y 107	B類	G 72 - 54	6 f	- × 88	55	N群	第21図	J II - 8点	後期
D Y 39	C類	G 70 - 48	2 f	107 × 70	32	F群 N群	第11図	D II - 5点 J II - 10点	後期
D Y 51	C類	G 52 - 50	2 f	205 × 168	14	E群	第11図	C II - 1点	後期
D Y 72	C類	G 57 - 52	3 f	- × 62	12			埋土から判断した	後期
D Y 29	C類	G 64 - 46	2 f	100 × -	22	O群	第15図	第26図13	後期
D Y 48	C類	G 51 - 47	2 f	104 × 70	17	O群	第16図	第50図102	後期
D Y 32	C類	G 69 - 49	3 f	133 × -	28	F群 O群	第17図	D群土器混入	後期
D Y 90	C類	G 64 - 55	4 f	- × 165	66	N群	第22図	J II - 2点	後期
D Y 109	E類	G 73 - 51	8 f	298 × (173)	55	P群	第11図	L II - 10点	後期
D Y 112	E類	G 71 - 53	5 f	171 × 126	75	F群 O群	第18図	D II - 11点 K I - 9点	後期
D Y 91	H類	G 64 - 55	3 f	- × 160	12	N群	第22図	J II - 1点	後期
P 20 a	L類	G 66 - 48	4 f	62 × 52	54	N群	第13図	J II - 3点	後期
D Y 42	B類	G 72 - 47	2 f	- × 122	55	E, F, N, O群	第14図	陶磁器2点	中世
D Y 97	B類	G 52 - 53	3 f	112 × 100	34		第21図		中世
D Y 67	C類	G 52 - 55	4 f	117 × 100	25		第20図	埋土から判断	中世
D Y 98	C類	G 52 - 54	2 f	94 × 77	27		第22図		中世
P 17	C類	G 53 - 47	3 f	48 × -	47		第23図		中世
D Y 212	C類	G 58 - 50	2 f	- × 70	31		第23図		中世
D Y 77	D類	G 54 - 50	4 f	70 × 45	51		第22図		中世
D Y 59	D類	G 54 - 50	4 f	- × 155	31		第22図		中世
D Y 43	E類	G 71 - 47	6 f	307 × 67	61	F群	第14図	D群土器は混入	中世
D Y 173	E類	G 64 - 55	6 f	260 × 150	60		第22図	底面に河原石	中世
D Y 85	E類	G 61 - 47	4 f	257 × -	61		第23図		中世
D Y 121	F類	G 53 - 55	2 f	142 × 107	27		第20図	埋土から判断	中世
D Y 69	F類	G 57 - 53	2 f	175 × 100	23		第20図	埋土から判断	中世
D Y 60	F類	G 55 - 57	4 f	121 × 90	26		第22図		中世

遺構番号	細類	出土地区	埋土層位	長径×短径	深さ	出土土器細類	挿図参考	備考	年代
D Y 86	F類	G 63 - 54	3 f	119 × 94	17		第23図		中世
D Y 55	F類	G 54 - 47	3 f	140 × 82	31		第23図	陶磁器	中世
D Y 92	F類	G 65 - 56	3 f	127 × 91	22		第23図		中世
D Y 61	G類	G 55 - 49	1 f	107 × 67	16		第21図		中世
D Y 65	H類	G 55 - 54	3 f	233 × 158	27		第20図	埋土から判断	中世
P 18	K類	G 60 - 55	1 f	77 × 55	20		第21図		中世
P 47	K類	G 51 - 56	1 f	56 × 55	20		第21図		中世
P 48	K類	G 51 - 56	1 f	55 × 50	20		第21図		中世
P 12	K類	G 50 - 55	2 f	59 × 48	33		第21図		中世
P 5	K類	G 53 - 48	1 f	47 × 41	36		第21図		中世
P 3	L類	G 53 - 50	6 f	55 × 53	48		第11図	埋土で判断した	中世
D Y 57	L類	G 54 - 49	3 f	63 × 56	48		第23図		中世
D Y 56	L類	G 54 - 47	3 f	53 × 49	33		第23図		中世
D Y 23	L類	G 64 - 46	4 f	47 × 39	71		第21図		中世
P 8	M類	G 57 - 51	2 f	58 × 47	31		第21図		中世
D Y 87	M類	G 64 - 54	3 f	64 × 60	32		第23図		中世
K Y 1	掘跡	G 62 - 58	4	幅110	30		第19図	陶磁器1点	中世
K Y 19	掘跡	G 54 - 66	4	幅130	60		第19図	カワラケ1点	中世
D Y 11	B類	G 62 - 51	5 f	140 × 110	64		第17図	埋土から判断した	近世
D Y 156	B類	G 62 - 50	-	240 × -	90		第18図		近世
F Y 7	B類	G 62 - 49	8 f	177 × 170	79		第23図	陶磁器	近世
F Y 5	E類	G 62 - 50	9 f	-	106	N群 F群	第18図	D II - 5点 J II - 23点	近世
F Y 6	E類	G 62 - 50	10 f	374 × 358	106	C, F, N, O群	第12図	B I - 4点 D II - 4点 J II - 4点 K I - 2点	近世
D Y 202	E類	G 70 - 52	2	280 × 220	30		第20図		近世
D Y 16	E類	G 62 - 48	10 f	232 × 149	91		第21図	陶磁器	近世
D Y 94	F類	G 57 - 56	-	124 × -	18	陶磁器	第9図	近世陶磁器	近世
D Y 157	I類	G 62 - 50	-	160 × 140	60		第18図		近世
D Y 201	I類	G 70 - 52	1	400 × 200	30		第20図		近世
D Y 177	I類	G 62 - 50	6 f	260 × 120	72		第17図		近世
P 99	L類	G 57 - 52	3 f	48 × 46	31		第13図	埋土から判断した	近世
F Y 17	I類	G 50 - 66	-	260 × 170	75		挿図	ゴミステ穴	現代
F Y 3	I類	G 58 - 50	-	500 × 280	100		挿図	石ステ穴	現代
D Y 53	B類	G 52 - 50	5 f	- × 108	31		第13図	剥片2点	不明
D Y 171	B類	G 61 - 52	-	192 × 188	28		第13図		不明

遺構番号	細類	出土地区	地層位	長径×短径	深さ	出土土器細類表	挿図参考	備考	年代
D Y 10	C類	G 62 - 51	1 f	134 × -	11		第 17 図		不明
D Y 113	F類	G 72 - 54	4 f	119 × 87	53		第 21 図		不明
F Y 126	J類	G 59 - 49	4 f	295 × 163	80	F群	第 20 図	D II - 5 点 風削木塙	不明
P 154	K類	G 66 - 48	-	30 × -	21		-		不明
K Y 20 b	溝	G 50 - 62	4	幅 50	40		第 19 図		不明

第 3 表 磚石器形態分類表

通し番号	挿図番号	出 土 地 区	形態細類	備 考	通し番号	挿図番号	出 土 地 区	形態細類	備 考
1		D Y 21	VII A - a	磨面片面	34		F Y 9	VII A - e	欠損面有り
2		D Y 104	VII A - a		35	57 - 12	K Y 1 - 3 区	VII A - f	折れ面有り
3		表抜	VII A - a	緑色	36		表抜	VII A - f	欠損面有り
4		K Y 19	VII A - a	欠損	37		G 54 - 58	VII A - f	欠損泥岩
5		K Y 19	VII A - a	磨面片面	38		G 70 - 50	VII A - f	欠損泥岩
6		K Y 1 - 2 区	VII A - a		39		F Y 6	VII A - f	側面凹有り
7		K Y 1 - 2 区	VII A - a		40		D Y 120	VII A - f	欠損
8		G 50 - 50	VII A - a	緑色斑岩	41		F Y 3	VII A - f	
9		D Y 13	VII A - a	大形	42		F Y 3	VII A - f	欠損
10		F Y 3	VII A - a		43		F Y 3	VII A - f	
11		D Y 41	VII A - a	凹部浅い	44		F Y 3	VII A - f	
12	57 - 3	F Y 6	VII A - b		45		D Y 109	VII A - f	縁辺叩き痕有り
13	57 - 9	F Y 8	VII A - b	磨面片面	46		F Y 5	VII A - f	欠損面有り
14	57 - 2	D Y 9	VII A - b		47		P 13	VII B	磨石
15	57 - 6	G 66 - 58	VII A - b		48		F Y 3	VII C	
16		D Y 27	VII A - b	焼成 欠損	49		F Y 3	VII C	破片
17		F Y 17	VII A - b	磨面片面	50		F Y 3	VII C	破片
18		K Y 1	VII A - b		51		K Y 1	VII C	破片
19	57 - 4	G 66 - 58	VII A - c		52		D Y 114	VII C	
20	57 - 5	D Y 82	VII A - c	磨面片面	53		D Y 112	VII C	
21	57 - 8	D Y 100	VII A - c	緑色斑岩	54		F Y 5	VII D	欠損
22		F Y 5	VII A - c		55		K Y 1 - 2 区	VII E	刻線を有す(欠損)
23		F Y 6	VII A - c	縁	56		F Y 6	VII E	凹を有す
24		D Y 52	VII A - d		57		D Y 63	VII E	焼石(欠損)
25		G 70 - 50	VII A - d	片面穴浅い	58		D Y 109	VII E	加工した凝角岩
26		F Y 17	VII A - d	磨面片面	59		F Y 22	VII E	円形に加工した凝角岩
27		K Y 1 - 1 区	VII A - d	欠損	60		表抜	VII E	砥石
28		D Y 2	VII A - d		61		D Y 36	VII G	焼石(欠損)
29		F Y 6	VII A - d		62		P 34	VII G	焼石(欠損)
30		K Y 1	VII A - d		63		G 70 - 54		欠損で不明
31		F Y 115	VII A - d		64		G 50 - 58		縁辺磨石
32		D Y 78	VII A - d	欠損面有り	65		F Y 115		磨石
33		D Y 101	VII A - e	磨面片面	66		D Y 63		縁辺砥石磨石
					67		F Y 6	コア	頁岩

第4表 大樽遺跡出土土器分類表

時 期	大樽遺跡出土の土器				大樽遺跡 出土土器 形態分類	第III次調査	第IV次調査	第V次調査	第VI次調査	第VII次調査	第VIII次調査
	A群土器	B群土器	C群土器	D群土器							
縄文 早期					A群土器			○			
					B群土器	○	○	○	○	○	○
					C群土器	○		○	○		○
					D群土器		○				
縄文 前期					E群土器	○	○	○	○	○	○
					F群土器	○	○	○			
					G群土器	○		○		○	
					H群土器	○	○				
縄文 中期					I群土器	○	○			○	
					J群土器	○			○		
					K群土器	○			○	○	
					L群土器						
縄文 後期					M群土器	○	○				
					N群土器	○	○	○	○	○	○
					O群土器	○	○	○	○	○	○
					P群土器	○	○	○	○	○	
					Q群土器	○	○		○		

# 報告書抄録

ふりがな	おおたるいせき
書名	大樽遺跡
副書名	大樽遺跡第2次・第3次発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	米沢市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第62集
編著者名	菊地政信
編集機関	米沢市教育委員会
所在地	〒992-0012 山形県米沢市金池三丁目1番55号 TEL0238-22-5111
発行年月日	西暦1999年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおたる 大樽	やまがたけんよねざわし 山形県米沢市 たてやま 館山四丁目	6202	米沢市	37度	140度	19970501～	134.9	宅地造成に 伴う発掘調 査
	6477-1号 6477-5号		遺跡番号 G-150	54分 57秒	4分 35秒	19970507		
	たてやま 館山五丁目			37度	140度	19970506～	1,152	
	6519-1号			54分 56秒	4分 35秒	19970704		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大樽	土壙群	縄文時代	土壙群 墓壙群	縄文土器	縄文時代後期初頭の土器群は大木10C式併行から移行する段階の土器群であり、縄文中期末葉から後期初頭の土器編年の標準的遺跡と言える。

# 写 真 図 版

図版1 (第2次調査)



▲調査区全景（北西から）



▲KY1 挖り下げ状況（北西から）

図版2（第3次調査）



▲第3次調査区遺構全景（空中写真）

図版3 (第3次調査)



▲発掘調査風景（東方から）



▲発掘調査風景（西南から）

図版4 (第3次調査)



▲発掘調査風景（東方から）



▲発掘調査風景（北方から）

図版5 (第3次調査)



▲発掘調査風景（西南から）



▲発掘調査風景・FY6（南方から）

図版 6 (第3次調査)



▲DY 78 遺物出土状況（東南から）



▲DY 78 遺物出土状況近景（東方から）

図版 7 (第 3 次調査)



▲DY13 セクション状況（東南から）

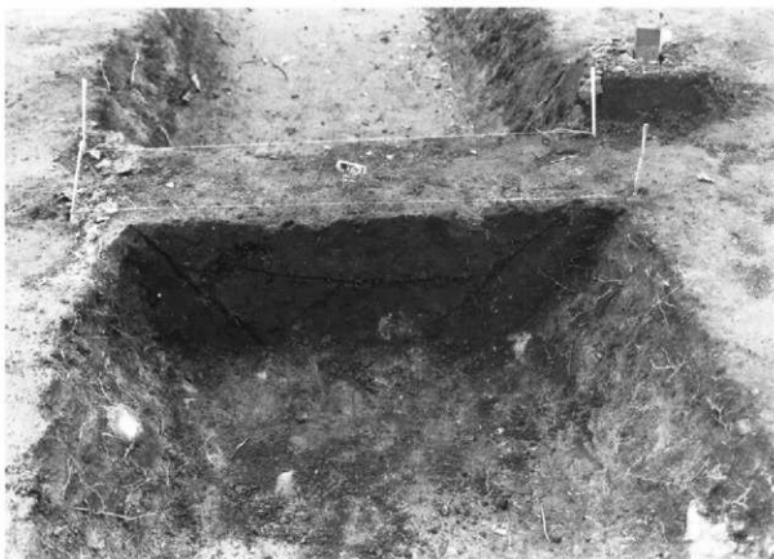


▲DY13 遺物出土状況（東南から）

図版8 (第3次調査)



▲KY1 完掘状況（南方から）



▲KY1 セクション状況（南方から）

図版9 (第3次調査)



▲FY16 セクション状況（西方から）

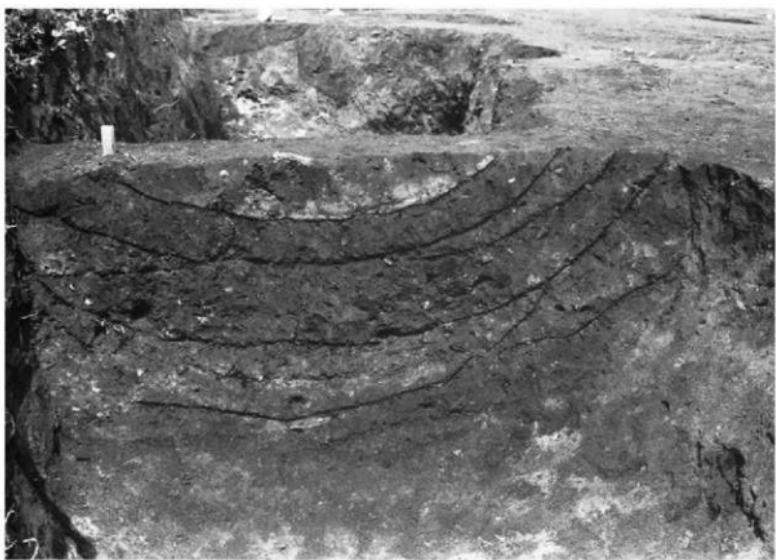


▲FY16 底面出土六文銭（西方から）

図版 10 (第 3 次調査)



▲FY5-3区セクション状況（北方から）

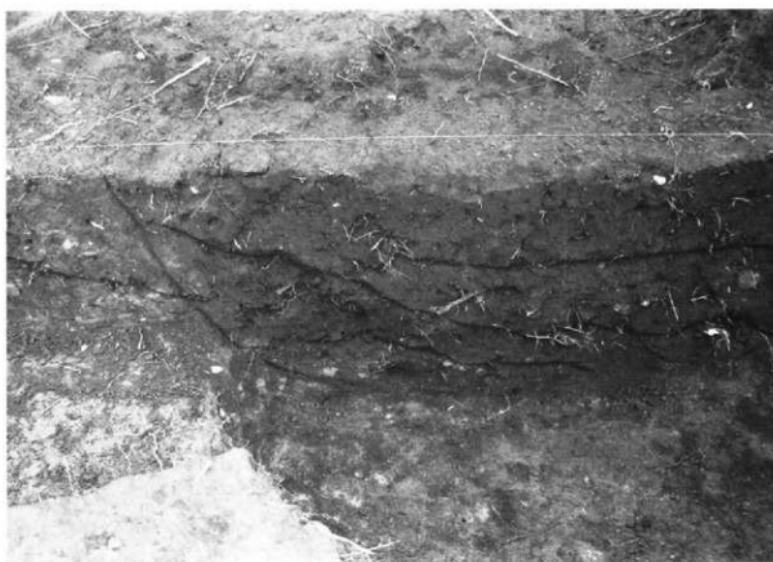


▲FY5-2区セクション状況（東方から）

図版11 (第3次調査)



▲DY 42 セクション状況（南東から）



▲DY 42・DY 43 重複関係セクション状況（南東から）

図版 12 (第 3 次調査)

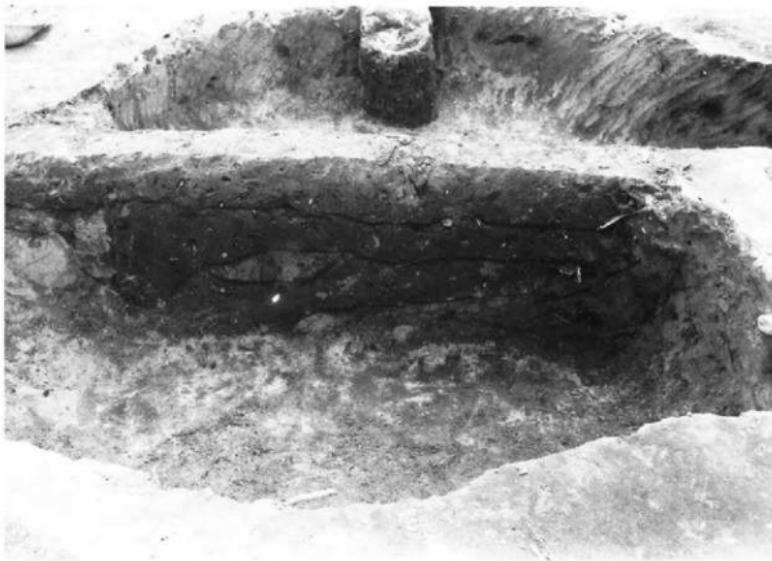


▲FY17 セクション状況（南方から）



▲FY3 セクション状況（西方から）礫層が FY3

図版 13 (第 3 次調査)



▲DY43 セクション状況（北方から）



▲DY42・DY43 セクション状況（南方から）

図版 14 (第 3 次調査)



▲DY82 上面礫出土状況（北方から）



▲DY82 セクション状況（北方から）

図版 15 (第 3 次調査)

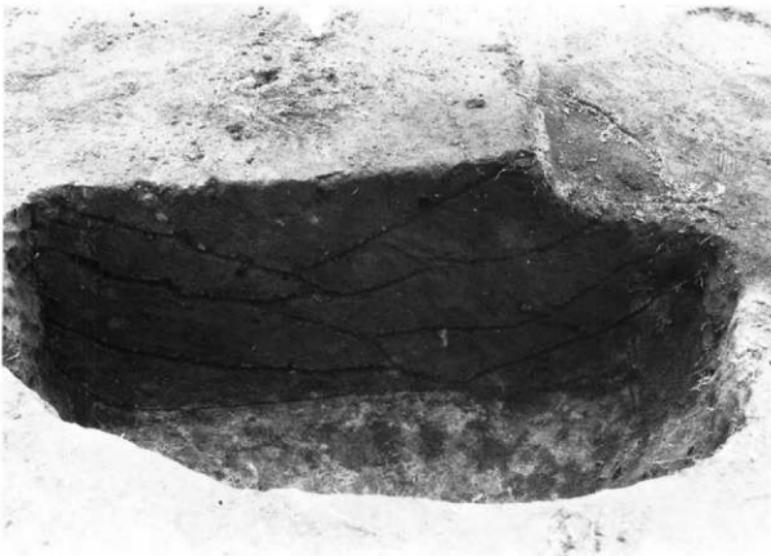


▲DY177 セクション状況（南方から）

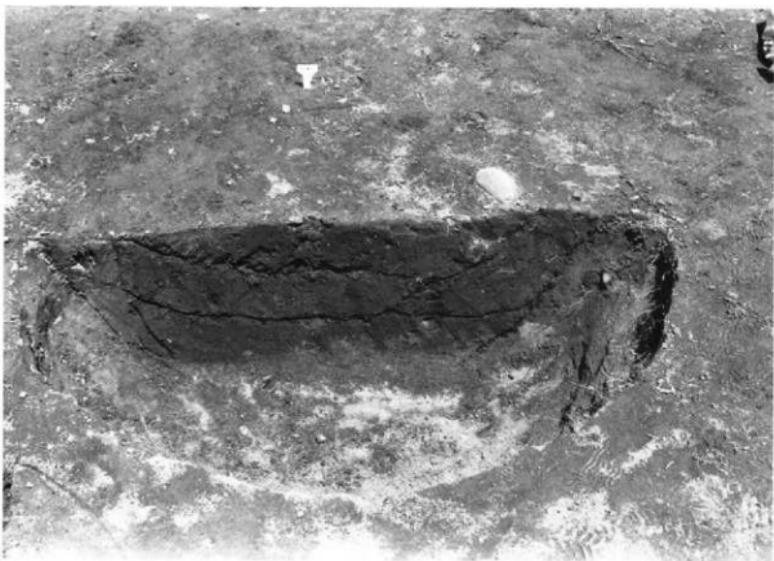


▲DY194 セクション状況（南方から）

図版 16 (第 3 次調査)



▲DY38 セクション状況（南方から）

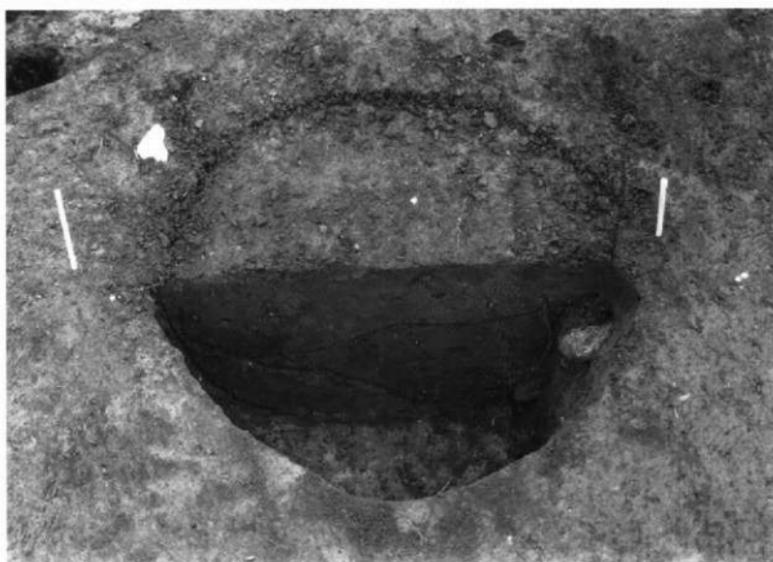


▲DY83 セクション状況（南方から）

図版 17 (第 3 次調査)

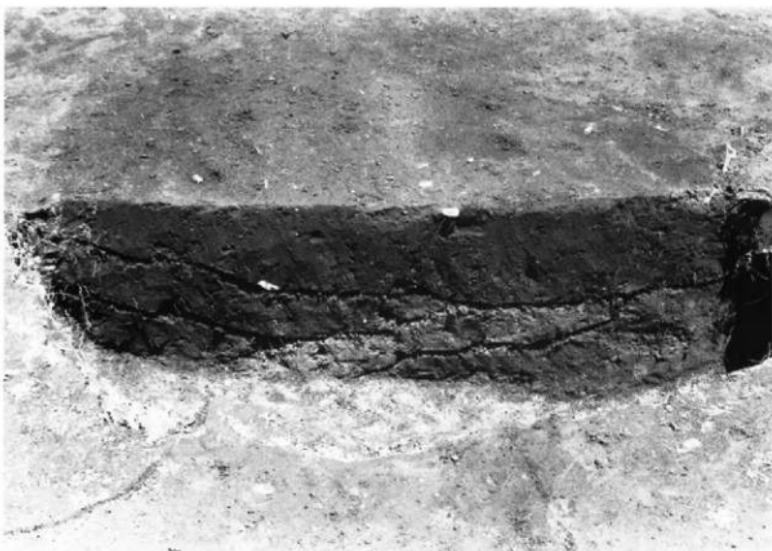


▲DY49 セクション状況（南方から）



▲DY36 セクション状況（南方から）

図版 18 (第 3 次調査)



▲DY 84 セクション状況（南方から）



▲DY 47 セクション状況（南方から）

図版 19 (第 3 次調査)



▲DY 63 セクション状況 (東南から)



▲DY 114 セクション状況 (北東から)

図版 20 (第 3 次調査)

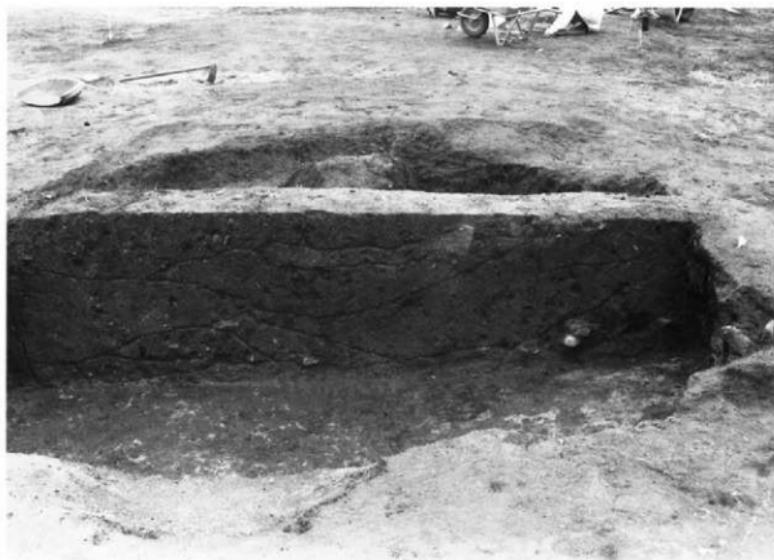


▲KY1・DY177 セクション状況（南方から）



▲KY1・DY177 セクション状況近景（南方から）

図版 21 (第 3 次調査)



▲FY6 セクション状況（西南から）



▲DY15 セクション状況（南方から）

図版 22 (第 3 次調査)



▲ DY 198 完掘状況（西南から）



▲ DY 120 遺物出土状況（南西から）

図版 23 (第 3 次調査)



▲DY 47 完掘状況 (北方から)



▲DY 76 完掘状況 (東方から)

図版 24 (第 3 次調査)

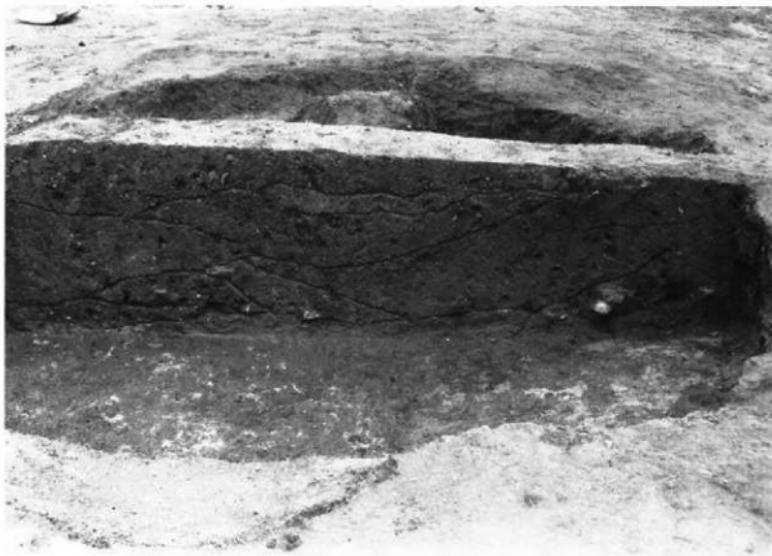


▲ DY 49 完掘状況（東方から）



▲ DY 47 完掘状況近景（西方から）

図版 25 (第 3 次調査)



▲FY16 重複関係セクション状況（西方から）



▲調査区北東部完掘状況

図版 26 (第 3 次調査)



▲ AZ 4 繩文早期の土器出土状況（北西から）

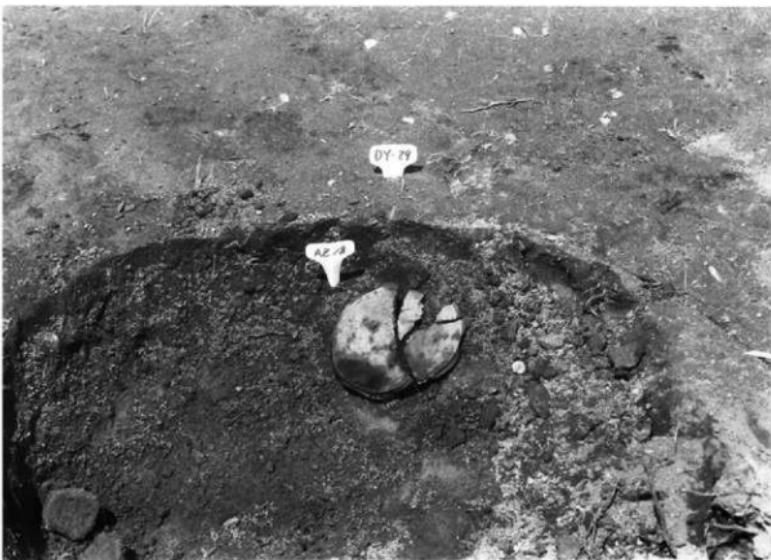


▲ AZ 13 繩文後期の土器出土状況（西南から）

図版 27 (第3次調査)



▲DY 82 遺物出土状況（北方から）



▲DY 29 遺物出土状況（北方から）

図版 28 (第 3 次調査)



▲DY 47 遺物出土状況（南東から）



▲DY 11 セクション状況（南東から）

図版 29 (第 3 次調査)



▲DY 47 遺物出土状況（南東から）



▲DY 63 遺物出土状況（北東から）

図版 30 (第 3 次調査)



▲DY 102 遺物出土状況（西北から）



▲DY 102 遺物取り上げ後の出土状況（西北から）

図版 31 (第 3 次調査)

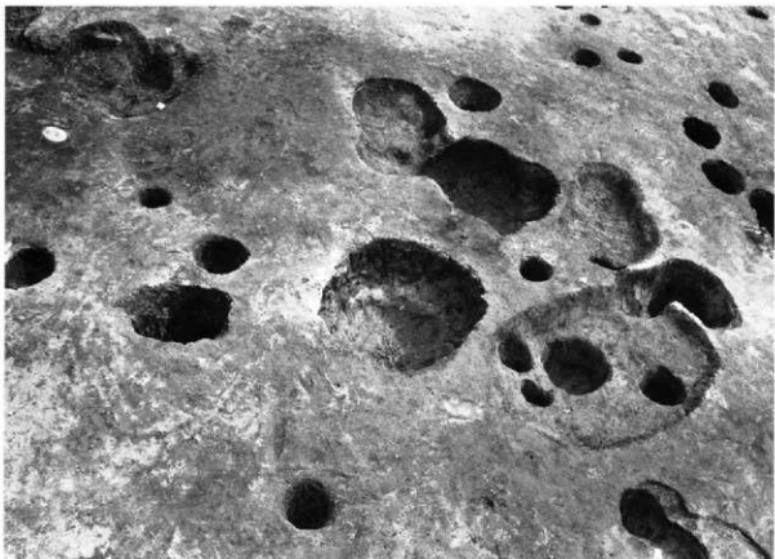


▲調査区西南完掘風景



▲調査区東方完掘風景

図版 32 (第 3 次調査)



▲調査区西南完掘風景



▲FY6 完掘風景 (西方から)

図版 33 (第 3 次調査)



▲調査区西南完掘風景



▲DY 47・DY 49 完掘風景 (北東から)

図版 34 (第 3 次調査)



▲調査区西方完掘風景



▲調査区東南角完掘風景

図版 35 (第 3 次調査)

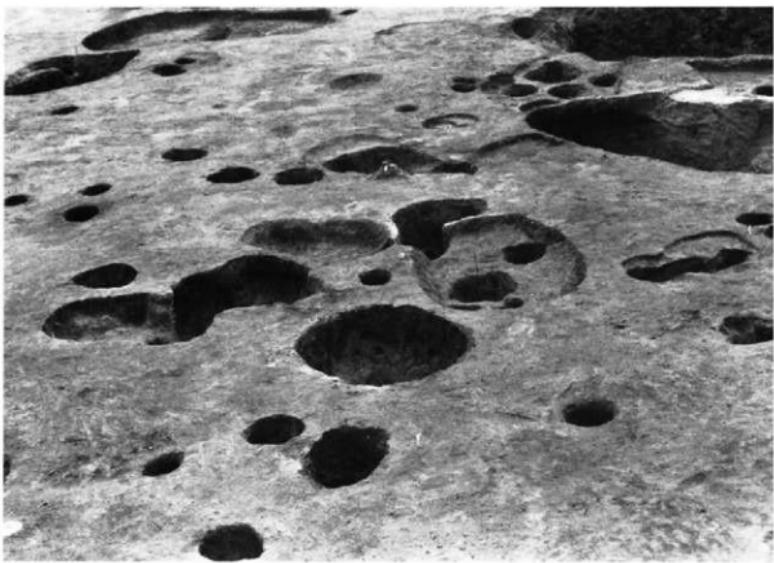


▲調査区北西角完掘風景



▲DY 42・DY 43・DY 194 完掘風景（南東から）

図版 36 (第 3 次調査)



▲DY 32を中心とする土壤群（西南から）



▲完掘状況（東方部）

図版 37 (第 3 次調査)



▲完掘状況北東角



▲完掘状況北西角

図版 38 (第 3 次調査)



▲DY 200を中心とする土壤群（南方から）



▲DY 91 完掘状況（南方から）

図版 39 (第 3 次調査)



▲調査区西方完掘状況



▲FY17 完掘状況（西方から）

図版 40 (第 3 次調査)



▲北東完掘状況



▲FY176 完掘状況 (西方から)

図版 41 (第 3 次調査)



▲DY127 完掘状況（南方から）



▲南西部調査状況

図版 42 (第 3 次調査)



▲DY6を中心とする土壤群（西方から）



▲調査区北東部完掘状況

図版 43 (第 3 次調査)



▲調査区東部完掘状況



▲調査区南西部完掘状況

図版 44 (第 3 次調査)



▲調査区南部完掘状況



▲調査区北東完掘状況

図版 45 (第 3 次調査)

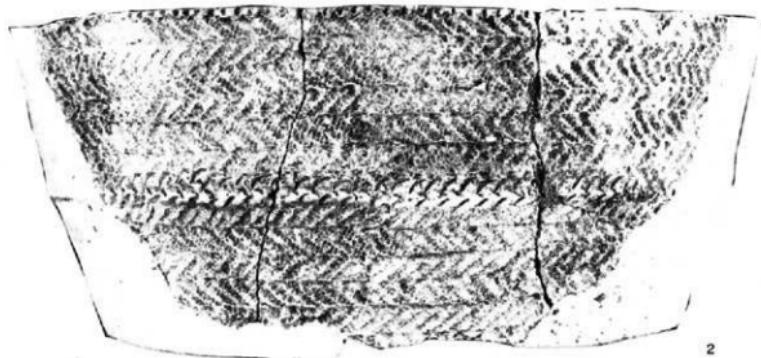


▲調査区西北完掘状況



▲DY 62・63 完掘状況 (南東から)

図版 46 (第3次調査)



復元土器

図版 47 (第3次調査)



3



4



5



6

復元土器

図版 48 (第 3 次調査)



図版 49 (第 3 次調査)



7



8



12



14



9



10



11



15

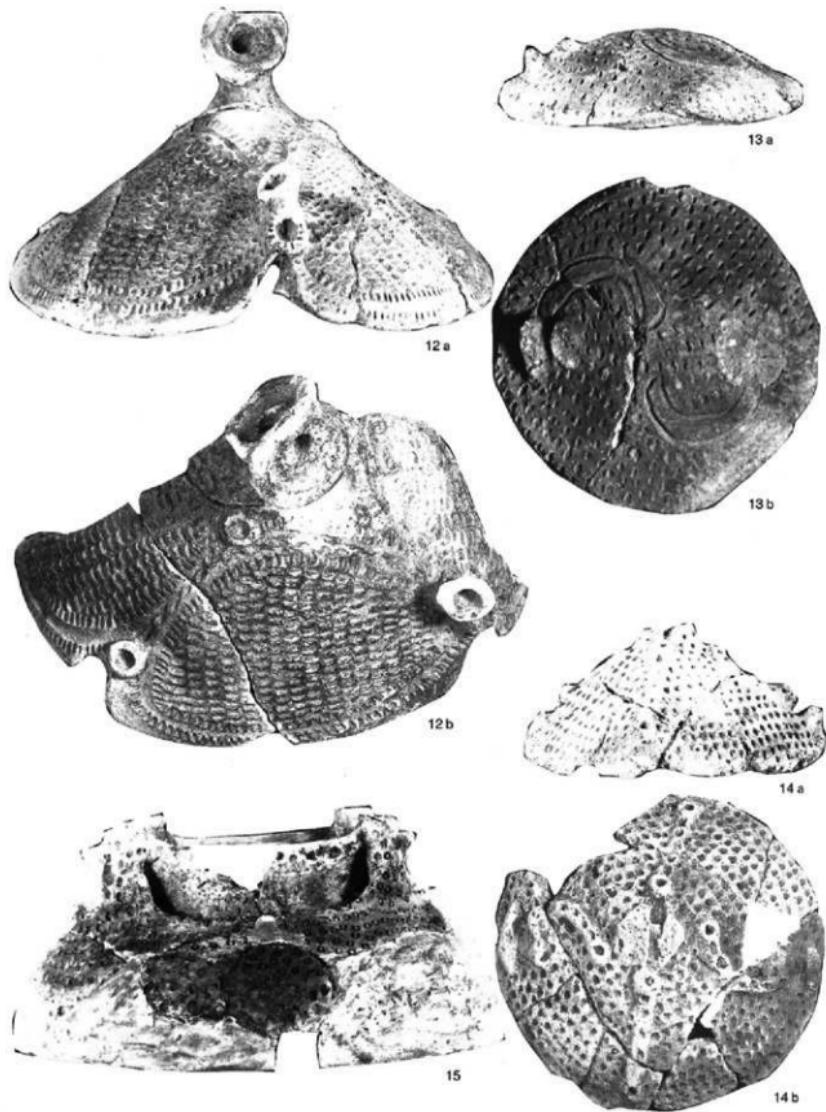
13



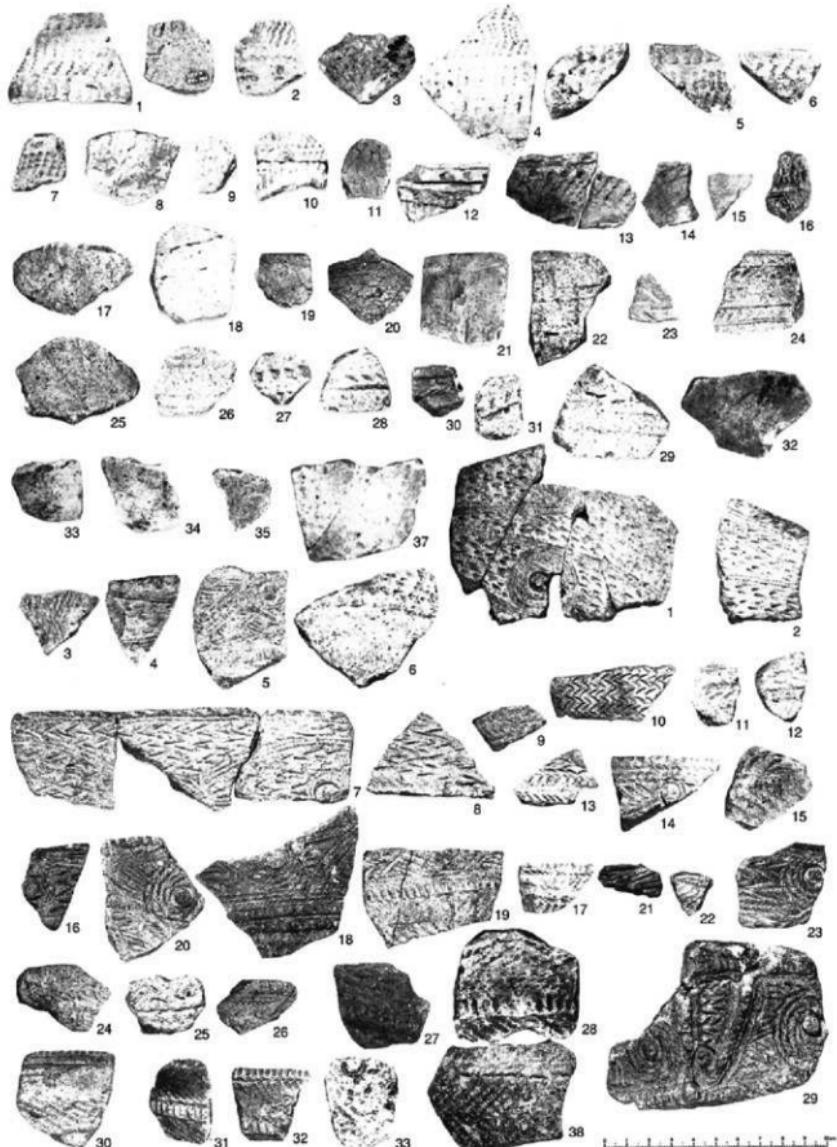
9

復元土器

図版 50 (第3次調査)

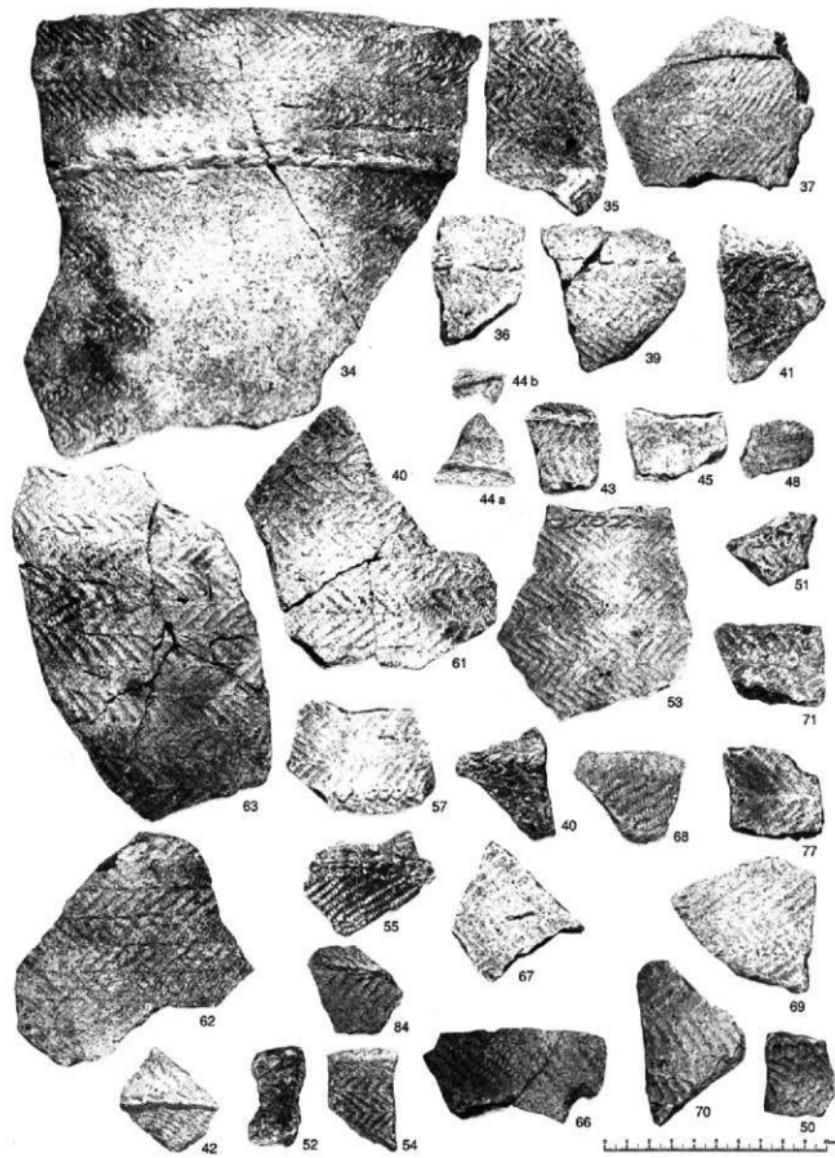


図版 51 (第 3 次調査)



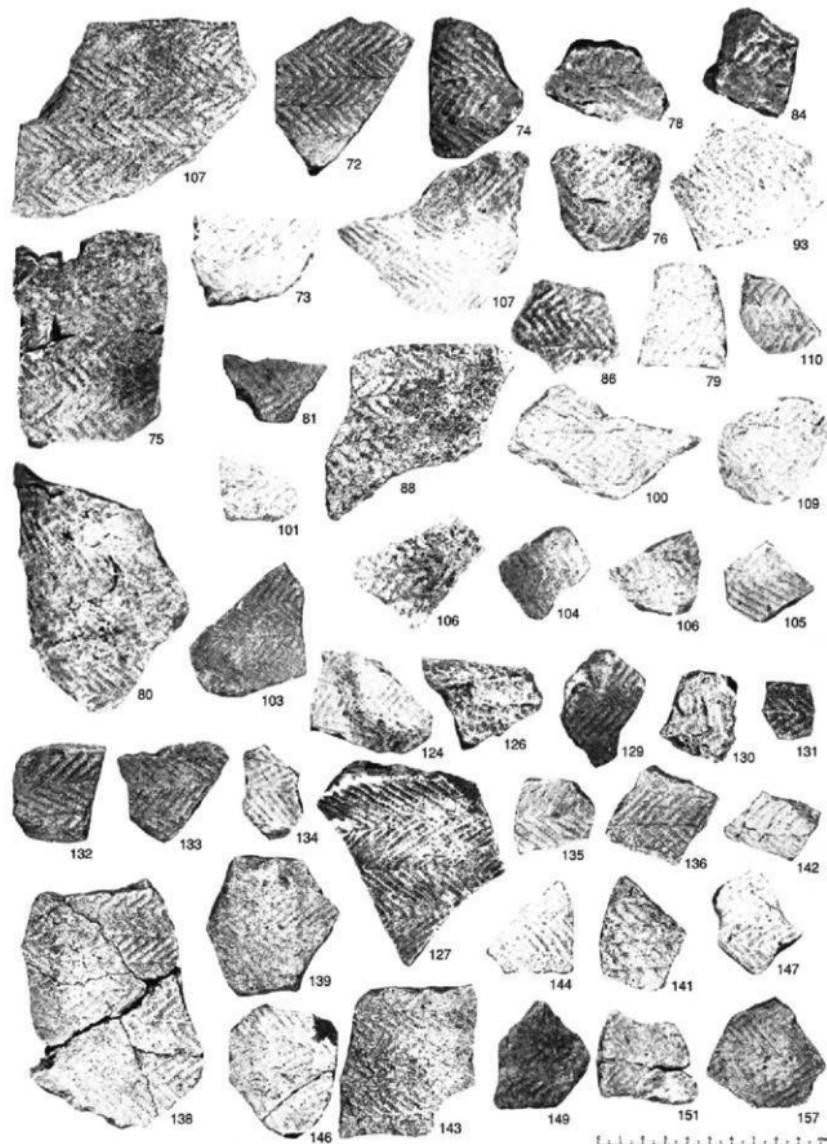
出土土器

図版 52 (第 3 次調査)



出土土器

図版 53 (第3次調査)



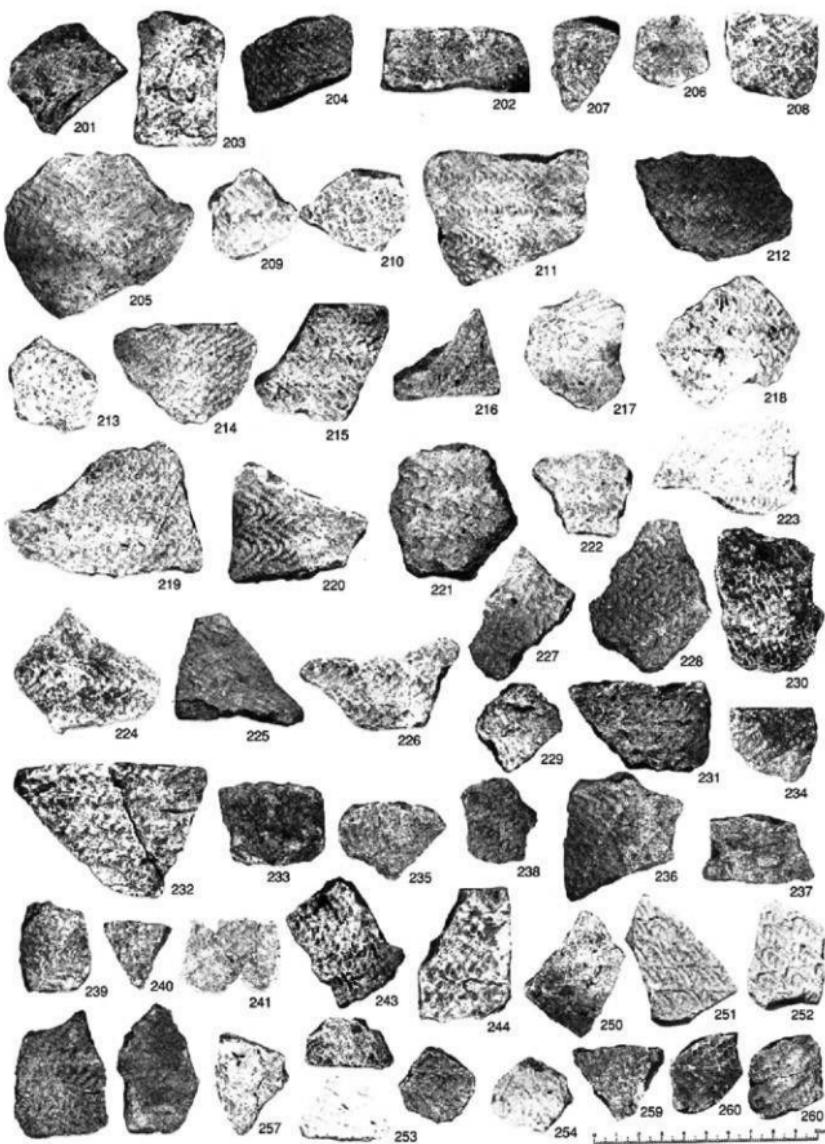
出土土器

図版 54 (第3次調査)



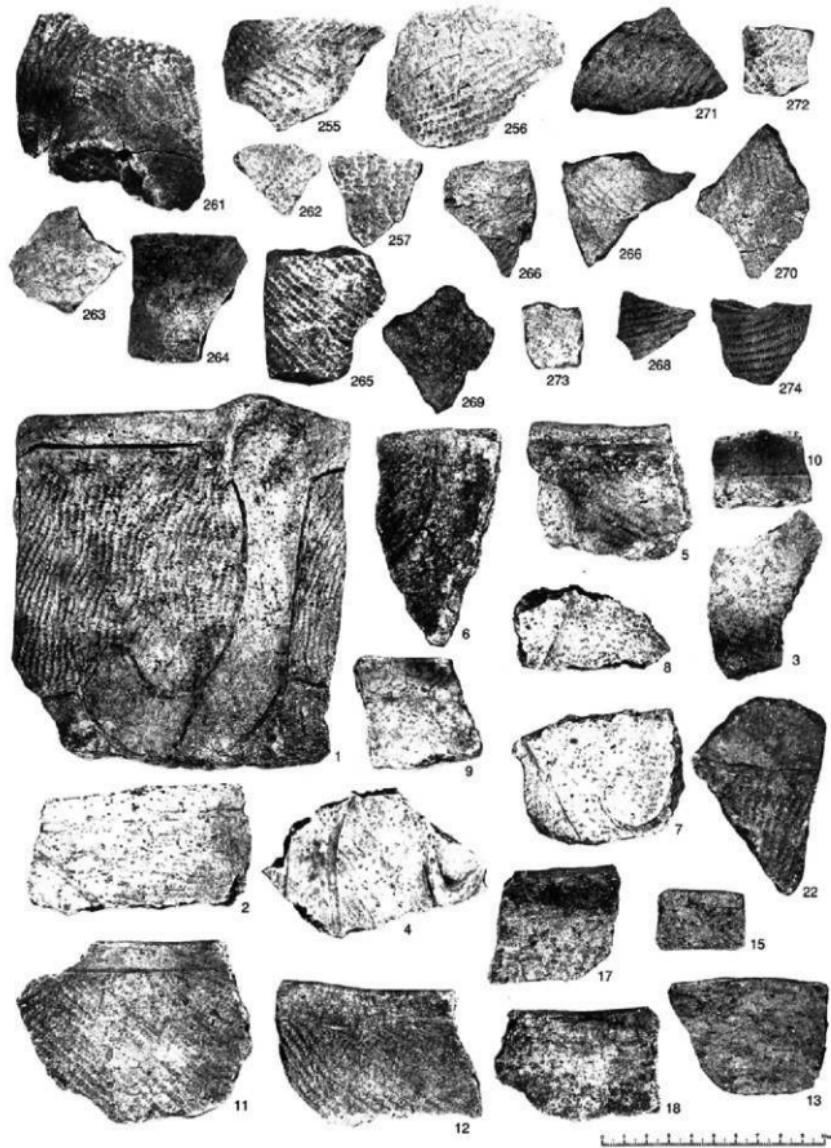
出土土器

図版 55 (第3次調査)



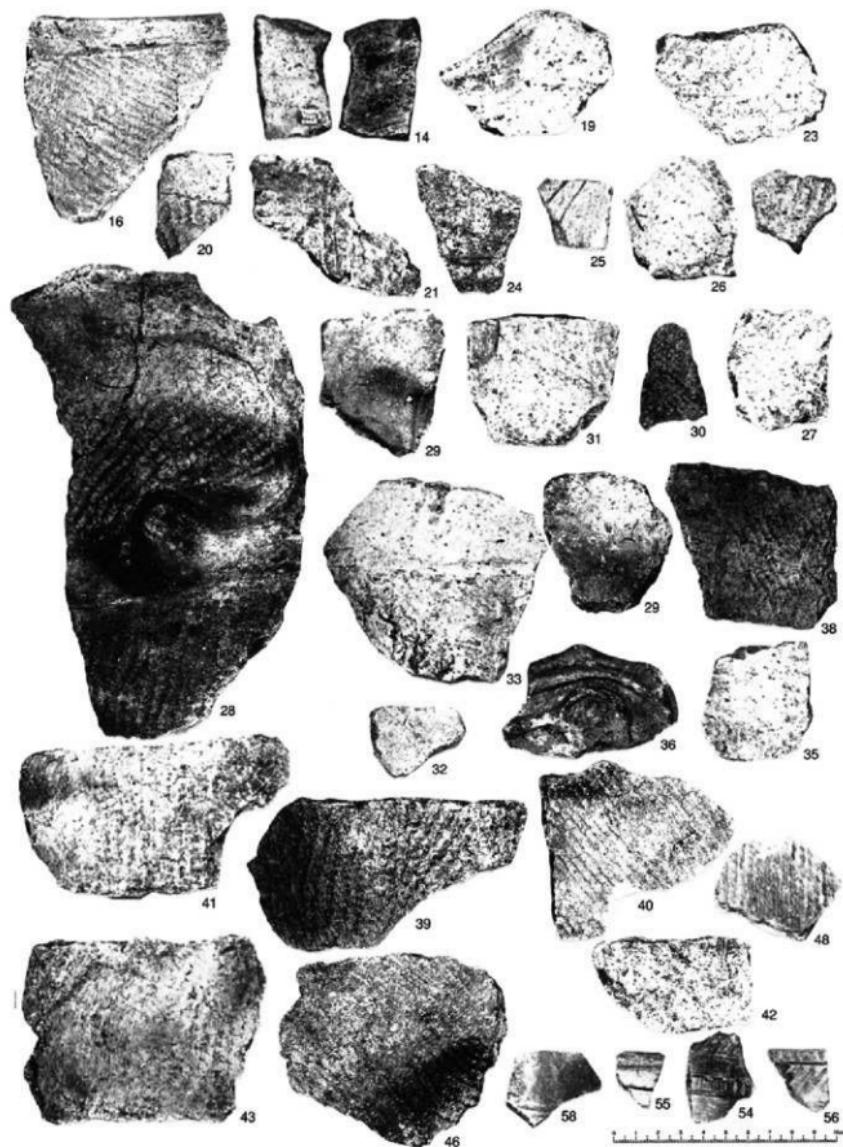
出土土器

図版 56 (第3次調査)



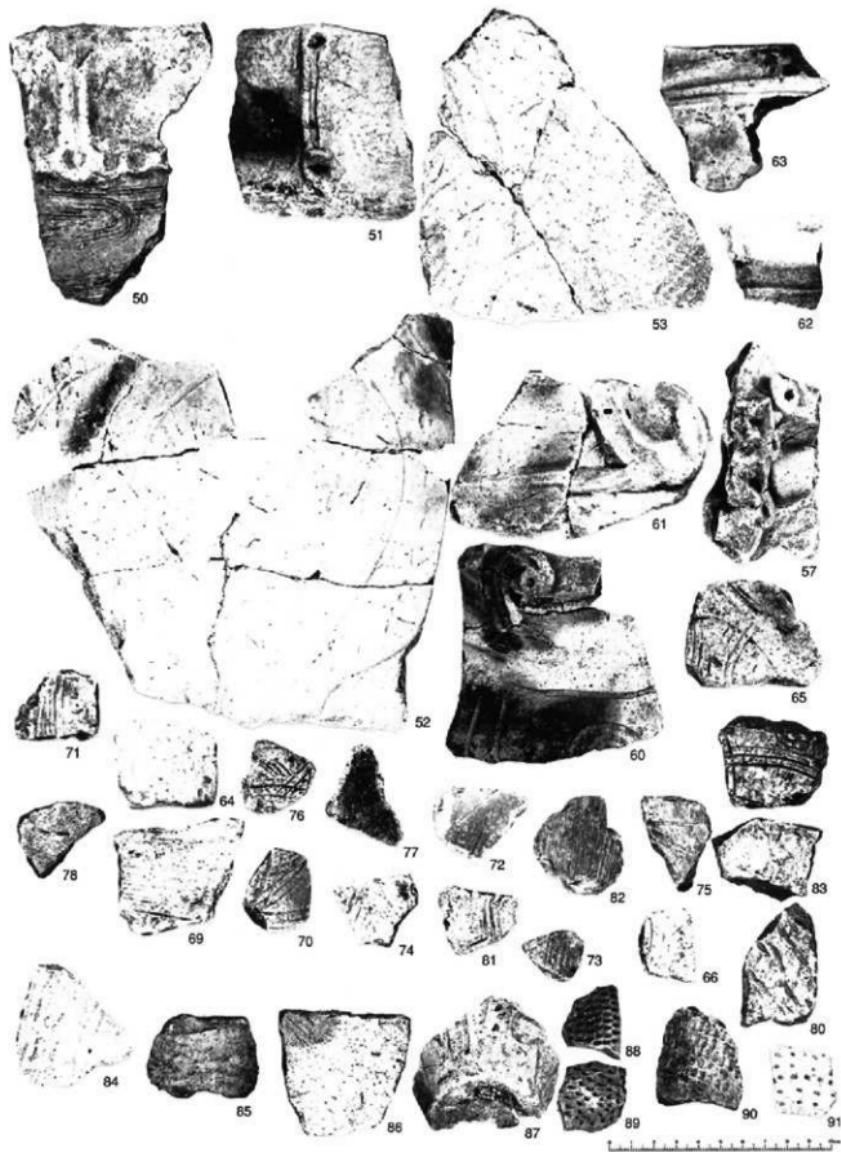
出土土器

図版 57 (第3次調査)



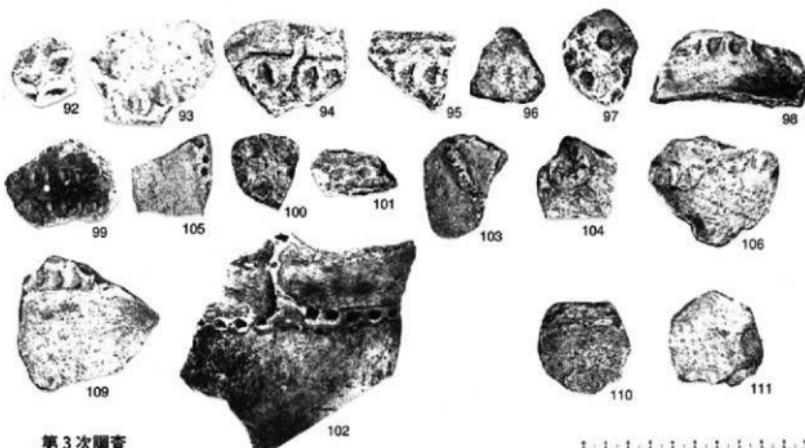
出土土器

図版 58 (第3次調査)



出土土器

図版 59 (第 2・3 次調査)

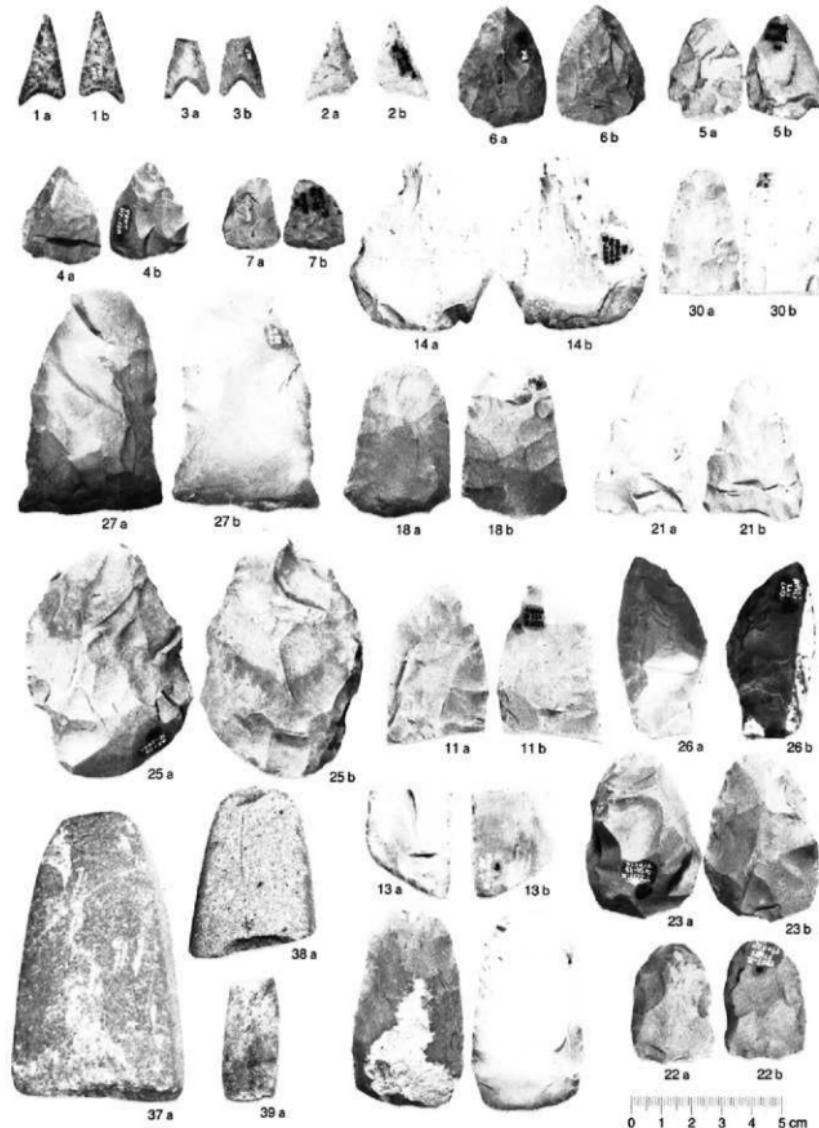


第3次調査



第2次調査

図版 60 (第3次調査)



出土石器

米沢市埋蔵文化財調査報告書第62集

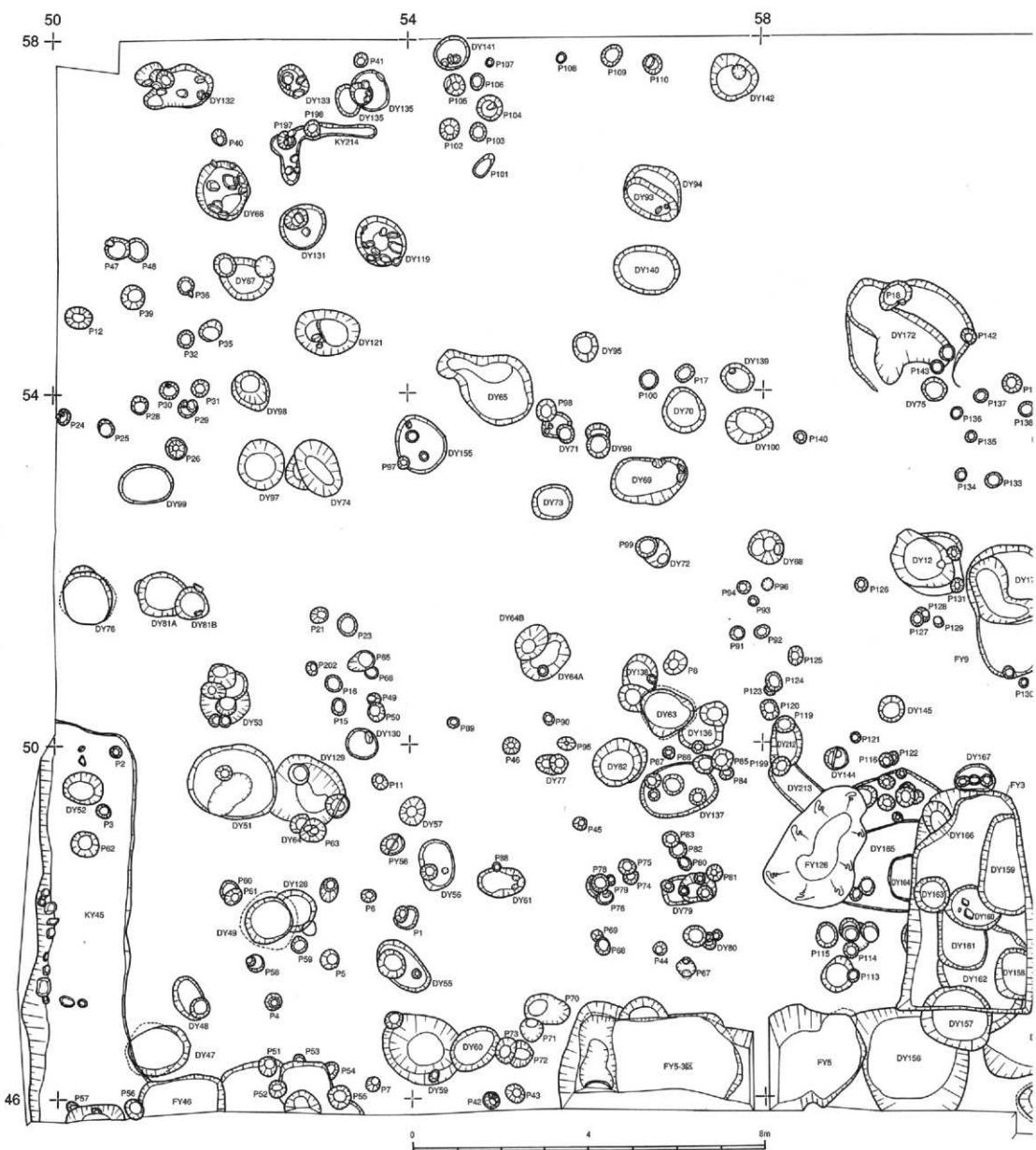
## 大樽遺跡発掘調査報告書

平成11年3月25日 印刷

平成11年3月30日 発行

発 行 米沢市教育委員会  
米沢市金池三丁目1-55  
TEL (0238) 22-5111  
(内線 7504)

印 刷 株式会社よねざわ印刷  
米沢市城西二丁目3-72  
TEL (0238) 21-1212(代)  
FAX (0238) 22-3565



付図 大樽遺跡第3次調査区遺構全体図

